静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第130集

勝田井の口遺跡

平成13年度　勝間田川地方特定河川整備事業（空港関連）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

【正誤表】

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第130集

勝田井の口遺跡

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願い致します。

頁	誤	正	（貼込用）
19頁　表3　遺構名	ＳＦ65	ＳＦ67	ＳＦ67
	ＳＦ67	ＳＦ65	ＳＦ65
32頁　表9　21-05備考	元住吉山Ⅱ式	宮滝式古段階	宮滝式古段階
33頁　表10　21-62備考	大洞Ｂ式	御経塚式	御経塚式
51頁　表15　34-13器種	鉢	小型甕	小型甕
51頁　表15　34-21～34-30器種	甕	壺	壺
奥付	平成13年1月31日	平成14年1月31日	平成14年1月31日

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第130集

勝田井の口遺跡

平成13年度　勝間田川地方特定河川整備事業（空港関連）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回の調査は勝間田川地方特定河川整備事業（空港関連）に伴い、平成13年4月から6月にかけて実施した。勝田井の口遺跡が所在する榛原町は、静岡県南西部にあり、駿河湾の西岸に位置している。町域の北から西にかけて全国的に茶の生産地として知られる洪積台地の牧之原台地が立地しており、これを坂口谷川や勝間田川などが開析し、流域に扇状地や谷底平野を形成している。勝間田川周辺には、これまでに縄文時代中期の勝田神社前遺跡、桃原古墳群、大ヶ谷横穴群、「生玉部里人」と記した墨書土器が出土した道ノ上遺跡、土器谷窯、国人領主勝間田氏により築かれた勝間田城など多くの遺跡が分布する。

調査の結果、中世の土坑墓、溝状遺構、そして、縄文時代晩期の土坑墓が検出された。また、石鏃の完成品・未完成品・原石・剥片が多く出土しており、石鏃を製作していた場と考えられる。周辺における縄文時代晩期の調査例は少なく、榛原地域の縄文時代晩期の集落を考える上で、貴重な資料を提供することができた。

最後に、調査並びに報告書作成に当たっては、静岡県教育委員会文化課、静岡県御前崎土木事務所、榛原町教育委員会等の関係諸機関各位に感謝するとともに、現地調査に参加した調査員・作業員の労苦をねぎらいたい。

2002年1月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1. 本書は、静岡県榛原郡榛原町勝田字井の口に存在する勝田井の口遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、勝間田川地方特定河川整備事業（空港関連）に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県御前崎土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成13年４月から平成13年6月まで現地調査を実施した。資料整理は平成13年7月から平成13年9月まで行った。

3. 調査体制は次のとおりである。
   平成13年度　　所長　斉藤忠　副所長　山下晃　常務理事　粂田徳幸
   総務課長　本杉昭一　総務係長　山本広子
   調査研究部長　佐藤達雄　調査研究二課長　篠原　修二
   調査研究員　田中　淳　井鍋　誉之

4. 現地での基準点測量は（株）フジヤマ、空中写真は（株）朝日航洋に委託した。

5. 一部の石器の実測・トレース作業は（株）パスコに委託した。

6. 本書で使用した遺構の表記は次の通りである。
   ＳＤ　溝状遺構　ＳＦ　土坑　ＳＨ　掘立柱建物　ＳＸ　不明遺構

7. 遺物実測図の縮尺は土器が1/3、金属器、石製品が1/1・1/2・1/3で統一をはかった。

8. 鉄製品及び有機質遺物の保存処理は保存処理室室長西尾太加二が実施した。また、遺物写真撮影は、当研究所職員がおこなった。

9. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管する。

10. 本書の執筆は、調査研究員　井鍋誉之がおこなった。

11. 付編は、西尾太加二、当研究所技術員伊藤純子が執筆した。

12. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所がおこなった。

13. 現地および資料整理においては元浜松市博物館館長向坂鋼二氏、日本考古学協会会員加藤賢二氏にご指導いただいた。また、静岡大学名誉教授伊藤通玄氏には石材の鑑定をいただいた。

14. 発掘調査及び報告書作成に当たっては、榛原町教育委員会、御前崎土木事務所方々には特にご協力いただいた。

目 次

序
例言

第Ⅰ章　調査の概要・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第３節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第Ⅲ章　遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第１節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第Ⅳ章　まとめ・・・52
付編　中世ＳＦ－1出土の有機質遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

挿表目次

第1図　榛原町位置図・・・・・・・・・・1
第2図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・3
第3図　調査区と周辺地形図・・・・・・4
第4図　グリッド配置図・・・・・・・・6
第5図　勝間田川周辺地質図・・・・・・7
第6図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・9
第7図　基本土層図・・・・・・・・・・10
第8図　縄文・古墳時代遺構全体図　・・11
第9図　1区　西半部遺構配置図・・・・12
第10図　1区　東半部遺構配置図・・・・13
第11図　1区　縄文土坑実測図（1）・・・15
第12図　1区　縄文土坑実測図（2）・・・16
第13図　1区　縄文土坑実測図（3）・・・18
第14図　1区　SH－1実測図・・・・・・20
第15図　2区　遺構全体図・・・・・・・21
第16図　1区　中世遺構全体図・・・・・24
第17図　1区　SD－1・2 実測図・・・・25
第18図　1区　SD－1・2出土遺物　・・・25
第19図　1区　中世SF－1土坑実測図　・・26
第20図　1区　中世SF－1出土遺物・・・・26
第21図　縄文土器（1）・・・・・・・・・29
第22図　縄文土器（2）・・・・・・・・・31
第23図　縄文土器（3）・・・・・・・・・32
第24図　石器（1）・・・・・・・・・・・36
第25図　石器（2）・・・・・・・・・・・37
第26図　石器（3）・・・・・・・・・・・38
第27図　石器（4）・・・・・・・・・・・39
第28図　石器（5）・・・・・・・・・・・40
第29図　石器（6）・・・・・・・・・・・41
第30図　石器（7）・・・・・・・・・・・42
第31図　石器（8）・・・・・・・・・・・43
第32図　石器（9）・・・・・・・・・・・44
第33図　石器（10）・・・・・・・・・・45
第34図　古墳時代前期の土器・・・・・・48
第35図　中世遺物（1）・・・・・・・・・49
第36図　中世遺物（2）・・・・・・・・・49
第37図　石鏃製作工程図・・・・・・・・54
第38図　有機質遺物実測図・・・・・・・57
第39図　漆膜断面構造模式図・・・・・・57

挿表目次

表1　調査工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・5
表2　遺跡地名表・・・・・・・・・・・・・・・・・8
表3　土坑計測表　・・・・・・・・・・・・・・・・19
表4　ＳＨ－１計測表　・・・・・・・・・・・・・・19
表5　1区　ピット、土坑計測表（1）・・・・・・・22
表6　1区　ピット、土坑計測表（2）・・・・・・・23
表7　銭貨計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・27
表8　鉄釘計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・27
表9　縄文土器観察表（1）　・・・・・・・・・・・32
表10　縄文土器観察表（2）　・・・・・・・・・・・33
表11　縄文土器観察表（3）　・・・・・・・・・・・34
表12　出土石器点数表　・・・・・・・・・・・・・35
表13　石器観察表（1）　・・・・・・・・・・・・・46
表14　石器観察表（2）　・・・・・・・・・・・・・47
表15　古墳～中世土器観察表（1）　・・・・・・・・51
表16　石器組成　・・・・・・・・・・・・・・・・52
表17　石鏃型式別出土比率　・・・・・・・・・・・52
表18　石鏃の石材比率　・・・・・・・・・・・・・53

図版目次

図版1　1　遺跡遠景（南西より）　2　1・2区　調査区全景（西より）
図版2　1　1区　全景（南西より）
図版3　1　1区　西半部全景（東より）　2　1区　東半部全景（西より）
図版4　1　1区　集石土坑2（北より）　2　1区　ＳＨ-１全景（南より）
図版5　1　1区　ＳＤ-1・2　全景（南東より）　2　1区　中世　ＳＦ-1完掘状況（北より）
図版6　縄文土器（1）
図版7　縄文土器（2）
図版8　縄文土器（3）　石鏃（1）
図版9　石鏃（2）　石錐・使用痕のある剥片・スクレイパー
図版10　打製石斧
図版11　磨製石斧　小型磨製石斧　石剣　軽石
図版12　石錘　磨石　石皿　敲石
図版13　石器集合写真
図版14　古墳時代前期の土器
図版15　中世土器集合写真
図版16　山茶碗・白磁・青磁
図版17　内耳鍋・常滑産甕　志野皿　有機質遺物　銭貨　釘

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

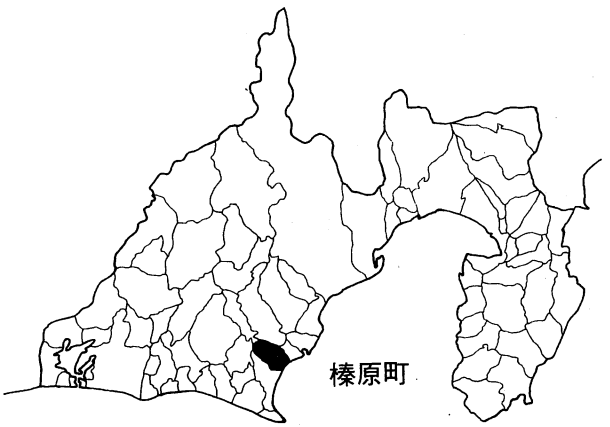
榛原町内では近年、静岡空港の建設に伴い、周辺地域の河川改修が行われており、平成11年度より勝間田川でも中流域の河川改修工事が実施されている。今回の開発予定地内において地元の考古学愛好家である増田功聿氏により打製石斧、土器片が採集された。この周辺は、遺跡の包蔵地ではなかったが、増田氏は遺跡の可能性があることを榛原町教育委員会に連絡し、町教育委員会は、静岡県教育委員会文化課に遺跡の取扱いについて協議した。そこで県教委文化課は御前崎土木事務所と協議し、埋蔵文化財の有無の試掘・確認調査を実施することになった。確認調査は平成12年3月より文化課の指導のもと、相良町教育委員会の協力を得ながら、榛原町教育委員会により確認調査が実施された。3m～４m四方のテストピットを計11箇所設定し、重機で表土除去したのち、人力で掘削し、遺構の有無を確認する方法がとられた。その結果、2箇所のテストピットにおいて縄文時代後期から晩期にかけての遺構・遺物が確認された。そして、平成12年12月に静岡県御前崎土木事務所、静岡県教育委員会文化課、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の3者による協議がもたれ、開発対象地の1300㎡が調査範囲となることが確認され、字名から勝田井の口遺跡と呼称した。緊急を要したことから、平成13年度4月～6月にかけて現地調査を実施した。

第2節　調査の方法

記録化の便宜上、調査対象地全域に10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは、東西方向にのびる調査区に沿う形で、西から東へ、北から東へ数字及びアルファベットを付けた。各グリッドは、これらの組み合わせで表記することとした。このグリッド基軸線は任意で設けたものであり、国土座標（平面直角座標Ⅷ系）とは異なる。基点はC12（X-136117.256 Y-29446.332）、C3（X-136120.494 Y-29536.346）となる。

現地では、交点に杭を打設し頂部に釘を打ち、釘頂部に標高を測定した上で、これをもとに遺構及び遺物の標高を測量した。

遺物の取り上げは、光波測定器を使用した。土器・石器は残存状況が良好なもの以外は各グリッドの出土層位別に一括して取り上げるか遺構を単位として取り上げた。遺物番号は原則1点ごと付けたが、グリッド、遺構一括で取り上げた遺物は、取り上げた単位で付番した。なお、遺構・遺物の表記は例言に示したとおりである。遺構平面図は縮尺1/20を基本とし、詳細図が必要な場合は縮尺1/10で作成した。写真撮影は４×５判（モノクロ・カラーリバーサル）６×７判（モノクロ・カラーリバーサル）を併用し、作業工程記録用に35ｍｍ判（カラーネガ）を使用した。遺構全景写真は、ローリングタワーとラジコンヘリを使用して撮影した。なお、基礎



第1図　榛原町位置図

整理作業である遺物洗浄、遺物注記作業は現地作業と併行して行った。

調査区は川沿いということもあり、特に、雨天時には調査区内に雨水が溜まるため、水中ポンプを使用し、勝間田川及び用水路に排水した。掘削にあたって、１区南側は盛土のため、調査区境界に法面に勾配をつけ、崩落防止に努めた。川に面した北側は、鋼矢板を打ち込み、勝間田川の流水を防いだ。

調査開始時における表土除去は重機（バックフォー）を使用し、この時、生じた排土はダンプカーにより土捨て場に搬出した。また、調査中に、調査区東側一体が旧勝間田川の流路であることが判明し、遺構が確認されなかったため人力で生じた排土は、この調査区東側に仮置きした。２区は、表土除去を重機で行い、生じた排土は調査区内に仮置きした。調査終了後はただちに埋め戻した。

第3節　調査の経過

確認調査

確認調査は、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、榛原町教育委員会が、相良町教育委員会の協力を得ながら行った。事業予定地内に３ｍ四方のテストピットを11箇所設定し、重機で掘削した。その結果、2カ所のテストピットから遺物の包含層が確認された。協議の結果、調査範囲は1300㎡となり、本調査にあたって、鋼矢板と表土除去は、県教委文化課と埋文研の立会いのもと御前崎土木事務所が行った。

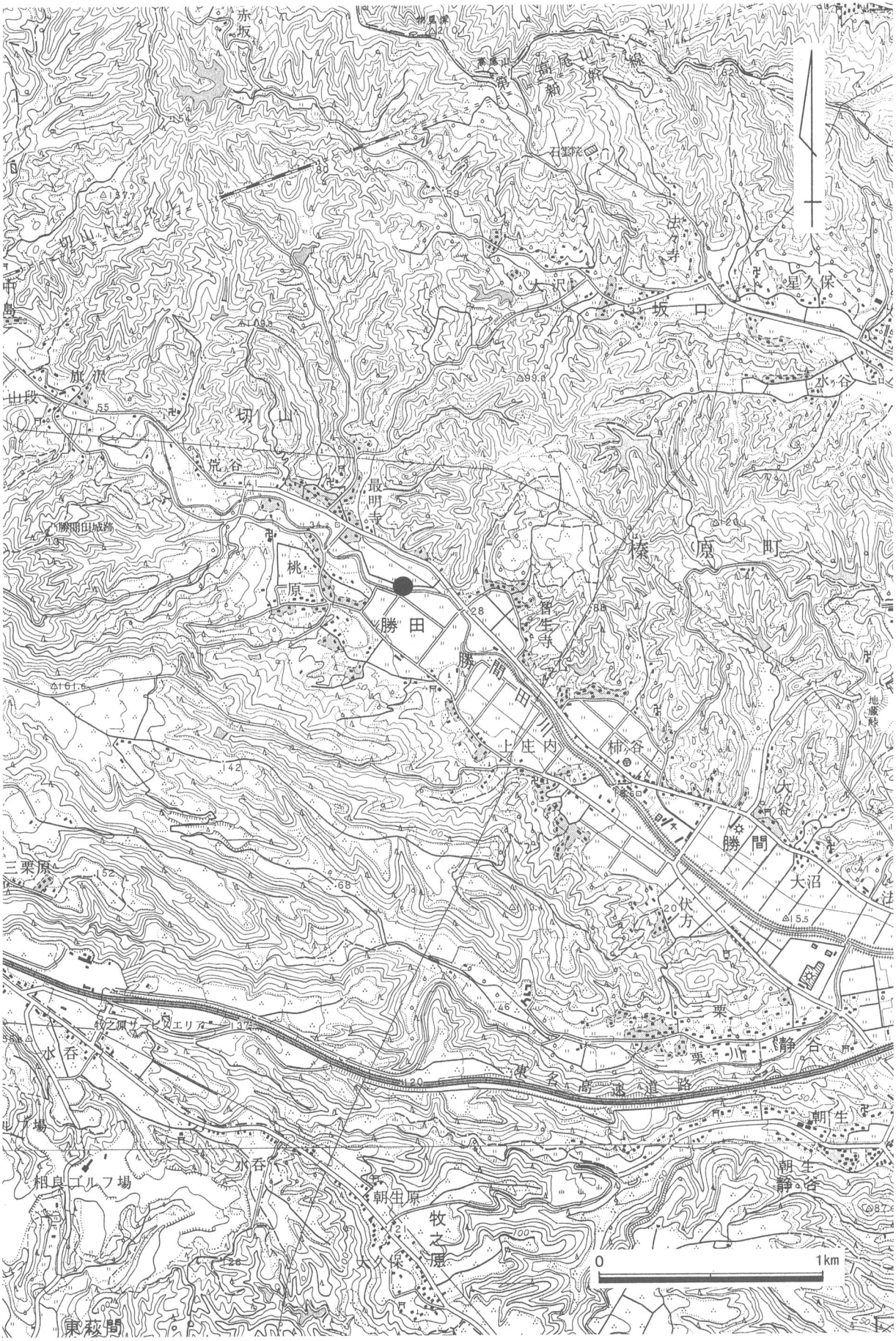
本調査

平成13年4月第1週から発掘資機材を事務所に搬入した。すでに、確認調査で、１区は表土除去が行われていたため、下部の土層確認のため重機を使用した。その結果、調査区東端は近代の旧勝間田川流路であることが判明し、排土の仮置き場にした。ただし、地形の変換点で中世の包含層が一部残存していたため、縁辺部の地形を検出することに努めた。また、従来、縄文時代の包含層と考えられていた黒褐色土の上面にて中世の遺構が確認されたため、黒褐色土上面で遺構検出を行った。全域での遺構は検出されなかったが、中世の溝状遺構、土坑墓１基を確認した。

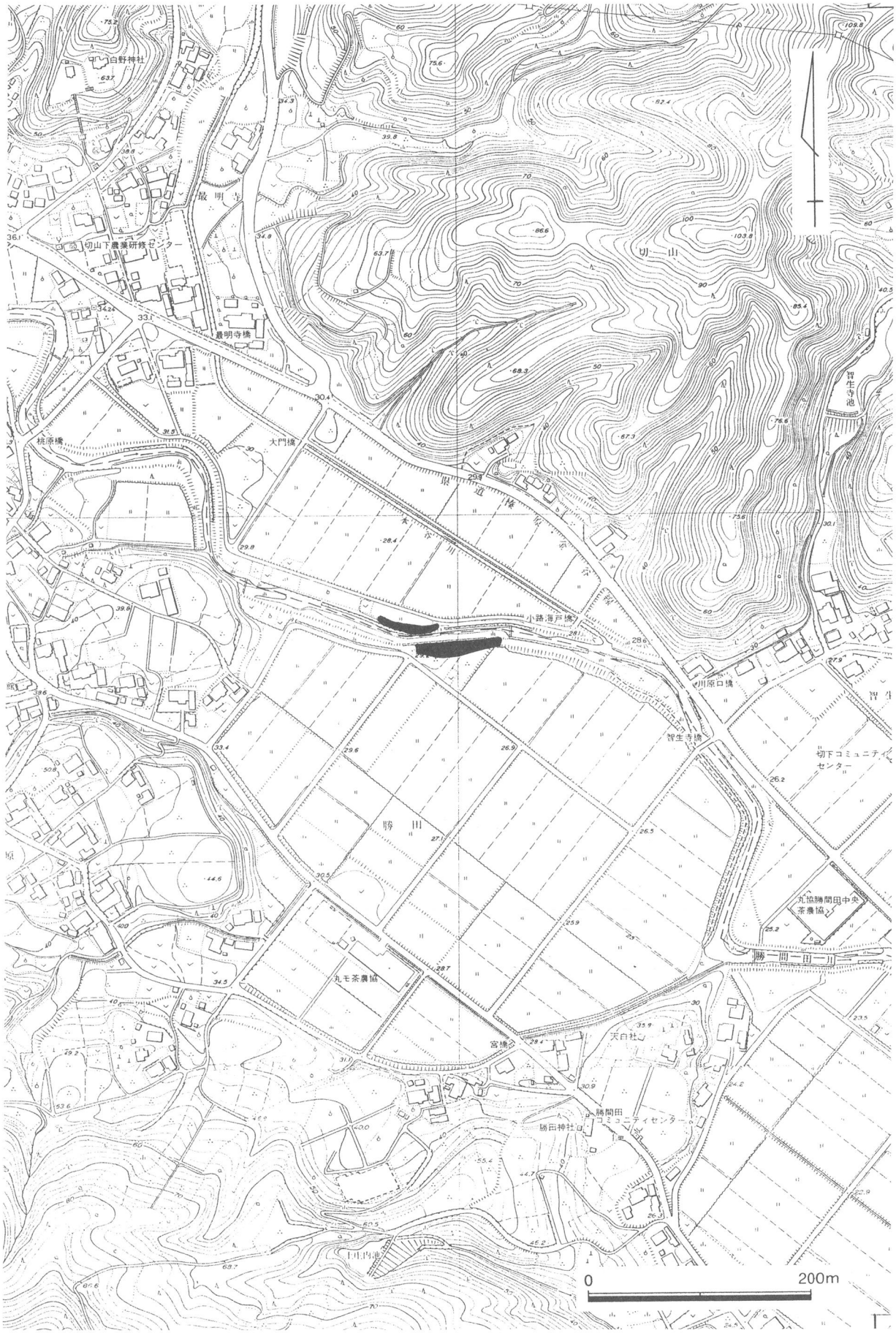
1区の第1遺構面の調査を終え、縄文時代～古墳時代前期の包含層を人力で掘削を開始した。厚さは、深いところで約60cm残存していた。６月は、２区の調査を開始し、重機による表土除去を行った。幅２ｍ長さ70ｍの細長い調査範囲であったが、実際、遺物が包含されていた範囲は、長さ15ｍほどで、厚さは50cm残存していた。その範囲内で溝状遺構、土坑、ピットを確認した。1区の第２遺構面では、縄文時代後期後半～縄文時代晩期前半の土坑、古墳時代前期の掘立柱建物跡１棟を検出した。土坑の覆土は黒褐色砂礫土で、人力では非常に掘りにくく、作業は遅れ気味であった。実測作業は、作業員による手実測を行い、遺構全景写真はローリングタワーを設置し、大型カメラで撮影した。また、遺跡周辺の景観写真は、ラジコンヘリによる撮影を（株）朝日航洋に委託した。6月下旬から雨天が続き、勝間田川の氾濫も予想されたため、調査終了が危ぶまれたが、6月28日には全調査を終了した。また、現地調査と併行して土器、石器の洗浄、注記作業、図面整理作業、写真整理を行った。石鏃、打製石斧などの石器が多く出土したため、石器実測、トレース業務の一部を（株）パスコに委託した。

資料整理

7月より本部にて、本格的な資料整理を行った。縄文土器は分類・接合作業、中世土器は接合・石膏入れを中心に行った。縄文土器については資料的価値の高いもの、特徴的なものを抽出し、拓本、断面実測作業を行った。また、現地で作成した図面から遺構図の版下、トレース作業を行った。8月は、土


赤坂
高尾山
石雲院
法ヶ寺
大沢
坂口
星久保
水ヶ谷
旗沢
山段
切山
荒谷
最明寺
勝間田城跡
桃原
勝田
榛原町
智生寺
勝間田川
上庄内
柿谷
大谷
勝間
大沼
伏方
三栗原
三栗
三栗川
静谷
東名高速道路
朝生
朝生
静谷
水呑
相良ゴルフ場
朝生原
牧之原
大久保
東萩間
0
1km

第2図　遺跡位置図



第3図　調査区と周辺地形図

器、石器などの遺物実測作業を中心に行った。石材鑑定は静岡大学名誉教授の伊藤通玄先生に依頼した。

なお、金属製品については、最初に汚れ、錆を落とした段階で実測作業、写真撮影作業を行った。その後、保存処理を行った。9月は、実測作業が終了した遺物については、立面写真、俯瞰写真などの写真撮影作業、遺物図のトレース作業を行い、報告書掲載用の図版を作成した。

一連の作業が終えたものについては、1点の遺物に対して、カードを作成し、実測図のコピー、調査区、グリット、遺構、法量、図面番号、挿図図版番号、写真図版番号などその遺物の情報を記入した。なお、遺物カードに記載された項目については、パソコンに入力し必要に応じて検索できるようにデータベース化を図った。

また、遺物については、テンバコに収納し、報告書掲載遺物は、挿図番号順に、それ以外は登録番号順に収納した。各テンバコには登録番号挿図番号を記したラベルを添付し、併せて収納台帳を作成し、必要な際はすぐ取り出せるようにしている。

写真1　遺構掘削作業

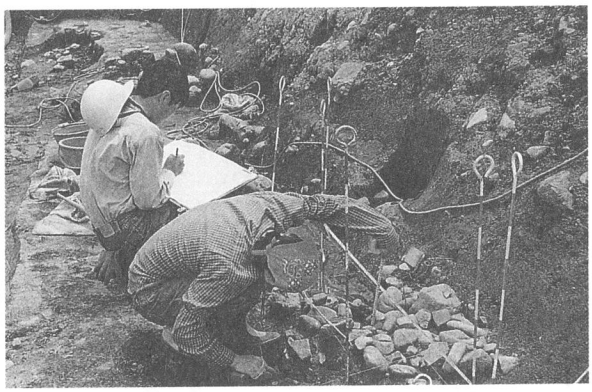
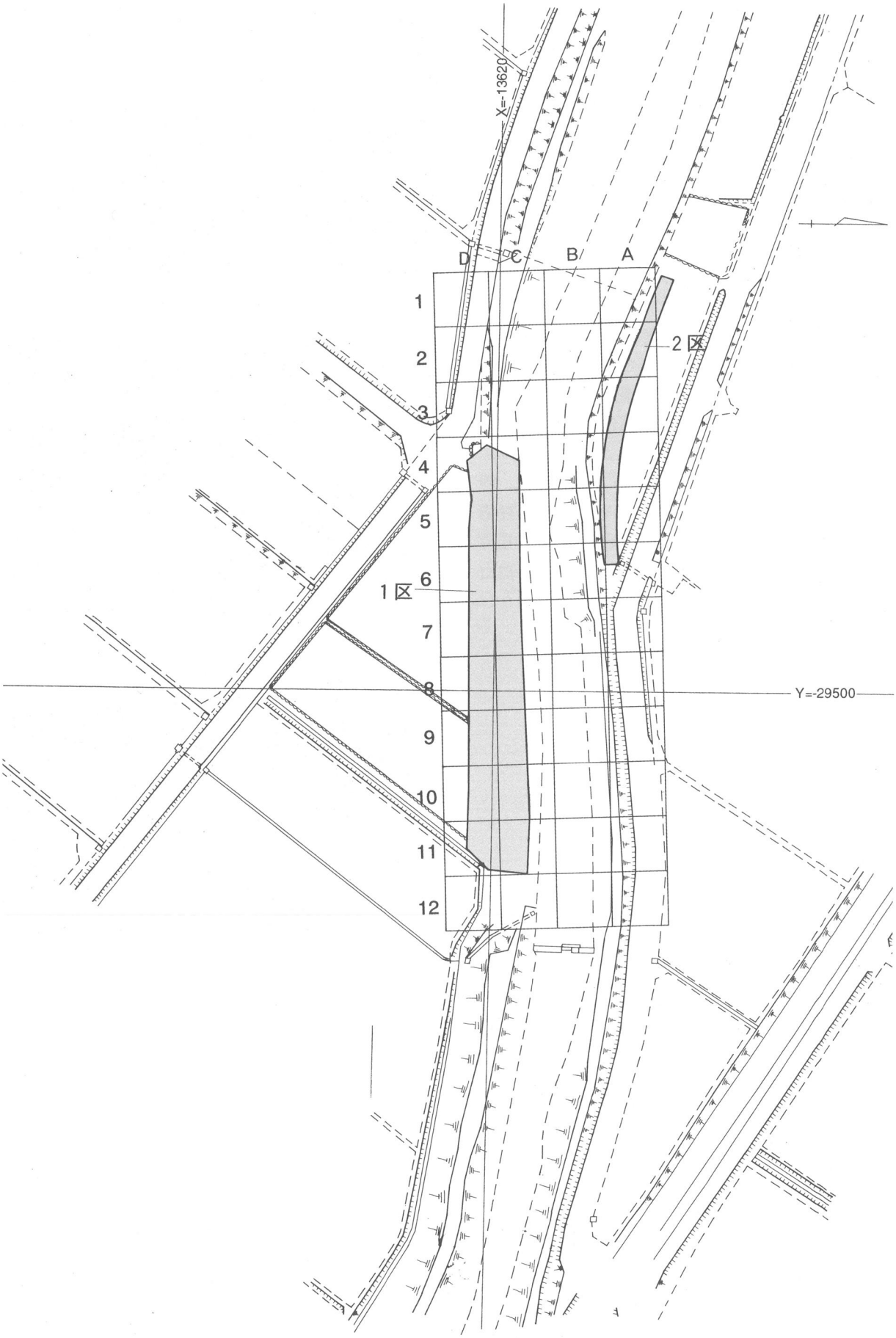


写真2　遺構実測作業

写真3　土器注記作業

表1　調査工程表

区分／時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月
準備・撤去工	→		→			
発掘調査　1区	→	→	→			
2区		→	→			
基礎整理	→	→	→			
事務処理				→		
整理作業				→	→	→



第4図　グリッド配置図

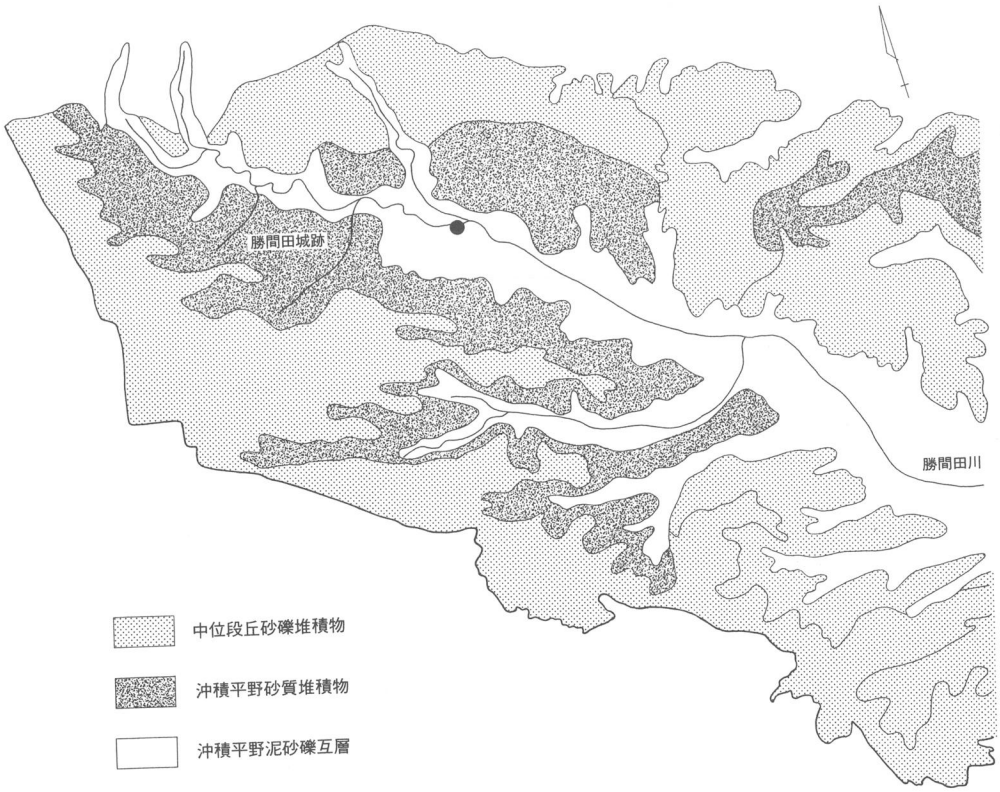
第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

勝田井の口遺跡が所在する榛原町は、静岡県の南西部にあり、駿河湾の西岸に位置している。東に吉田町、北に島田市、金谷町、西に菊川町、南に相良町に接し、現在の榛原郡の中で南に位置する町である。町域の北から西にかけて全国的に茶の生産地として知られる洪積台地の牧之原台地が分布する。これを坂口谷川や勝間田川などが開析し、流域に扇状地や谷底平野を形成している。

牧の原台地は、旧大井川の形成した隆起状扇状地で、金谷から御前崎の先端にかけて南北に連なっている。台地面は大きく3つに分けられ、御前崎に延びる南稜、東南稜、東稜に分かれ、台地面の高度は金谷が最も高く、南、東に向かって低く傾斜している。構造は、褶曲した相良層群や掛川層群などの新第Ⅲ系で、その上に古谷泥層が堆積し、さらに牧の原礫層が載っており、その堆積面が台地面となっている。いずれも、砂岩、頁岩あるいは泥岩の互層するもので、所によっては礫岩も分布する。

勝間田川は、全長約10kmで、北西から南東方向に延びており、狭い谷底平野を形成している。上流域には、河岸段丘が発達し、1段から2段の段丘面がみられる。この段丘面には主として茶園として利用されている。遺跡は、勝間田川の中流域の右岸側で、桃原の段丘面よりさらに低い標高26m～27mの埋没した段丘に立地する。遺跡を形成している基盤は、段丘礫である。そして、現勝間田川左岸側に狭い谷底平野が広がる。下流の沖積平野は、古相良湾の一部が隆起してできた三角州でもあり、大部分が標高10m以下の低地で粘土・シルトが主な堆積物である。沖積面は水田として利用され、微高地部分は畑として利用されている。



第5図　勝間田川周辺地質図

第２節　歴史的環境

榛原町内で現在、最古の遺跡は、縄文時代早期の秋葉山遺跡で、下吉井式土器とともに滑石製丸玉3点、横長石錘が出土している。追廻遺跡は、縄文時代前期の十三菩提式土器から五領ヶ台式土器が採集されている。勝田神社前遺跡は、縄文時代中期の土器が採集されている。弥生時代は、勝間田川の下流域の沖積地に白髭遺跡・西川遺跡などが確認されている。西川遺跡は、弥生時代中期中葉の嶺田式土器、後葉の白岩式土器、後期の菊川式土器が出土しており、その下流には、古墳時代前期に及ぶ白髭遺跡が存在する。

古墳時代後期には谷を取り巻く丘陵上に数多くの横穴式石室墳や横穴が築かれている。その中でも、大ヶ谷横穴群は遠江横穴分布圏の東端にあたり、横穴式石室との分布を考える上で興味深い。

大ヶ谷横穴群は、昭和32年3月に飯塚吾朗氏及び榛原高校地歴クラブにより横穴の測量調査が行われ、須恵器、玉類33点が採集された。次いで、昭和33年8月5日～14日には久永春男氏の指導で榛原高校地歴クラブによる発掘調査が行われ、14基の横穴が確認された。その調査概要は、榛原町史上巻に掲載され、6群38基の横穴が報告されている。その後、詳細に分布調査が行われ、4群12支群合計40基が確認されている。

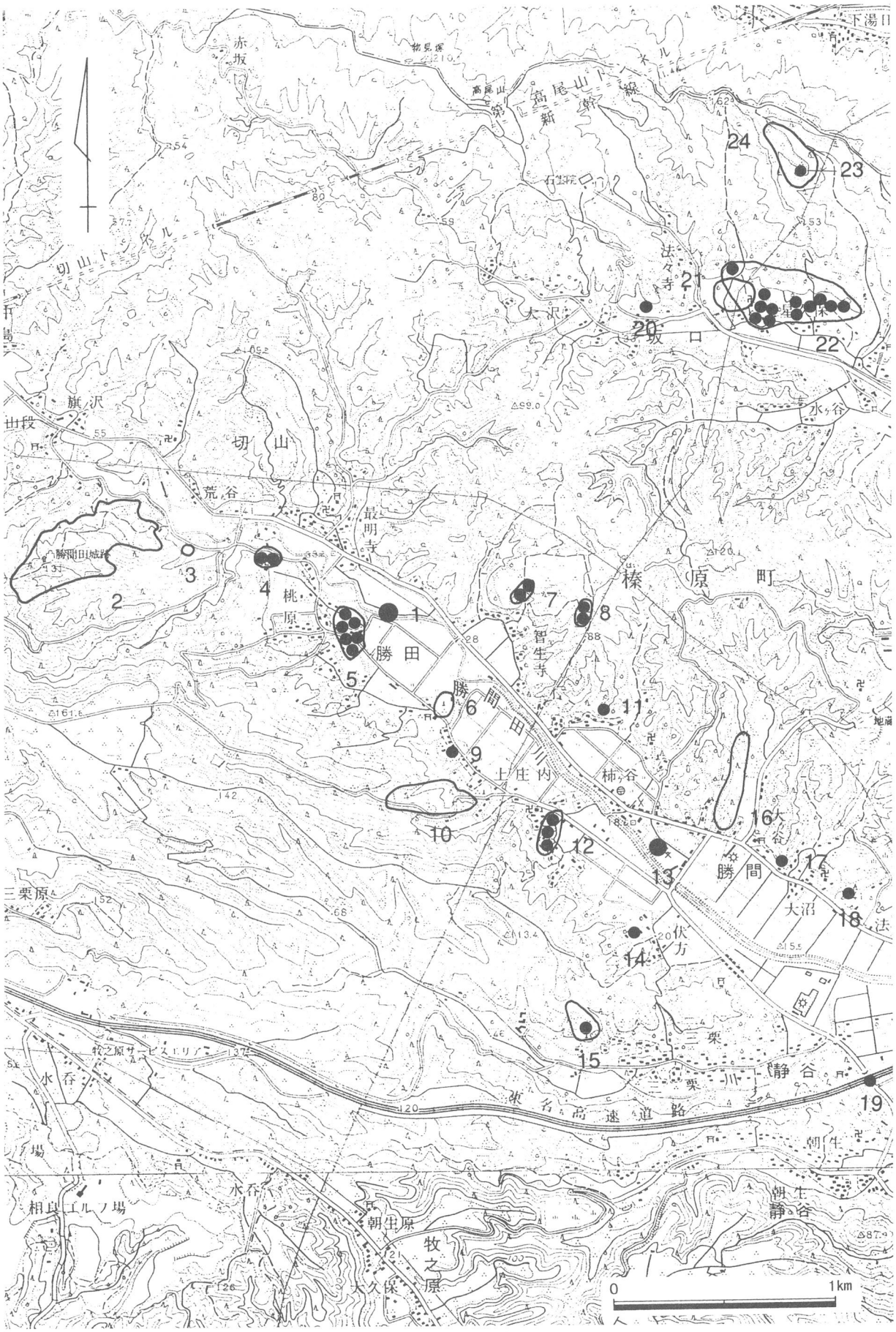
道ノ上遺跡は、勝田小学校の体育館の工事中に発見され、遺構は掘立柱建物跡が検出され、８世紀後半段階の鉄鉢形土器に「生玉部里人」と記された墨書土器が出土している。さらに、下層からは古墳時代後期の土器が出土しており、古墳時代後期から奈良時代の集落の存在を窺わせている。近くの大ヶ谷横穴群との関連性や律令期の集落の性格を考える上で、重要な遺跡であると考えられる。

土器谷窯は、勝田桃原地区に所在し、勝間田城の東側標高50ｍの丘陵斜面部の先端部に位置する。未発掘のため存在する窯跡、窯体の規模・構造については明確ではないが、遺物は多数採集されている。山茶碗Ⅰ期～Ⅲ期の遺物が採集されており、12世紀前半から13世紀前半にかけて継続して操業していたことが窺える。

勝間田城は国人領主勝間田氏により築かれた山城で、文明八年（1476）に今川義忠に落城されたとされる。城跡は、勝田地区内の小山段と称する山地を占め、背後に牧ノ原台地が広がる。尾根を階段式に削平して、直線状に曲輪を配置した連郭式の縄張である。昭和58年に静岡県指定史跡となり、公有地化され保存されている。史跡整備に伴う数次の発掘調査の結果、掘立柱建物跡、井戸状遺構等の遺構群が検出され、出土遺物は、土師質土器、瀬戸・美濃産の陶磁器、白磁・青磁などの貿易陶磁、木簡などが出土している。土器は、大きく13世紀後半～14世紀前半の遺物と15世紀代の2時期に分けられる。16世紀に下る時期のものは認められず、文明八年の落城以後は使用されなかったと考えられている。

表2　遺跡地名表

番　号	遺　跡　名	時　代	性　格	備考	番　号	遺　跡　名	時　代	性　格	備考
1	勝田井の口遺跡	中世・古墳・縄文	集落		13	道上遺跡	奈良・古墳	集落	墨書土器
2	勝間田城	中世	城館	県史跡	14	伏方古墳	古墳	古墳	
3	土器谷窯	中世	古窯	山茶碗	15	大上古墳群	古墳	古墳	
4	瑞昌院古墳群	古墳	古墳		16	大ヶ谷横穴群	古墳	横穴	40基
5	桃原古墳群	古墳	古墳		17	背戸山古墳群	古墳	古墳	
6	勝田神社前遺跡	縄文	散布地	縄文中期	18	法土古墳	古墳	古墳	
7	智正寺古墳群	古墳	古墳		19	八幡下古墳	古墳	古墳	
8	智正寺山古墳群	古墳	古墳		20	作寺古墳	古墳	古墳	
9	向笠古墳	古墳	古墳		21	王屋敷寺院	中世	社寺	
10	庄内城	中世	城館		22	星久保古墳群	古墳	古墳	
11	柿ヶ谷古墳群	古墳	古墳		23	御陣馬古墳	古墳	古墳	
12	権之助屋敷古墳群	古墳	古墳		24	権現様御陣馬遺跡	近世		



赤坂
高尾山
第一高尾山トンネル
新幹線
切山トンネル
法々寺
大沢
坂口
星久保
旗沢
切山
荒谷
最明寺
勝間田城跡
桃原
勝田
勝間田川
智生寺
榛原町
上庄内
柿谷
大谷
勝間
大沼
伏方
三栗原
三栗
三栗川
静谷
東名高速道路
牧之原サービスエリア
水呑
相良エルノ場
朝生原
牧之原
大久保
朝生
静谷
0
1km

第6図　周辺遺跡分布図

第３節　基本層序

勝田井の口遺跡は、地形的に大きく、埋没した段丘面（1区）と沖積地（2区）に分けられる。段丘低位面は、標高27.8ｍ～26.6ｍの範囲に平坦面を形成し、東方向に向かって低く傾斜している。勝間田川左岸側の2区は沖積地が形成されており、狭い調査範囲ではあるが、長さ15ｍの範囲にわたって遺物包含層が残存していた。

1区

第Ⅰ層　盛土　　茶畑の造成土である。

第Ⅱ層　黒褐色粘土　　褐色粒子、礫を僅かに含む。粘性、しまりはやや強い。
12世紀後半から17世紀の遺物包含層である。段丘面上は厚さ15cmを示し、南側の勝間田川の旧流路に30cmの堆積で流れ込んでいた。

第Ⅲ層　青灰色粘土　　赤色粒子、礫を僅かに含む。厚さは段丘礫上面において20cmである。

第Ⅳ層　黒褐色砂礫土　　炭化物を含み、粘性、しまりは弱い。
第Ⅴ層の段丘礫の上面に全面に広がる。縄文時代後期後半から古墳時代前期の遺物包含層である。

第Ⅴ層　褐色砂礫土　　拳大から人頭大の段丘礫を含む。土坑墓やピットを確認した。1区の基盤を成す埋没した段丘礫層である。

2区

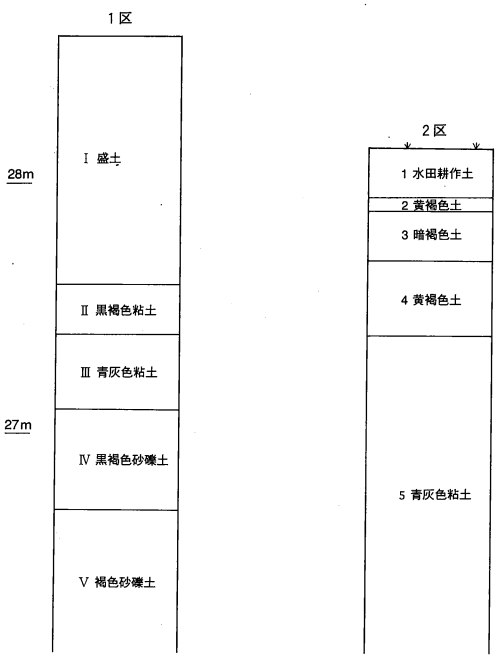
第1層　褐色土　　明治時代以降の水田耕作土である。

第2層　黄褐色土　　黄褐色粒子を含み、厚さ5～10cmの堆積を示す。

第3層　暗褐色土　　炭化物、焼土粒子を含む。粘性、しまりは強い。
古墳時代前期の遺物包含層である。

第4層　黄褐色土　　粘性、しまりは強く、厚さ40cmの堆積を示す。
古墳時代前期の溝状遺構や土坑を確認した。

第5層　青灰色粘土　　粘性、しまりは強い。遺物は出土していない。



第7図　基本土層図

第Ⅲ章　遺構・遺物

第1節　検出遺構

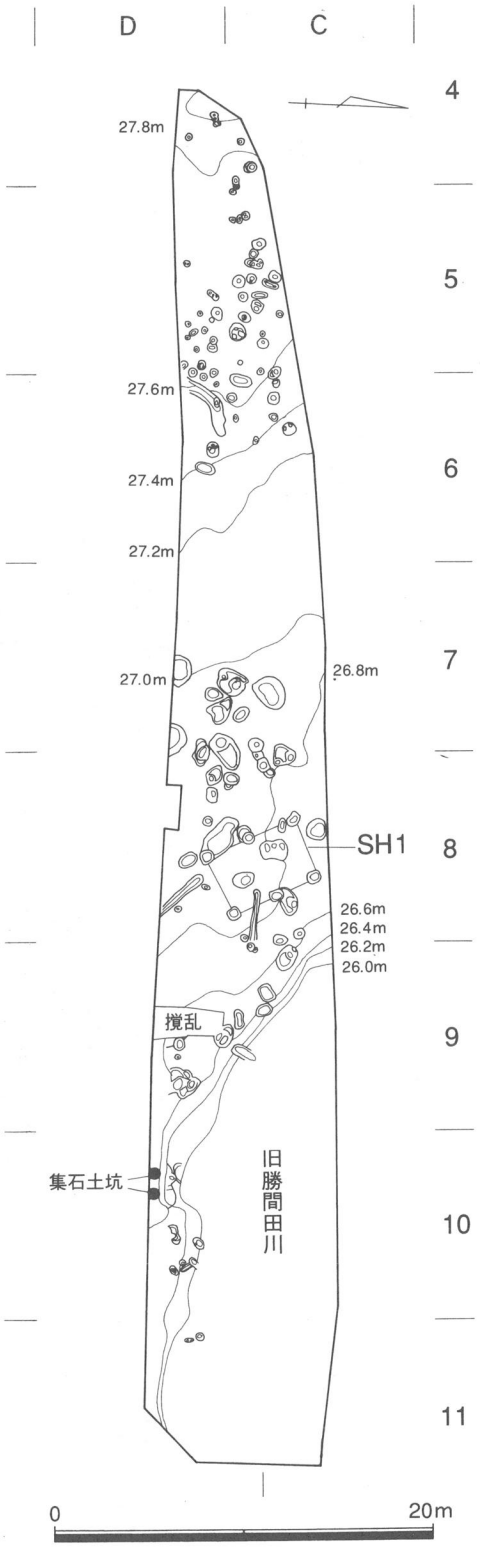
今回、縄文時代に属する遺構・遺物を検出したのは、1区の第Ⅴ層上面である。遺物包含層は第Ⅲ層から第Ⅳ層である。検出した遺構は土坑51基、ピット84基である。土坑は、調査区のD8グリットからD11グリッドにかけて検出した。地盤は段丘礫で構成され、特に土坑を検出した場所は礫が密集した状態であった。このため当初、配石遺構の可能性もあったが、立石や人為的に上面に石を配していない点、地山の礫と覆土の礫が区別できない点などから土坑という認識で調査を行った。土坑は概ね長径140cm～100cm、短径100cm～80cm、深さ20cm～40cmで長楕円形を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で、粘性、しまりは弱く、炭化物、骨粉を微量に含む。この土坑の性格としては覆土に含まれる骨粉、規模等から土坑墓と考えられる。検出された土坑は、大半が切り合っており、C・D7グリッドからC・D9グリッドにかけて集中的に分布する。

勝間田川の左岸側の2区は谷底平野が広がり、縄文時代の遺構が認められない。1区東側と西側は、旧勝間田川の流路で削平されており、縄文時代の遺構は、これらの流路に挟まれた島状の段丘面に立地していたと考えられる。住居跡は今回の調査では検出されておらず、この地形条件より調査区の南側に展開していたと考えられる。集落としては、おおよそ3000㎡ほどの狭い範囲だったと思われる。

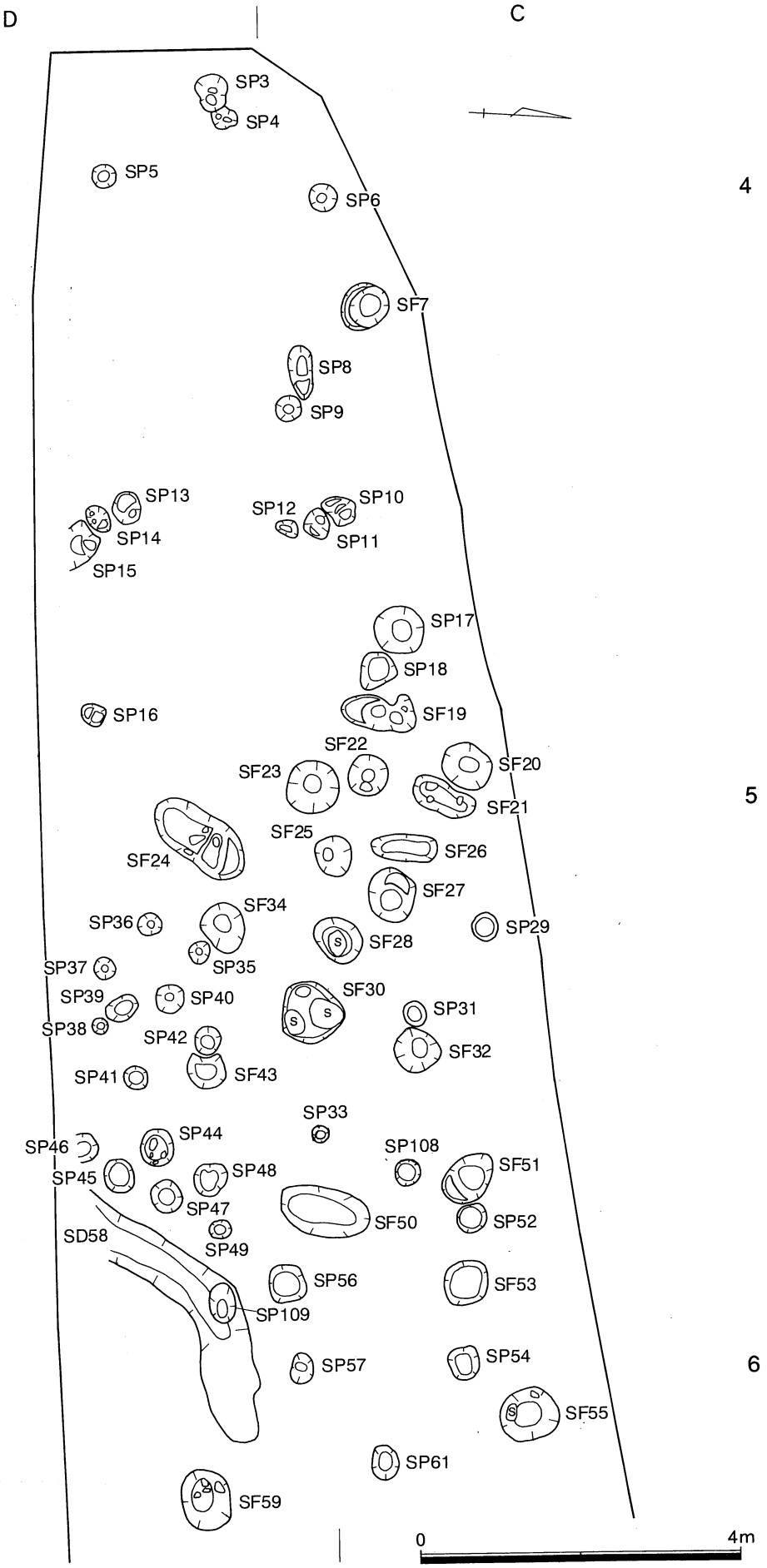
遺物は、土坑内より縄文時代後期後半から晩期前半の土器が少量認められ、石器は、覆土には含まれていない。

集石土坑は調査区南側のD10グリッドからD11グリッドで2基検出した。全体の1/2が調査されているが上面には方形状に石が組まれている。その下部には土坑が検出され、礫は集積していない。覆土には打製石斧、土器が少量出土しているが、その性格は明らかでない。

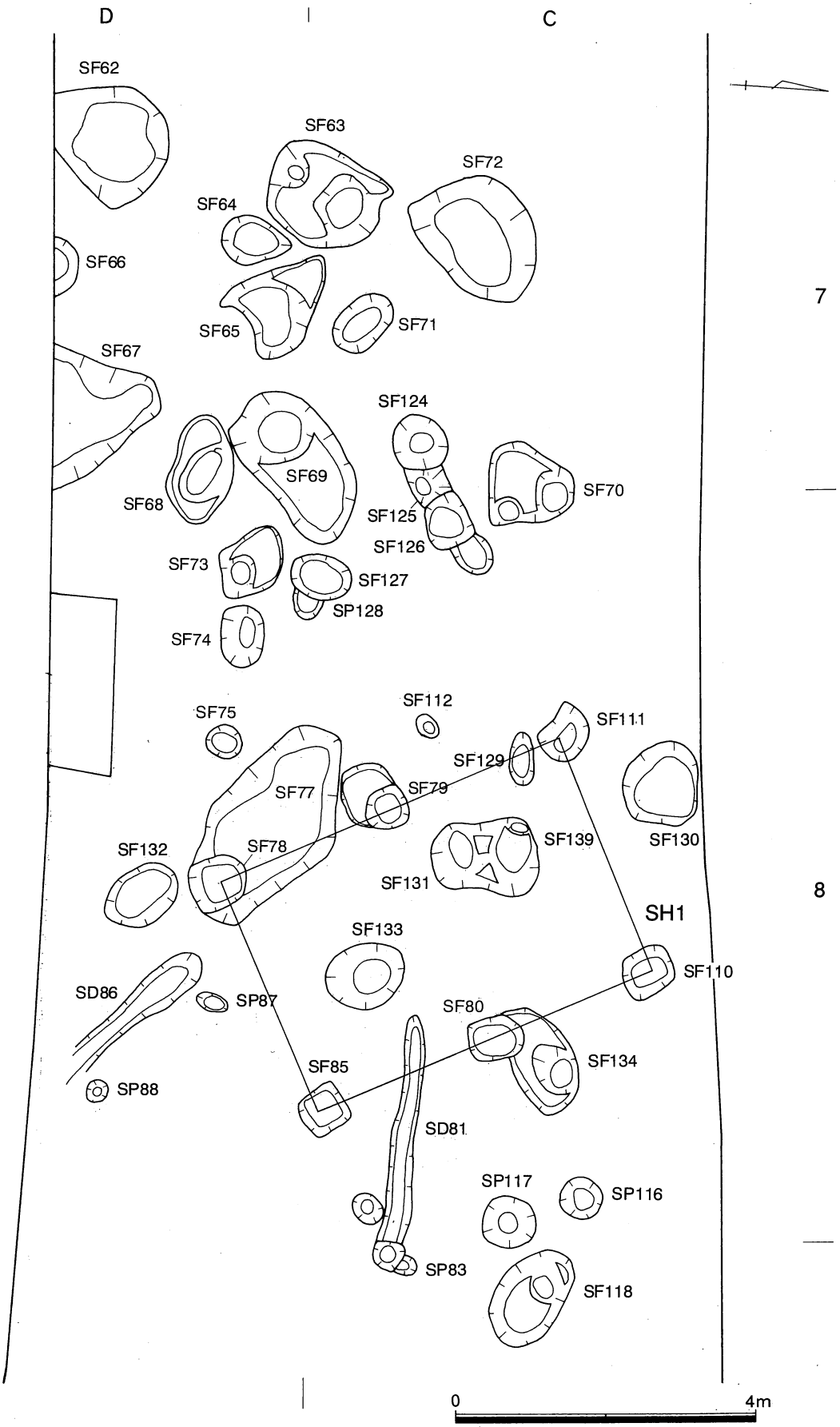
ピットは調査区の西側D5グリッドからD7グリッドにかけて多数検出している。遺物は縄文時代後期後半から晩期前半の土器と古墳時代前期の土器が混在している状況で、時期、性格は不明であるが、これらのうち多くは縄文時代に属するものと思われる。



第8図　縄文・古墳時代遺構全体図



第9図　1区　西半部遺構配置図



第10図　1区　東半部遺構配置図

1　縄文時代の土坑（第11図～第13図、図版3）

土坑はD3グリッド～D11グリッドにかけて検出されている。すべて第Ⅴ層で検出されており、そのうち濃密に分布しているのはD7グリッドからD11グリッドである。遠江の蜆塚遺跡では、長径1.4m短径0.8m前後の土坑が屈葬位の埋葬基本例とされ、深さは20cm～30前後という。それらと比較すると勝田井の口遺跡で検出された土坑は、ＳＦ68、ＳＦ118、ＳＦ128、ＳＦ139などが近似している。また、長径1m短径0.8m前後の小型のものではＳＦ132、ＳＦ133が認められ、これらも墓坑と考えてよいものと思われる。それ以外の不整形を呈するものや大形の長楕円形を呈する土坑も認められる。その中には土坑同士の切り合ったものも含まれるであろうが、性格を特定するには至らなかった。しかし、墓域の想定が可能であるならば、食料貯蔵穴というよりはむしろ埋葬施設と考えて考えてよいのかもしれない。ここではC・D7グリッドからC・D10グリッドにかけてまとまって検出された土坑について記述する。

ＳＦ62（第11図）

D7グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.63m短径1.60m深さ28cmを測る。主軸方位はN-27°-Wを指す。断面は皿状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は宮滝式新段階に比定される土器や粗製土器の破片が出土した。

ＳＦ63（第11図）

C7、D7グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.66m短径1.34m深さ37cmを測る。主軸方位はN-35°-Wを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は伊川津式土器に比定される土器や粗製土器の破片が出土した。

ＳＦ65（第11図）

D7グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.45m短径1.90m深さ35cmを測る。主軸方位はN-20°-Wを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ67（第11図）

D7グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、長径1.32m短径1.16m深さ20cmを測る。主軸方位はN-65°-Wを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は注口土器の注口部や粗製土器が出土した。

ＳＦ68（第11図）

D7、8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.45m短径0.88m深さ31cmを測る。主軸方位はN-92°-Wを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ69（第11図）

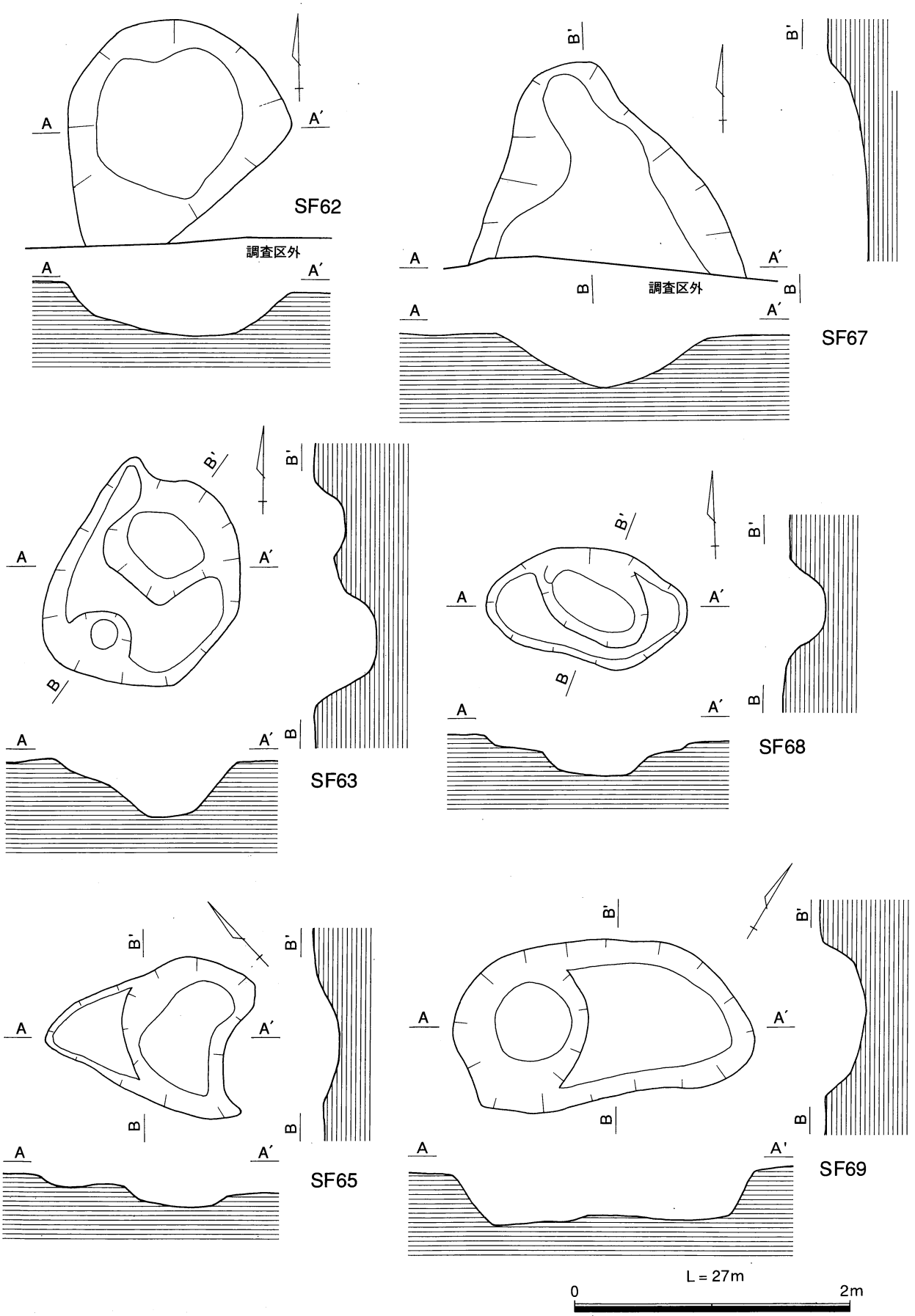
D7、8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径2.17m短径1.03m深さ26cmを測る。主軸方位はN-55°-Wを指す。底面は平坦で、断面は逆台形を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は粗製土器の破片が出土した。

ＳＦ70（第12図）

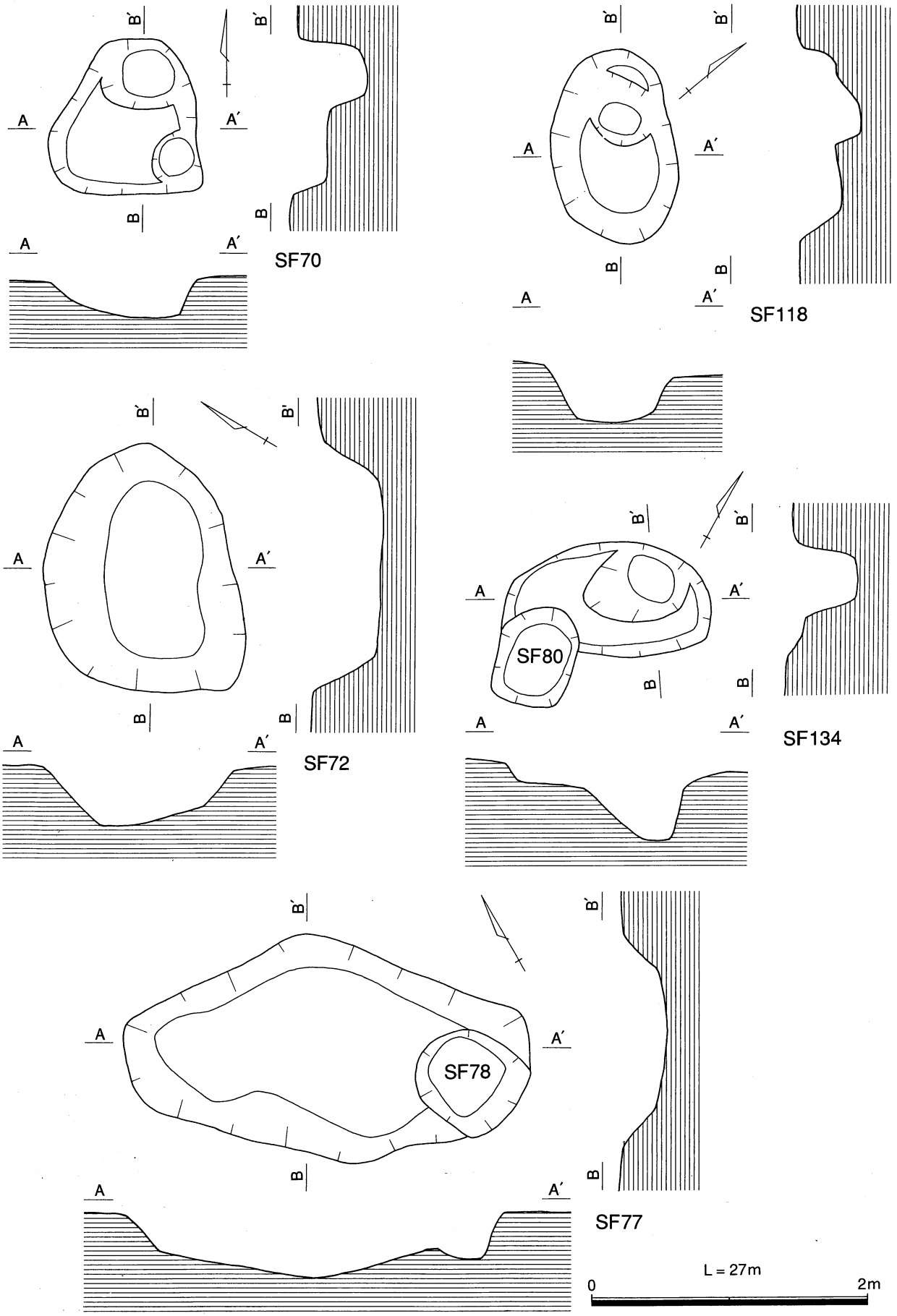
C7、C8グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、長径1.14m短径1.04m深さ51cmを測る。主軸方位はN-58°-Wを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は後期に属すると思われる縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ72（第12図）

C7グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.83m短径1.34m深さ44cmを測る。主軸方位はN-72°-Wを指す。断面は平坦で逆台形状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。



第11図　1区　縄文土坑実測図（1）



第12図　1区　縄文土坑実測図（2）

ＳＦ77（第12図）

Ｃ8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径2.92m短径1.56m深さ30cmを測る。切り合い関係は明確にできなかったが、複数の土坑が切り合っている可能性がある。主軸方位はＮ-60°-Ｗを指す。断面は皿状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は伊川津式土器に比定される土器が出土した。

ＳＦ118（第12図）

Ｃ9グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.42m短径0.9m深さ45cmを測る。主軸方位はＮ-51°-Ｅを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ134（第12図）

Ｃ8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.49m短径0.83m深さ46cmを測る。主軸方位はＮ-62°-Ｅを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ130（第13図）

Ｃ8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.12m短径1.00m深さ47cmを測る。主軸方位はＮを指す。断面は逆台形状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ132（第13図）

Ｄ8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.04m短径0.72m深さ20cmを測る。主軸方位はＮ-32°-Ｅを指す。断面は浅く、皿状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ133（第13図）

Ｃ8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.05m短径0.85m深さ16cmを測る。主軸方位はＮ-24°-Ｅを指す。断面は浅く、皿状を呈する。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

ＳＦ139（第13図）

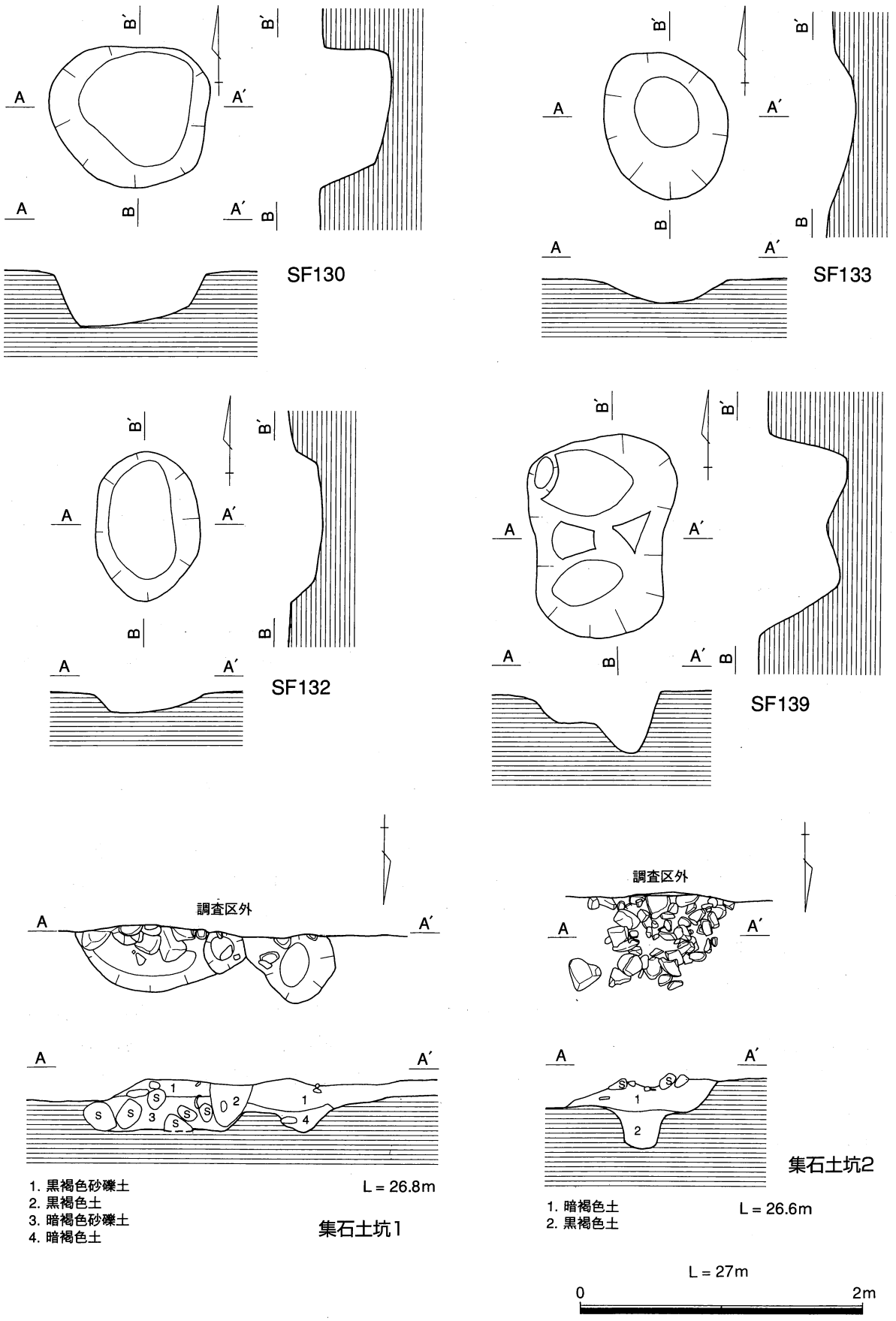
Ｃ8グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径1.44m短径0.89m深さ55cmを測る。主軸方位はＮ-14°-Ｗを指す。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。遺物は縄文土器の細片が出土した。

集石土坑1（第13図）

Ｄ10グリッドに位置する。南側半分は調査区外のため、判然としないが、平面形は長楕円形を呈すると思われる。長径1.20m、検出長0.47m深さ25cmを測る。覆土は黒褐色砂礫土で人頭大の礫を含む。土坑の可能性もあるが、覆土中の礫が他の土坑よりも密に含まれていることから集石土坑とした。遺物は粗製土器の細片が少量出土した。

集石土坑2（第13図、図版4）

Ｄ10グリッドに位置する。人頭大の礫を方形状にならべ、中央には拳大の礫がみられる。長径0.8m短径0.65mを測る。南側半分は、調査区外のため、全体像は明確ではないが、平面形は長方形を呈するのではないかと思われる。掘り方はほぼ礫の周囲に巡り、断面は段掘り状となる。覆土は2層に分層され、1層上面に礫が含まれる。2層には暗褐色粘質土で礫は含まれず、遺物は縄文土器の細片、打製石斧が出土した。



第13図　1区　縄文土坑実測図（3）

表3　土坑計測表

遺構名	グリッド	平面形	長　径（m）	短　径（m）	深　さ（cm）	長軸方位	備　考
ＳＦ62	Ｄ7	不整楕円	1.63	1.60	28	N-27°-W	
ＳＦ63	Ｃ7～Ｄ7	不整楕円？	1.66	1.34	37	N-35°-W	伊川津式土器
ＳＦ65	Ｄ7	不整形	1.32	1.16	20	N-65°-W	
ＳＦ67	Ｄ7	楕円	1.45	1.90	35	N-20°-W	注口土器
ＳＦ68	Ｄ7～Ｄ8	楕円	1.45	0.88	31	N-92°-W	
ＳＦ69	Ｄ7,8～Ｃ7,8	長楕円	2.17	1.03	26	N-55°-W	
ＳＦ70	Ｃ7～Ｃ8	不整形	1.14	1.04	51	N-58°-W	
ＳＦ72	Ｃ7	長楕円	1.83	1.34	44	N-72°-W	
ＳＦ77	Ｃ8～Ｄ8	長楕円	2.92	1.56	30	N-60°-W	伊川津式土器
ＳＦ118	Ｃ9	長楕円	1.42	0.9	45	N-51°-W	
ＳＦ134	Ｃ8	長楕円	1.49	0.83	46	N-62°-W	
ＳＦ130	Ｃ8	楕円	1.00	1.12	47	N	
ＳＦ132	Ｄ8	長楕円	1.04	0.72	20	N-32°-W	
ＳＦ133	Ｃ8	長楕円	1.05	0.85	16	N-24°-W	
ＳＦ139	Ｃ8	長楕円	1.44	0.89	55	N-14°-W	
集石土坑1	Ｄ10	長楕円	1.20	0.47	25		
集石土坑2	Ｄ10	楕円	0.80	0.65	49		打製石斧

2 古墳時代の遺構

ＳＨ-1　掘立柱建物跡（第14図、図版4）

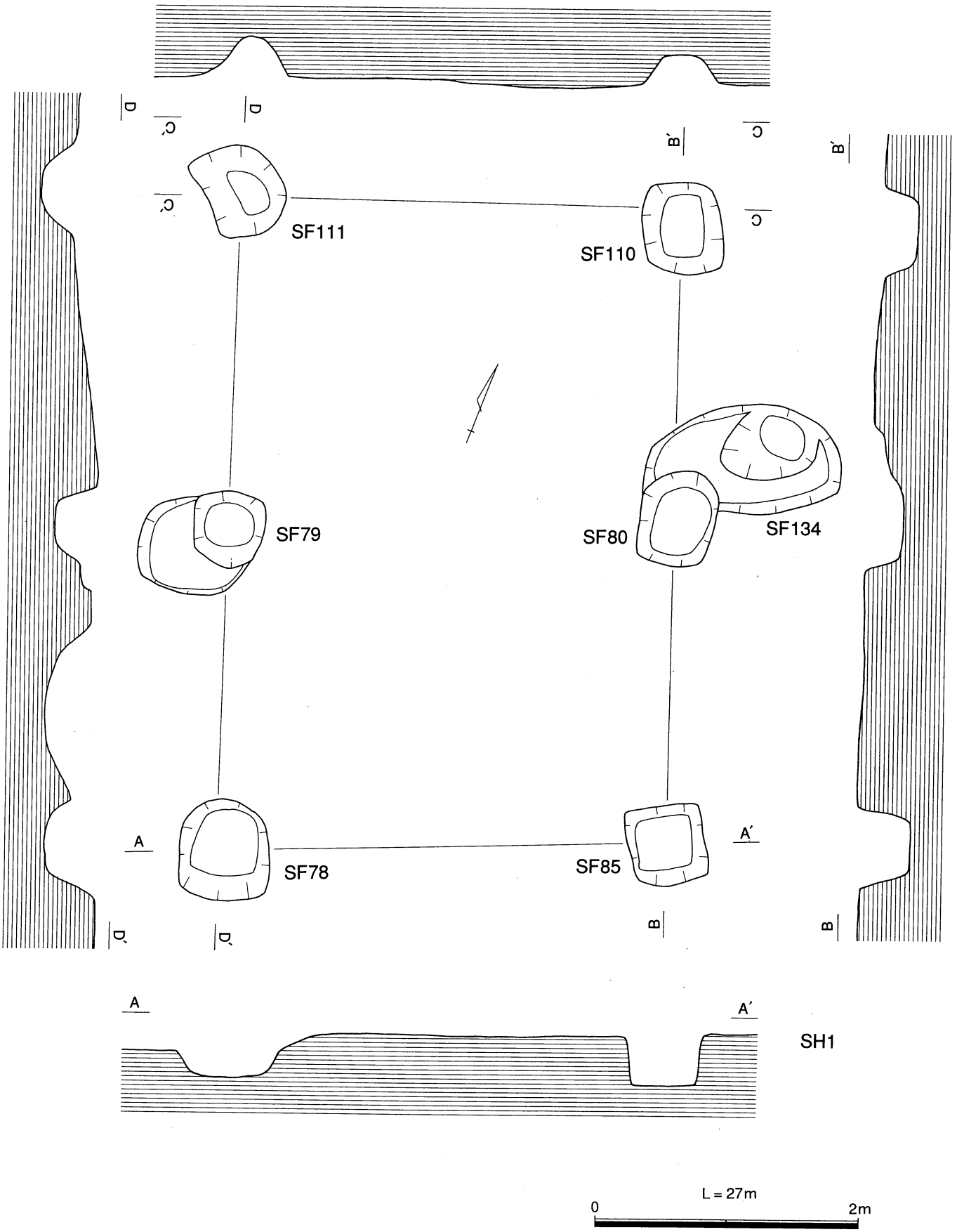
ＳＨ－1はC・Ｄ8グリッドに位置し、検出面は第Ｖ層で、標高　26.8ｍの範囲に立地する。柱穴は、隅丸方形ないし方形を呈し、6個から構成される。桁間2間、梁間1間で、桁行が東西、梁行が南北に配置される長方形の建物である。大きさは3.4ｍ×4.8ｍで、面積は16.3㎡である。主軸方位は、N-20°-Wを示す。柱穴はの規模は、径が53cm～76cmで、深さは25cm～38cmである。遺物は縄文時代の土器や石器が柱穴の覆土より少量出土している。下部には縄文時代の土坑が検出されており、時期は明確ではないが、構造等から古墳時代前期と考えられる。

表4　ＳＨ－1計測表

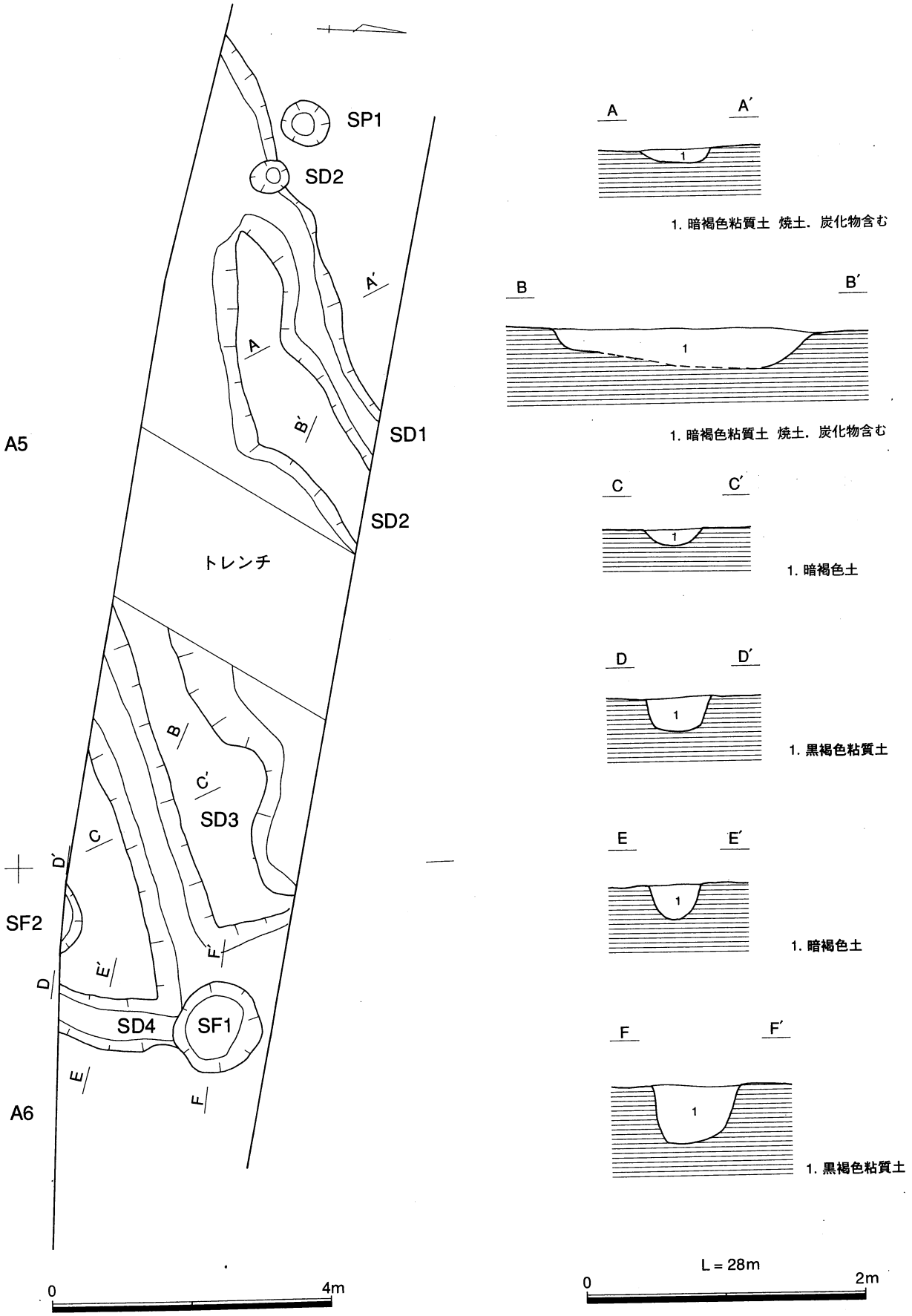
遺構名		グリッド	平面形	長径（m）	短径（m）	深さ（cm）	覆土
ＳＨ－１	SF７８	Ｄ８	方形	0.76	0.66	38	黒褐色砂礫土
	SF７９	Ｃ８	方形	0.57	0.53	27	黒褐色砂礫土
	SF８０	Ｃ８	方形	0.75	0.56	25	黒褐色砂礫土
	SF８５	Ｄ８	方形	0.6	0.56	38	黒褐色砂礫土
	SF１１０	Ｃ８	方形	0.7	0.56	30	黒褐色砂礫土
	SF１１１	Ｃ８	不整形	0.76	0.58	32	黒褐色砂礫土

2区（第15図）

２区は勝間田川の左岸側で、長さ15ｍ幅2ｍの範囲で、古墳時代前期の遺物包含層及び遺構検出面を確認した。遺構は土坑、溝状遺構4基を確認した。標高27.6ｍの範囲に立地し、ＳＤ1から3は南西方向から北東方向にのびる。断面はU字状を呈する。ＳＤ2の北壁には土器が集中して出土した。土坑は、2基検出されおり、径68cm、深さ41cmを測る。狭い調査範囲であるため、明確にはできないが、ＳＦ1と2は並ぶ可能性もある。これらの遺構は、古墳時代前期の遺物に限られていることから古墳時代前期の遺構と考えておきたい。



第14図　1区　ＳＨ－1実測図



第15図　2区　遺構全体図

表5　1区　ピット、土坑計測表（1）

遺構名	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備考
SP1	D 4	円	0.36	0.34	25	
SP2	D 4	楕円	[0.25]	0.22	20	SP1・4と切り合う
SP3	D 4	楕円	0.4		24	SP1と切り合う
SP4	D 4	円	0.18		16	SP4と切り合う
SP5	D 4	円	0.3	0.28	17	
SP6	C 4	円	0.36	0.33	19	
SF7	C 4	楕円	0.64	0.52	23	
SP8	C 4	長楕円	0.63	0.29	19	
SP9	D 4	円	0.32	0.3	18	
SP10	C 5	不整形	0.45	0.31	27	
SP11	C 5	不整形	0.35	0.3	30	
SP12	C 5	楕円	0.28	0.19	10	
SP13	D 5	楕円	0.4	0.38	17	
SP14	D 5	楕円	0.37	0.25	18	
SP15	D 5	長楕円	[0.46]		30	調査区外にのびる
SP16	D 5	楕円	0.31	0.26	14	
SP17	C 5	円	0.61	0.56	38	
SP18	C 5	楕円	0.53	0.47	11	
SP19	C 5	不整形	0.47		27	SP18と切り合う
SF20	C 5	楕円	0.64	0.51	31	
SF21	C 5	長楕円	0.8	0.38	13	
SF22	C 5	円	0.54	0.5	17	
SF23	C 5	円	0.63	0.59	31	
SF24	D 5	長楕円	1.5	0.6	8	
SF25	C 5	楕円	0.55	0.5	48	
SF26	C 5	長楕円	1	0.4	11	
SF27	C 5	楕円	0.68	0.56	24	
SF28	C 5	楕円	0.64	0.48	8	
SP29	C 5	円	0.32	0.31	9	
SF30	C 5	楕円	0.78	0.7	14	
SP31	C 5	円	0.32	0.28	7	
SF32	C 5	楕円	0.54	0.52	42	
SP33	C 5	円	0.22	0.2	9	
SF34	D 5	楕円	0.63	0.49	39	
SP35	D 5	円	0.29	0.25	15	
SP36	D 5	円	0.29	0.27	11	
SP37	D 5	円	0.27	0.25	20	
SP38	D 5	円	0.2	0.19	9	
SP39	D 5	長楕円	0.42	0.29	6	
SP40	D 5	円	0.36	0.34	19	
SP41	D 5	円	0.3	0.29	12	
SP42	D 5	円	0.38	0.33	16	
SF43	D 5	楕円	0.47	0.46	20	SP42と切り合う
SP44	D 5	楕円	0.46	0.4	19	
SP45	D 5	円	0.41	0.41	14	
SP46	D 6	円？	0.35		31	調査区外にのびる
SP47	D 5	円	0.41	0.37	13	
SP48	D 5	不整形	0.51	0.44	21	
SP49	D 6	円	0.26	0.21	9	
SF50	C 5	長楕円	1.09	0.59	30	
SF51	C 5	長楕円	0.73	0.5	18	
SP52	C 6	円	0.36	0.35	8	
SF53	C 6	円	0.55	0.52	15	
SP54	C 6	楕円	0.37	0.36	10	
SF55	C 6	楕円	0.73	0.62	26	
SF56	C 6	楕円	0.47	0.45	15	
SP57	C 6	楕円	0.36	0.25	13	
SD58	D 6	溝	3.5	0.57	10	調査区外にのびる

表6　1区　ピット、土坑計測表（2）

遺構名	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備　考
SF59	D 6	楕円	0.79	0.58	29	
SF60	C 6	長楕円	1	0.5	24	
SP61	C 6	楕円	0.41	0.32	16	
SP64	D 7	楕円	0，98	0.62	17	
SP66	D 7	楕円？	[0.78]		16	
SF71	C 7	長楕円	0.92	0.58	33	
SF73	D 8	長楕円	1.11	0.66	29	
SF74	D 8	楕円	0.82	0.58	34	
SP75	D 8	円	0.47	0.42	13	
SD81	C 8	溝	[3.0]	0.29	13	
SP82	C 8	楕円？	0.83	0.73	15	SF79と切り合う
SP83	C 9	楕円	[0.27]		7	SP84と切り合う
SP84	C 9	楕円	0.44	0.36	17	
SD86	D 8	溝	[2.43]	0.5	13	
SP87	D 8	長楕円	0.42	0.25	26	
SP88	D 8	長楕円	0.42	0.23	21	
SP89	D 9	不整形			11	SF90と切り合う
SP90	D 9	円	0.55	[0.50]	27	
SP91	D 9	不整形	0.26	0.25	12	SF91～SF95
SF92	D 9	不整形			24	と切り合う
SF93	D 9	不整形			17	
SF94	D 9	不整形			37	
SP95	D 9	不整形			23	
SF96	D 9	不整形			61	
SP97	D10	不整形			10	SF97～SF99と切り合う
SP98	D10	不整形			17	
SP99	D10	不整形			16	
SP100	D10	長楕円	0.9	0.45	17	
SP101	D10	楕円	0.57	0.4	18	
SP102	D10	長楕円	0.72	0.38	21	
SD103	D10	溝	[0.73]	0.14	10	
SP104	D10	円	0.31	0.28	19	
SP105	D10	長楕円	0.5	0.27	16	
SP106	C11	円	0.4	0.38	28	
SP107	C11	楕円	0.35	0.2	12	
SP108	C 5	楕円	0.35	0.3	9	
SP109	D 6	長楕円	0.49	0.31	17	SD58と切り合う
SP112	C 8	楕円	0.34	0.24	13	
SP116	C 8	円	0.55	0.55	19	
SP117	C 8	円	0.7	0.68	40	
SP119	C 9	隅丸長方形	0.85	0.71	31	
SP120	D10	円？	0.45	0.45	13	
SP121	D10	不整形			27	SP121～SP123と切り合う
SP122	D10	不整形			34	
SP123	D10	不整形			13	
SP124	C7	楕円	0.76	0.69	47	
SP125	C 7	楕円？	[0.5]		33	SF125と切り合う
SP127	C 8	長楕円	0.8	0.6	40	
SP128	C 8	楕円？	0.36		18	SF127と切り合う
SP129	C 8	長楕円	0.7	0.32	13	
SP131	C 8	楕円？	1.03		60	SF131と切り合う
SP134	C 8	長楕円	1.49	0.83	52	SF80と切り合う
SP135	C 9	楕円	0.84	0.57	11	
SP136	C 9	長楕円？	[0.6]	0.44	16	SP120と切り合う
SF137	D 9	長楕円	1.27	[0.85]	37	
SF138	C 9	長楕円	[1.28]	0.59	32	

3 中世の遺構

中世遺構の検出面は、第Ⅳ層上面で、土坑1基、溝状遺構2基を確認した。ＳＤ1・2はほぼ平行して東西にのびている。遺構の性格は不明である。ＳＦ1は標高の高い26.８ｍに位置し、単独で検出されている。周辺には建物跡が想定できるが、今回の調査では発見されていない。この狭い勝間田川流域は勝間田氏の本貫地で、南西約1ｋｍには勝間田城が立地しており、周辺には勝間田氏と関連する施設があるのかもしれない。

また、調査区南半部のＣ10、Ｃ11グリッドは、旧勝間田川の流路跡であり、12世紀後半～17世紀にかけてやや南寄りに流れていたと考えられる。谷地形の攻撃面に青灰色粘土が厚さ30 cmで堆積しており、そこから13世紀後半～末の山茶碗の碗、小皿、青磁、白磁が出土している。

ＳＤ1（第17・18図、図版5）

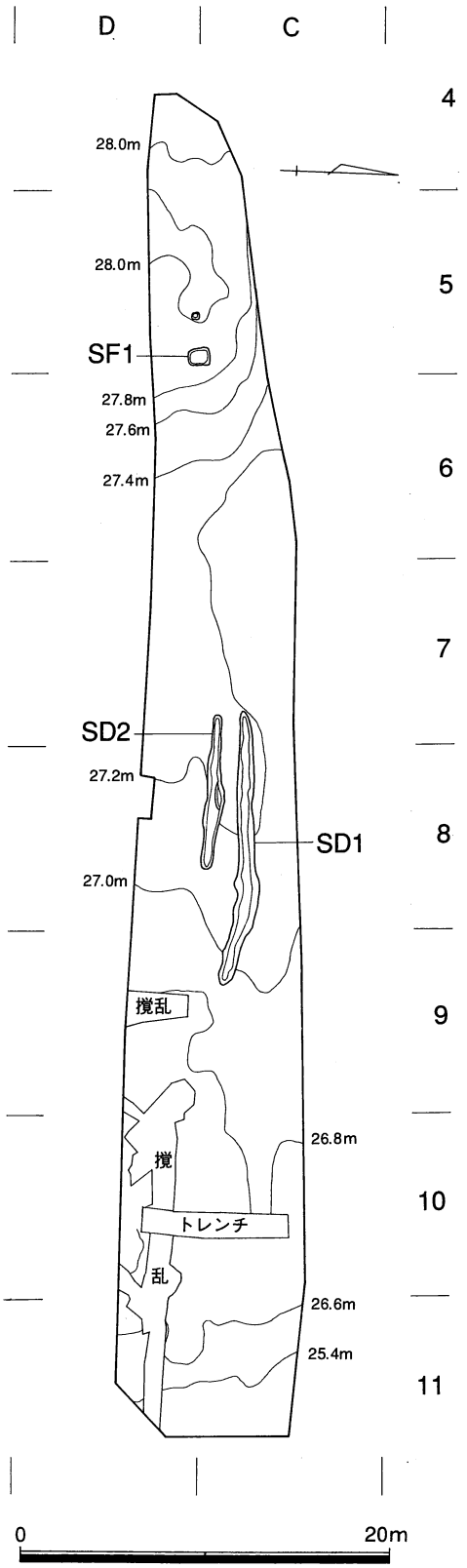
Ｃ7グリッドからＣ9グリッドにかけて東西に直線的にのびる。全長15ｍ最大幅0.9ｍ深さ35cm～10cmを測る。断面は皿状を呈し、底面の高さは西から東にかけて低く傾斜している。覆土は暗褐色土で粘性、しまりはやや強い。遺物は第18図-1が大窯段階の擂鉢片である。表面には鉄釉が施され、胎土は灰白色を呈する。第18図-2は常滑産の甕の肩部が出土している。

ＳＤ2（第17・18図、図版5）

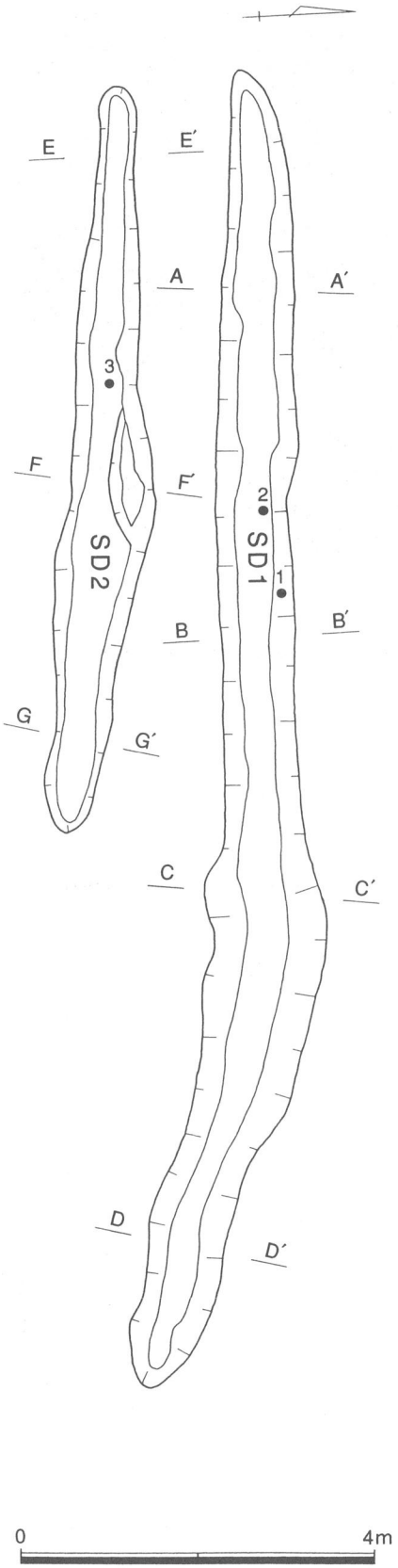
Ｃ7グリッドからＤ8グリッドにかけて東西に直線的にのびる。全長8.42ｍ最大幅1.35ｍ深さ12cm～15cmを測る。断面は皿状を呈し、底面の高さは西から東にかけて低く傾斜している。覆土は暗褐色土で粘性、しまりはやや強い。第18図-3は鉄釘が出土している。図化できなかったが、山茶碗の細片が出土している。

ＳＦ1（第19図、図版5・17）

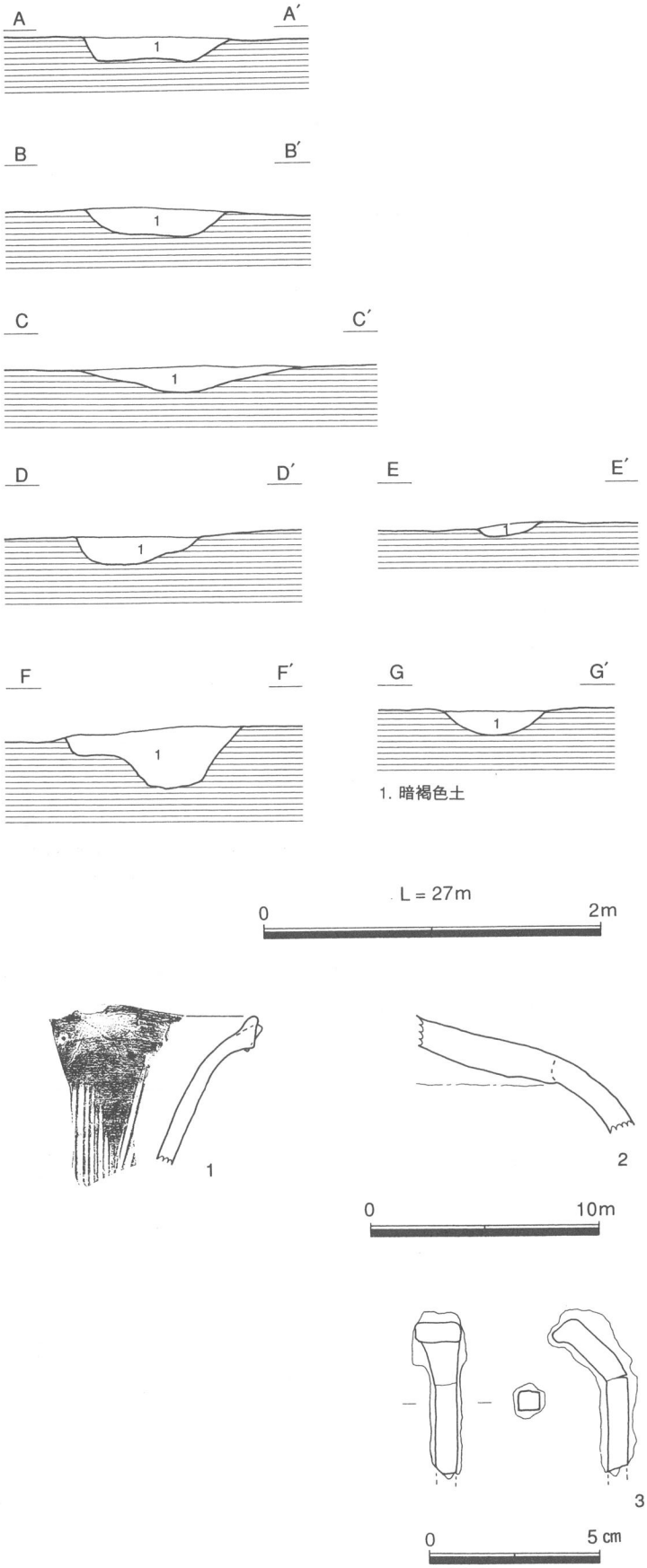
ＳＦ1はＤ5グリッドに位置する。付近からは建物など柱穴などは確認できていない。平面形は、隅丸方形を呈し、長径1.30ｍ短径0.97ｍ深さ32cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。長軸方位はN-6°-Wを指す。覆土は２層に分層され、炭化物、焼土、骨粉などは検出されていない。1層中に土師器の小皿が確認された。第18図-7の土師器小皿は径9.8 cmで、器高1.9cmをはかる。底部は糸切り痕が残る。



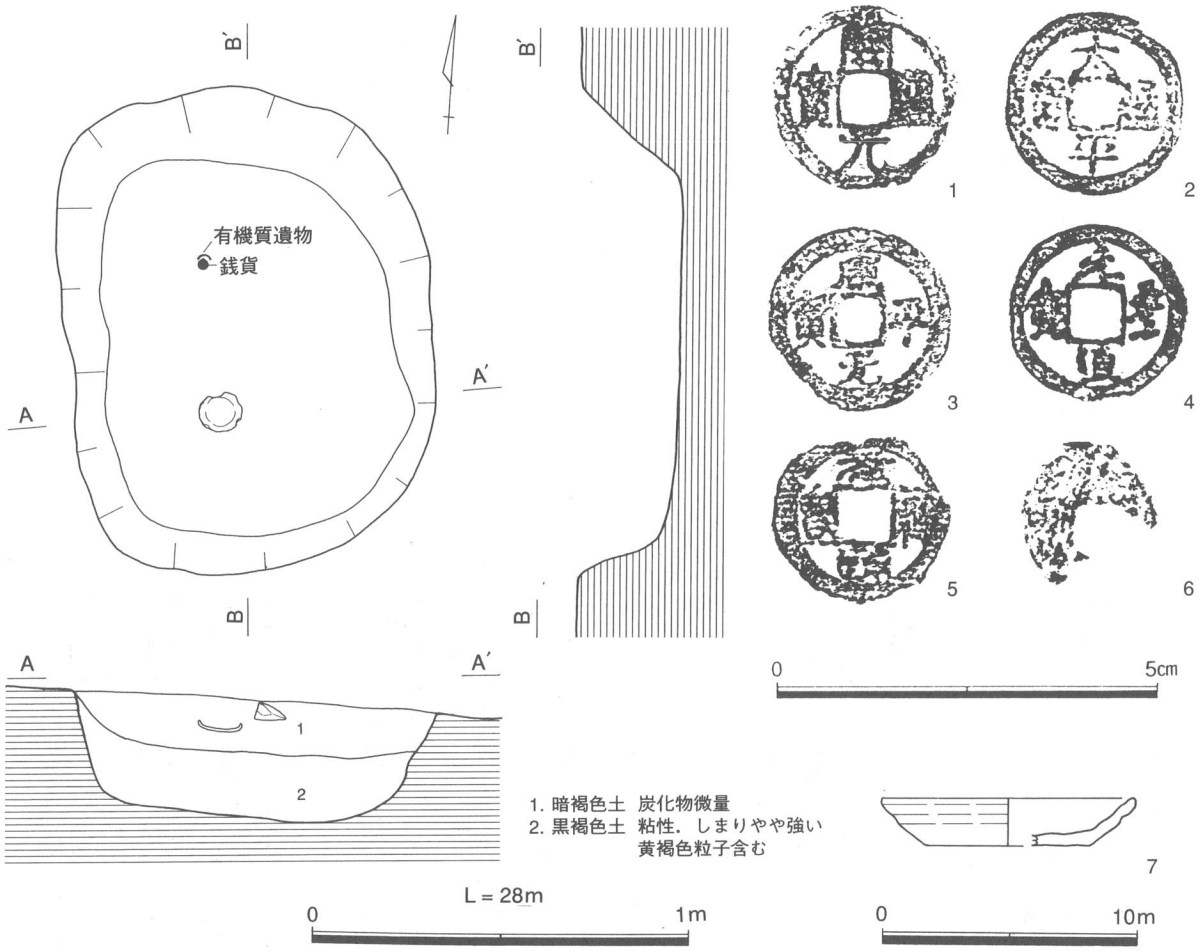
第16図　1区　中世遺構全体図



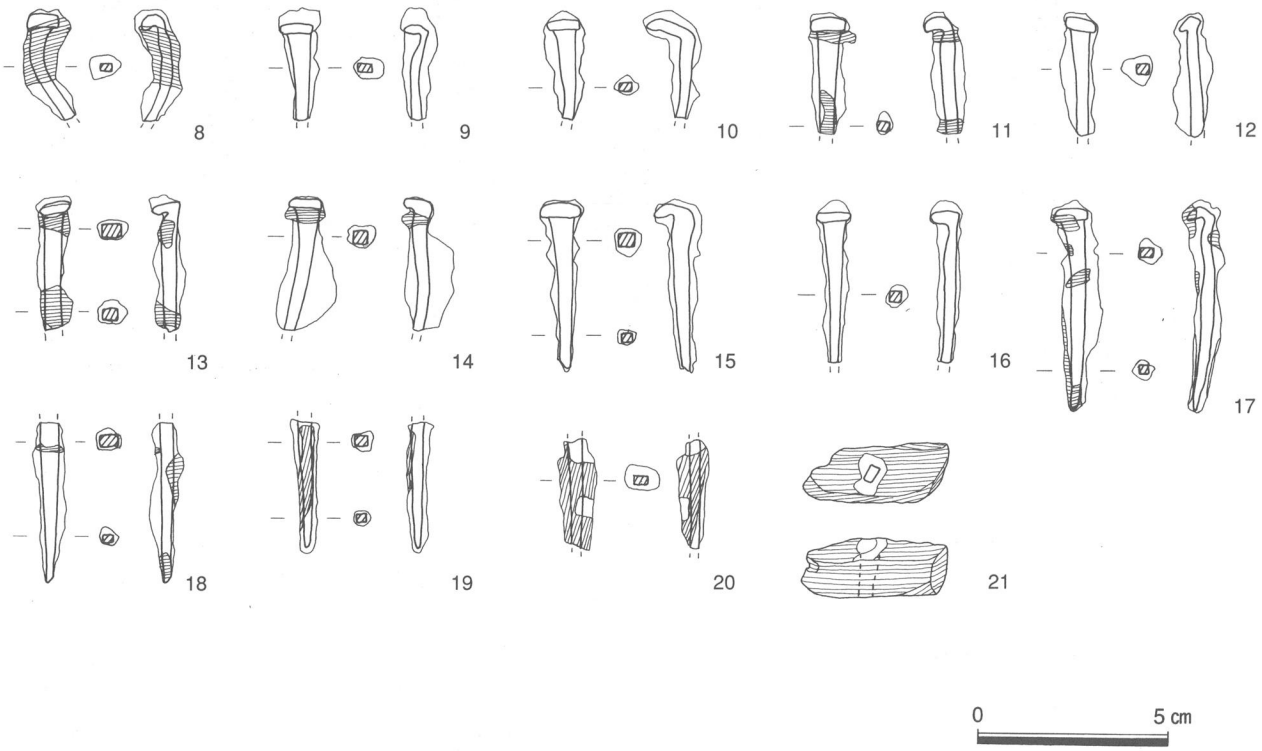
第17図　1区　SD-1・2実測図



第18図　1区　SD-1・2出土遺物



第19図　1区　中世SF-1土坑実測図



第20図　1区　中世SF-1出土遺物

意図的に割った様子やすすが付着した痕跡は、みられない。色調は、乳白色を呈する。2層中には鉄釘が土坑の四隅から11点出土した。ほとんどの釘に木質が残存しており、棺として使用したと考えられる。底部のやや北寄りからは六道銭が重なった状態で出土した。六道銭は、開元通寶、太平通寶、咸平元寶、元豊通寶、元祐通寶と摩滅した判読不能のものの6枚が重なった状態で、底面に密着して出土した。その六道銭の周囲には、有機質のものが付着していた。おそらく六道銭を袋状のものに入れて埋葬していたと考えられる。分析結果は付編に記した。墓坑が隅丸の長方形を呈すること、木質のついた釘が出土している点から棺は釘を使って組まれた四角ものであったことが推定できる。土師器皿の年代は不明であるが、六道銭に寛永通宝が埋葬されていない点を考慮すれば16世紀代と考えられる。

表7　銭貨計測表

図版	調査区	遺構名	銭　名	書体	初鋳年代	銭 径（cm）	内 径（cm）	銭孔（cm）	重量（g）
20-1	1区	ＳＦ-1	開元通寶	真書	621	2.45	2.1	0.6	2.7
20-2	1区	ＳＦ-1	太平通寶	真書	976	2.4	1.9	0.65	2.8
20-3	1区	ＳＦ-1	咸平元寶	真書	998	2.4	1.9	0.6	3.5
20-4	1区	ＳＦ-1	元豊通寶	行書	1078	2.3	1.9	0.65	2.7
20-5	1区	ＳＦ-1	元祐通寶	篆書	1086	2.35	1.8	0.65	2.1
20-6	1区	ＳＦ-1	不明	不明	不明			[0.6]	0.6

表8　鉄釘計測表

図版	調査区	遺構名	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	断　面	残存部位
20-08	1区	ＳＦ－1	[2.9]	0.4	0.2	長方形	頭～中
20-09	1区	ＳＦ－1	[2.85]	0.35	0.2	長方形	頭～中
20-10	1区	ＳＦ－1	[3.2]	0.5	0.35	長方形	頭～中
20-11	1区	ＳＦ－1	[3.2]	0.35	0.3	長方形	頭～中
20-12	1区	ＳＦ－1	[3.1]	0.5	0.35	長方形	頭～中
20-13	1区	ＳＦ－1	[3.5]	0.4	0.4	正方形	頭～中
20-14	1区	ＳＦ－1	[4.5]	0.45	0.35	長方形	頭～中
20-15	1区	ＳＦ－1	[4.35]	0.3	0.3	正方形	頭～中
20-16	1区	ＳＦ－1	5.6	0.35	0.25	長方形	完形
20-17	1区	ＳＦ－1	[4.2]	0.45	0.3	長方形	中～下
20-18	1区	ＳＦ－1	[2.9]	0.3	0.2	長方形	頭～中
20-19	1区	ＳＦ－1	[3.5]	0.35	0.25	長方形	中～下
20-20	1区	ＳＦ－1	[2.9]	0.35	0.25	長方形	中～下
20-21	1区	ＳＦ－1	[1.6]	0.45	0.25	長方形	中

第2節　出土遺物

1　縄文土器

本遺跡における縄文時代の土器は中期の曽利式土器から晩期の樫王式土器に及び、テンバコにして5箱分が出土している。このうち主体をなすものは、後期後半から晩期前半の土器の土器である。これらで出土土器の８割を占めており、当該期が本遺跡の主体的な時期であったことを示すものであり、榛原地域では知られなかった縄文時代後期後半から晩期前半の土器研究に資料を提供できたといえる。ここでは、出土土器をおおまかに時期ごとに群別し、下記のように第Ⅰ群～第Ⅵ群に設定した。第Ⅰ群、第Ⅲ群の出土量は少なく、第Ⅱ群について細分しながら観察する。

第Ⅰ群　中期～後期前半の土器
　　曽利式土器
　　称名寺式土器
　　堀ノ内式土器
第Ⅱ群　後期末葉～晩期中葉の土器
　　1類　宮滝式土器
　　2類　東海系土器
　　3類　その他
　　4類　安行系土器
　　5類　東北系土器
　　6類　清水天王山式土器
第Ⅲ群　晩期末葉の土器
　　樫王式土器
第Ⅳ群　注口土器
第Ⅴ群　粗製土器
第Ⅵ群　土器底部

第Ⅰ群　中期末～後期前半の土器（第21図1～4、図版6）

1は比較的断面が厚手で、胎土に金雲母を含み、粗い。隆帯が貼付されるので、曽利式土器とした。2は内湾する口縁部に棒状工具による太く、深い２条の沈線が巡る。称名寺式土器である。3は２本の沈線間に列点文が充填される。称名寺Ⅱ式土器である。4は口縁部が内折し、棒状工具による2条の沈線が巡る。堀ノ内式土器に比定できる。

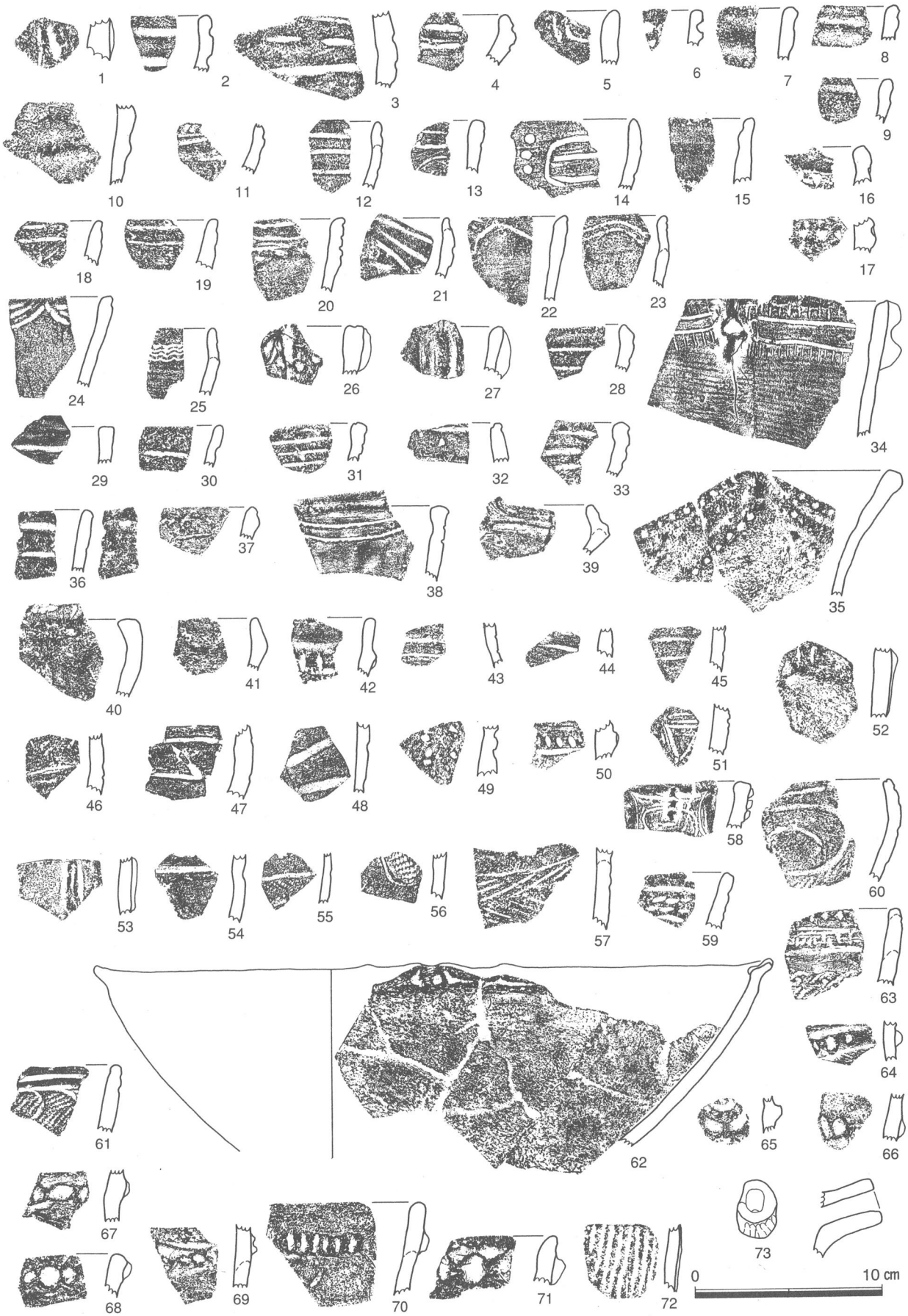
第Ⅱ群　後期末葉～晩期中葉の土器（第21図5～70、図版6）

1類　宮滝式土器

5は波頂部より２条の沈線が垂下する。6は口縁部に巻貝による刺突が上下２段に施される。5・6は宮滝式の古段階に比定できる。7・8はナデ調整による２本の沈線が巡る。9はナデ調整による沈線が１条巡る。10はナデ調整による沈線が２条巡る。7～10は宮滝式新段階に比定できる。

2類　東海系土器

11は口縁部に２条の沈線が巡る。12は内湾する口縁部に巻貝による３条の沈線が巡る。13は口縁部はやや肥厚し、２条の沈線が巡り、沈線間に磨消縄文が施される。14は内湾する口縁部に巻き貝によ



第21図　縄文土器（1）

る刺突が３点施され、沈線間に1条の沈線が巡る。15は口縁部内面に沈線を施す。11～15は寺津下層式土器に比定される。

16・17は内湾する口縁部に三角状の刺突が横位に巡る。21は、内湾する波状口縁部で、斜位の沈線が施される。22・23は上弦の連弧文が巡る。22は胴部に条痕調整が施される。24は下弦の連弧文が巡る。弧文の中に沈線が施される。25は浅鉢で、口縁部に４条の波文を1段巡る。胴部に条痕調整が施される。16～26は伊川津式に比定される。29・30は口縁部に1条の沈線が施される。31は肥厚した口縁部に3条の沈線が施される。32は口縁部は内折し1条の沈線が施される。注口土器の可能性もある。33は肥厚した口縁部に3条の沈線が施される。

34は口縁部に押圧した隆帯が垂下し、2条の沈線が横位に巡り、その上下に縦位の沈線が施される。胴部は巻貝による条痕調整。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。35は波頂部に隆帯が垂下し、2条の刺突文が横位に巡る。34・35は伊川津式土器に比定される。36は2条の沈線が巡る。38は端部が肥厚し、弧状の沈線が２条巡る。39は浅鉢で、隆帯貼付による三叉文が施される。口縁部は内折し、補修孔がつく。北陸系の御経塚式土器の可能性もある。

3類　その他

後期に属するものを一括した。40は内湾する口縁部で無文である。41は内傾する口縁部で無文である。42は隆帯が横位に1条巡り、刻みが施される。東海系土器の一群と思われる。43～45は胴部片で細い2条の沈線が巡る。47は浅鉢で、内傾する胴部片に3条の沈線が施される。巻貝によるものかもしれない。48は太く、浅い沈線が斜位に施される。49は円形刺突文が2条縦位に施される。50は2条の沈線間に刺突文が施される。東海系の土器と思われる。51は櫛状工具による三角形文で、北陸系の八日市新保式土器であろうか。54は浅鉢で外面にミガキ調整が施される。55は1条の沈線下にＬＲ縄文が施される。56は沈線間にＬＲ縄文が充填される。

4類　安行系土器

57は沈線間に羽状の沈線が施される。上部には補修孔と思われる穿孔が見られる。胎土は黒褐色を呈する。曽谷式土器に比定される。58は板状の波頂部に沈線が施され、中央に刻み隆帯が垂下する。安行Ⅰ式土器に比定できる。59は2条の沈線間に2条の連続刺突文が施される。色調は黒褐色を呈する。安行ⅢＣ式土器に比定できる。

5類　東北系土器

60は内湾する口縁部に渦巻き状の沈線が施される。61は口縁部に1条の沈線が巡り、下にはＬＲ縄文を地文に逆Ｃ字状の沈線が横位に巡る。大洞Ｂ式に比定できる。62は浅鉢で、口縁部内面に玉抱三叉文がつく。表面は摩耗しており、色調は黄褐色を呈する。北陸系の御経塚式土器であろうか。63は口縁部端部に刻みが施され、沈線間に刻みが横位に巡る。胴部はＬＲ縄文が施される。大洞Ｃ1式に比定できる。

6類　清水天王山式土器

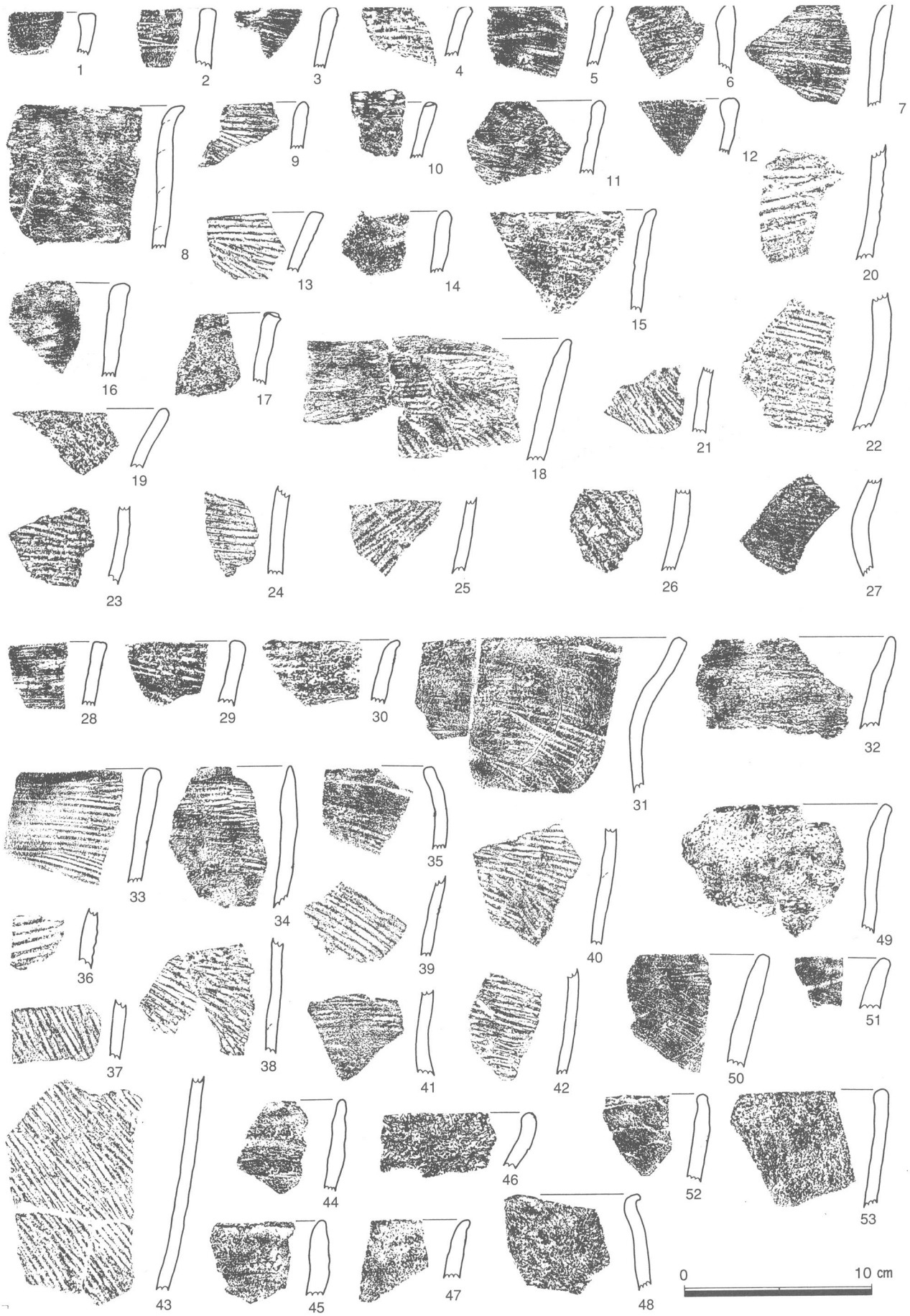
65は隆帯が1条巡り、棒状工具による刻みが施される。65～67は口縁部に隆帯を貼付し、押圧が連続して施される。68・69は口縁部に1条の隆帯を貼付し、刻みを入れる。

第Ⅲ群　晩期末葉の土器　樫王式土器（第21図71・72、図版6）

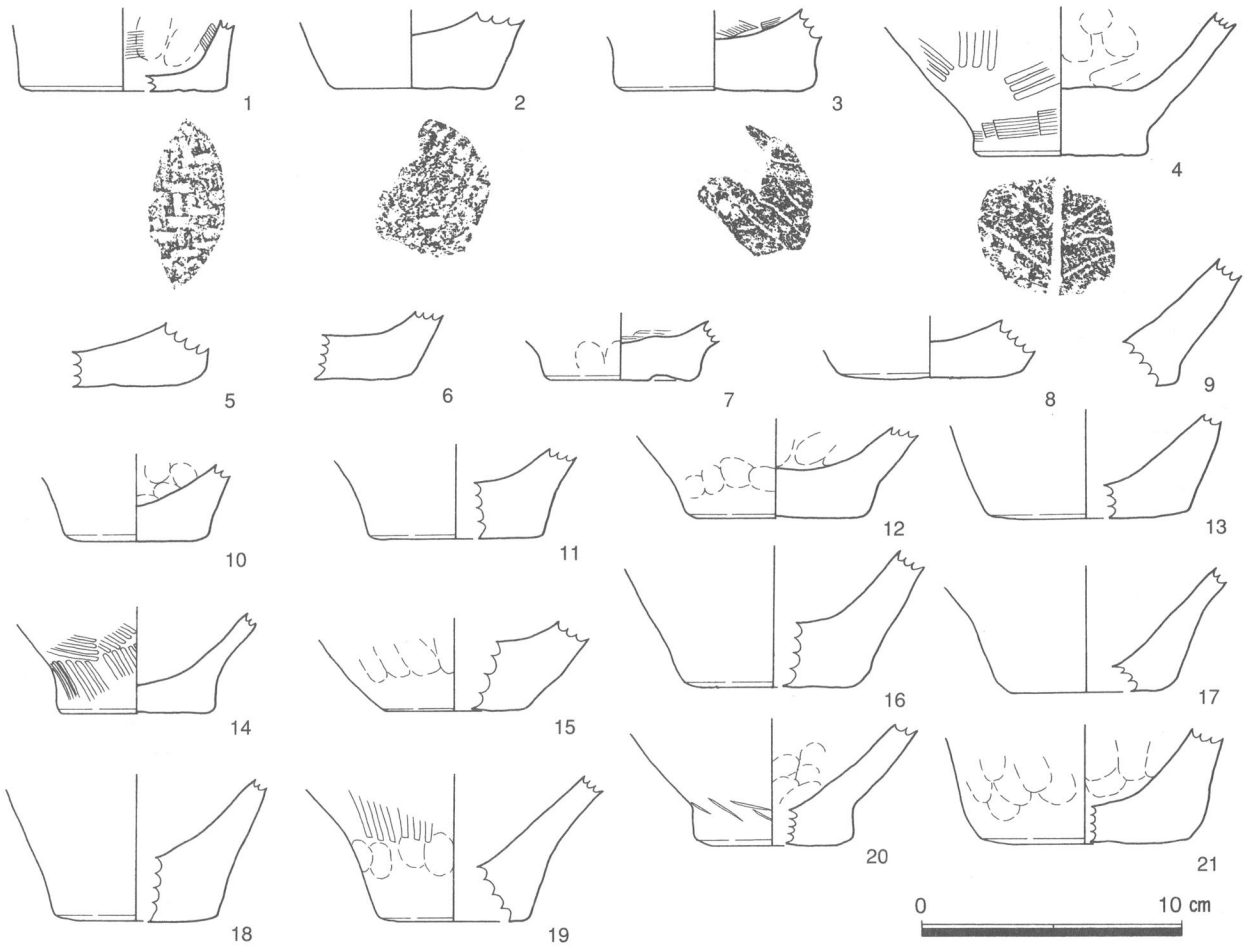
71は1条の押圧突帯が巡る。72は深い半裁竹管状工具による条痕が斜位に施される。

第Ⅳ群　注口土器（第21図73、図版6）

1点出土しており、73は注口部片である。ミガキ調整が施され、縄文時代後期に属すると思われる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
0
10 cm

第22図　縄文土器（2）



第23図　縄文土器（3）

第Ⅴ群　粗製土器（第22図1～53、図版7）

後期～晩期の粗製土器を一括した。1～27は巻貝による条痕調整が施されたものである。28～43は２枚貝よる条痕調整が施されたものである。44・45はナデ調整が施される。46～48は無文の土器である。45は内湾し、48は端部が外反する。50・51は擦痕の残る口縁部片で、断面は比較的厚い。

第Ⅵ群　土器底部（第23図1～21、図版8）

今回の調査で出土した土器の底部は21点である。1～2は網代底で3・4は木葉痕が残る。断面は厚さ1cm～2.5cmと比較的厚い。土器底は大半が平底で、高い高台の付くものや上げ底のものはみられなかった。

表9　縄文土器観察表（1）

図版番号	調査区	グリット	出土遺構・層位	残　存	色　調	胎　土	焼　成	備　考
21-01	1	D7	第Ⅲ層	胴部破片	7.5ＹＲ5/6明褐色	石英、黒雲母、長石含む	不良	曽利式
21-02	1	トレンチ	表採	口縁部破片	5ＹＲ7/6橙色	石英、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	称名寺式
21-03	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	7.5ＹＲ5/4にぶい褐色	砂粒、長石含む	不良	称名寺式
21-04	1	トレンチ	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5ＹＲ5/3にぶい褐色	石英、金雲母、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	堀ノ内式
21-05	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5ＹＲ7/4にぶい橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	元住吉山Ⅱ式
21-06	1	C1	第Ⅳ層	口縁部破片	10ＹＲ7/4にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	宮滝式古段階
21-07	1	D10	SF97	口縁部破片	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	宮滝式古段階
21-08	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	10ＹＲ6/4にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	宮滝式新段階
21-09	1	D7	SF62	口縁部破片	7.5ＹＲ6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	宮滝式新段階
21-10	1	D9	第Ⅳ層	破片	(外)7.5ＹＲ8/6浅黄橙色	赤色粒、長石、砂粒含む	不良	宮滝式新段階
21-11	1	D6	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	長石、砂粒含む	不良	寺津下層式
21-12	1		第Ⅱ層	口縁部破片	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	石英、金雲母、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	寺津下層式
21-13	1	C5	SP13	口縁部破片	10ＹＲ8/4浅黄橙色	赤色粒子、石英、砂粒、長石含む	不良	寺津下層式
21-14	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)10ＹＲ5/2灰黄褐色	石英、砂粒、長石含む	良	寺津下層式
21-15	1		第Ⅱ層	口縁部破片	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	寺津下層式
21-16	1	D18	SF77	口縁部破片	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-17	1		第Ⅲ層	胴部破片	(外)7.5ＹＲ6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式

表10　縄文土器観察表（2）

図版番号	調査区	グリット	出土遺構・層位	残　存	色　調	胎　土	焼　成	備　考
21-18	1	C9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5YR5/4にぶい褐色	石英、長石含む	不良	伊川津式
21-19	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)2.5Y6/2灰黄色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-20	1		第Ⅲ層	口縁部破片	(外)5YR7/6橙色	赤色粒子、石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-21	1	D9	集石土坑2下部	口縁部破片	(外)10YR6/3にぶい黄橙色	石英、金雲母、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-22	1	C9	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5YR7/4にぶい橙色	赤色粒子、石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-23	1		第Ⅲ層	口縁部破片	2.5Y8/2灰白色	砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-24	1	D11	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR7/3にぶい黄橙色	石英、金雲母、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-25	1	C7	SF63	口縁部破片	2.5Y7/3浅黄色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-26	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5YR5/4にぶい褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-27	1	C5	SF25	口縁部破片	(外)10YR6/3にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	伊川津式
21-28	1	D7	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)10YR8/4浅黄橙色	赤色粒子、石英、砂粒含む	やや良	東海系
21-29	1	D7	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5YR7/3にぶい橙色	石英、長石含む	不良	東海系
21-30	1	サブトレ	第Ⅳ層	口縁部破片	2.5Y6/2灰黄色	石英、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-31	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5YR7/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-32	1	C8	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR5/2灰黄褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-33	1	D11	第Ⅳ層	口縁部破片	5YR6/6橙色	石英、金雲母、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-34	1	D7	SF67	口縁部破片	10YR5/3にぶい黄褐色	石英、砂粒、長石含む	良	伊川津式
21-35	1	C9	SF105	口縁部破片	10YR8/3浅黄橙色	白色粒子、灰色粒子、褐色粒子含む	良	伊川津式
21-36	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR6/4にぶい黄橙色	赤色粒子、石英、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-37	1		第Ⅲ層	口縁部破片	(外)5YR6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-38	1	D7	SF67	口縁部破片	10YR8/4浅黄橙色	石英、長石、赤色粒子含む	良	東海系
21-39	1	C9	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR7/6明黄褐色	石英、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	後期
21-40	1	C8	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR7/4にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-41	1	D5	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR8/3浅黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-42	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)10YR5/2灰黄褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-43	1		第Ⅲ層	胴部破片	10YR7/3にぶい黄橙色	小礫含む	良好	後期
21-44	1	D7	SF62	胴部破片	(外)10YR6/4にぶい黄橙色	石英、長石、砂粒含む	不良	後期
21-45	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	(外)10YR4/3にぶい黄褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-46	1	C5	SF12	胴部破片	5Y7/1灰白色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-47	1	C7	SF72	胴部破片	10YR7/3にぶい黄橙色	石英、長石含む	不良	後期
21-48	1		第Ⅳ層	胴部破片	10YR7/2にぶい黄橙色	石英、黒雲母、長石含む	不良	後期
21-49	1		第Ⅲ層	胴部破片	7.5YR7/4にぶい橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	後期
21-50	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	10YR8/2灰白色	赤色粒子、石英、砂粒含む	不良	後期
21-51	1		第Ⅲ層	胴部破片	(外)5YR6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	北陸系
21-52	1	D8	第Ⅳ層	胴部破片	7.5YR6/4にぶい橙色	赤色粒子、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	北陸系？
21-53	1	C10	第Ⅳ層	胴部破片	7.5R7/6橙色	石英、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-54	1	D8	第Ⅳ層	胴部破片	2.5YR5/4にぶい赤褐色	石英、長石含む	不良	東海系
21-55	1	D8	SD2	胴部破片	10YR7/4にぶい黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	東海系
21-56	1	C7	SF63	胴部破片	10YR6/2灰黄褐色	白色粒子、雲母含む	良好	東海系
21-57	1	トレンチ	第Ⅳ層	胴部破片	(外)10YR3/1黒褐色	石英、黒雲母、砂粒、長石含む	不良	曽谷式
21-58	1		表採	口縁部破片	5YR6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	やや不良	安行Ⅰ式
21-59	1		第Ⅲ層	口縁部破片	2.5Y3/1黒褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	安行ⅢC式
21-60	1	C7	SF71	口縁部破片	10YR8/4浅黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	大洞B式
21-61	1	C9	SF118	口縁部破片	7.5YR5/3にぶい褐色	石英、黒雲母、長石含む	不良	大洞B式
21-62	1	D8	SF79	口縁部～胴部1/4残存	10YR7/3にぶい黄橙色	雲母、長石、小礫含む	良好	大洞B式
21-63	1	D11	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	赤色粒子、石英、砂粒、長石含む	不良	大洞C1式
21-64	1	D7	SF62	破片	(外)10YR4/1褐灰色	石英、砂粒、長石含む	やや不良	天王山式
21-65	1		第Ⅲ層	胴部破片	7.5YR6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-66	1		第Ⅲ層	破片	(外)5YR6/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-67	1	D9	第Ⅳ層	破片	7.5YR7/6橙色	石英、金雲母、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-68	1		第Ⅳ層	口縁部破片	10YR8/3浅黄橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-69	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	2.5YR8/2灰白色	赤色粒子、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-70	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5YR7/4にぶい橙色	黒雲母、砂粒、長石含む	不良	天王山式
21-71	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	7.5YR6/3にぶい褐色	石英、砂粒、長石含む	不良	樫王式
21-72	1	C9	第Ⅳ層	胴部破片	(外)7.5YR7/6橙色	石英、砂粒、長石含む	不良	樫王式
21-73	1	D7	SF67	注口部	10YR7/3にぶい黄橙色	白色粒子、小礫含む	良	注口土器
22-01	1	D6	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)5YR5/3にぶい赤褐色	白色粒子、雲母含む	良	
22-02	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5ＹＲ4/2灰褐色	白色粒子、雲母含む	良	
22-03	1	D7	SF62	口縁部破片	(外)10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、透明粒子含む	良	
22-04	1	D5	SF34	口縁部破片	(外)7.5YR5/3にぶい褐色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-05	1	D12	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5YR6/3にぶい褐色	白色粒子、雲母含む	良	
22-06	1	D10	SF105	口縁部破片	(外)10YR6/2灰黄褐色	白色粒子、石英含む	良	
22-07	1	D7	SF62	口縁部破片	10YR7/4にぶい黄橙色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子、雲母含む	良	
22-08	1	D10	流路包含層	口縁部破片	10YR7/1灰白色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-09	1	C7	SF63	口縁部破片	10YR6/2灰黄褐色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-10	1	D7	SF69	口縁部破片	7.5YR6/4にぶい橙色	小礫含む	良	
22-11	1	C7	SF63	口縁部破片	10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、石英、礫含む	良	
22-12	1	D7	SF62	口縁部破片	(外)7.5YR5/2灰褐色	白色粒子、石英含む	良	
22-13	1	C7	SF63	口縁部破片	5YR5/2灰褐色	白色粒子、小礫含む	良	
22-14	1	C5	SP17	口縁部破片	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	白色粒子、透明粒子含む	良	
22-15	1	D10	流路包含層	口縁部破片	2.5Y7/1灰白色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-16	1		第Ⅲ層	口縁部破片	7.5YR6/4にぶい橙色	白色粒子、透明粒子、礫含む	良	
22-17	1	C7	SF69	口縁部破片	(外)7.5YR6/4にぶい橙色	長石、小礫含む	良	
22-18	1		集石土坑1	口縁部破片	10YR7/2にぶい黄橙色	透明粒子、褐色粒子含む	良	
22-19	1	D11	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5YR4/2灰褐色	長石、小礫含む	良	
22-20	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	2.5Y8/2灰白色	長石、小礫含む	良	
22-21	1	D7	SF62	胴部破片	10YR5/2灰黄褐色	小礫含む	良	
22-22	1		第Ⅲ層	胴部破片	10YR8/3浅黄橙色	小礫含む	良	

表11　縄文土器観察表（3）

図版番号	調査区	グリット	出土遺構・層位	残存	色調	胎土	焼成	備考
22-23	1		第Ⅲ層	胴部破片	2.5Y8/1灰白色	小礫含む	良	
22-24	1	C11	SF106	胴部破片	(外)7.5YR7/3にぶい橙色	白色粒子、小礫含む	良	
22-25	1	D9	第Ⅳ層	胴部破片	(外)7.5YR6/3にぶい褐色	白色粒子、小礫含む	良	
22-26	1	D8	第Ⅳ層	胴部破片	(外)2.5Y6/1黄灰色	長石、小礫含む	良	
22-27	1		第Ⅲ層	胴部破片	7.5YR4/1褐灰色	白色粒子、雲母、小礫含む	良	
22-28	1	D9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)5YR5/4にぶい赤褐色	白色粒子、透明粒子含む	良	
22-29	1	C10	流路包含層	口縁部破片	(外)7.5YR6/4にぶい橙色	白色粒子、礫含む	良	
22-30	1	D9	攪乱	口縁部破片	(外)10YR8/2灰白色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-31	1	D10	SF105	口縁部破片	10YR6/2灰黄褐色	白色粒子、金色粒子含む	良	
22-32	1	C9	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、金雲母、透明粒子含む	良	
22-33	1	C7	SF63	口縁部破片	7.5R5/2灰褐色	密　白色粒子、透明粒子含む	良	
22-34	1	C10	流路包含層	口縁部破片	10YR7/2にぶい黄橙色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-35	1	D10	第Ⅳ層	口縁部破片	(外)7.5YR7/4にぶい橙色	白色粒子、透明粒子含む	良	
22-36	1	D9	攪乱	胴部破片	(外)7.5YR5/2灰褐色	長石、雲母、小礫含む	良	
22-37	1	D7	SF62	胴部破片	7.5YR5/3にぶい褐色	長石、雲母、小礫含む	良	
22-38	1	C7	SF63	胴部破片	(外)7.5YR4/2灰褐色	小礫含む	良	
22-39	1	D8	第Ⅳ層	胴部破片	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	長石、小礫含む	良	
22-40	1	D7	SF62	胴部破片	(外)5YR2/1黒褐色	白色粒子、雲母、小礫含む	良	
22-41	1	C6	SF61	胴部破片	(外)10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、雲母、小礫含む	良	
22-42	1	D9	集石土坑1	胴部破片	7.5YR4/2灰褐色	長石、小礫含む	良	
22-43	1	D11	第Ⅳ層	胴部破片	7.5YR5/3にぶい褐色	白色粒子、小礫含む	良	
22-44	1	C9	SF118	口縁部破片	(外)7.5YR5/2灰褐色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-45	1	D11	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR7/3にぶい黄橙色	小礫含む	良	
22-46	1	D12	第Ⅳ層	口縁部破片	10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、褐色粒子含む	良	
22-47	1	C10	SP123	口縁部破片	(外)10YR8/2灰白色	白色粒子、褐色粒子、灰色粒子含む	良	
22-48	1	D10	SP121	口縁部破片	5Y8/1灰白色	小礫含む	良	
22-49	1	C10	流路包含層	口縁部破片	(外)10YR8/2灰白色	褐色粒子含む	良	
22-50	1	D7	SF67	口縁部破片	(外)5YR5/3にぶい赤褐色	白色粒子、金色粒子含む	良	
22-51	1	D7	SF67	口縁部破片	(外)7.5YR6/4にぶい橙色	白色粒子、金色粒子含む	良	
22-52	1	C7	SF71	口縁部破片	10YR6/3黄橙色	密白色粒子、礫含む	良	
22-53	1	D9	攪乱	口縁部破片	(外)10YR5/2灰黄褐色	白色粒子、灰色粒子、透明粒子含む	良	
23-01	1	D5	SF1	底部1/3残存	2.5Y7/1灰白色	小礫含む	良	
23-02	1	D11	第Ⅳ層	底部2/5残存	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	小礫含む	良	
23-03	1	D9	集石土坑2	底部1/3残存	10YR8/2灰白色	白色粒子、小礫含む	良	
23-04	1	D7	SF62	底部2/5残存	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	小礫含む	良	
23-05	1		第Ⅲ層	底部破片	10YR7/3にぶい黄橙色	長石、雲母、小礫含む	良	
23-06	1	D6	第Ⅳ層	底部破片	2.5YR6/8橙色	長石、小礫含む	良	
23-07	1	D7	SF62	底部1/3残存	(外)2.5YR7/3浅黄色	小礫含む	良	
23-08	1	D5	第Ⅳ層	底部2/5残存	2.5Y5/6明赤褐色	長石、小礫含む	良	
23-09	1	D9	第Ⅳ層	底部破片	(外)7.5YR8/4浅黄橙色	小礫含む	良	
23-10	1		第Ⅲ層	底部1/4残存	(外)7.5YR7/3にぶい橙色	長石、小礫含む	良	
23-11	1	D7	SF62	底部1/6残存	10YR7/3にぶい黄橙色	白色粒子、小礫含む	良	
23-12	1	D12	第Ⅳ層	底部1/3残存	(外)10YR7/2にぶい黄橙色	小礫含む	良	
23-13	1	D9	第Ⅳ層	底部1/4残存	(外)7.5YR8/3浅黄橙色	長石、小礫含む	良	
23-14	1	C9	SF106	底部一部欠損	(外)7.5YR7/4にぶい橙色	白色粒子、小礫含む	良	
23-15	1	D8	SF68	底部1/4残存	(外)10YR8/3浅黄橙色	小礫含む	良	
23-16	1		第Ⅲ層	底部1/3残存	(外)10YR8/2灰白色	白色粒子、小礫含む	良	
23-17	1	D8	第Ⅳ層	底部1/4残存	(外)2.5YR8/2灰白色	小礫含む	良	
23-18	1	D11	第Ⅳ層	底部1/3残存	10YR8/3浅黄橙色	長石、小礫含む	良	
23-19	1	C8	SP116	底部1/4残存	(外)10YR8/2灰白色	白色粒子、赤褐色粒子、小礫含む	良	
23-20	1	D10	流路包含層	底部2/5残存	10YR7/3にぶい黄橙色	長石、小礫含む	良	
23-21	1	D11	第Ⅳ層	底部1/3残存	(外)10YR7/3にぶい黄橙色	長石、小礫含む	良	

2　石器

今回の調査では124点の石器が確認された。その他にも頁岩、黒曜石の剥片が優に数百点を越える。大半が1区の包含層（第Ⅲ層、第Ⅳ層）からの出土であり、遺構内出土のものは少ないが、概ね縄文時代後期後半から晩期前半に属するものと考えられる。各器種ごとの内訳は表に示す通りである。未完成品を含めて石鏃が65点と総出土数の55％を占める。次いで打製石斧21％（25点）、磨製石斧8％（9点）が出土している。

表12　出土石器点数表

器種名	出土点数
石鏃	65
打製石斧	25
磨製石斧	9
楔形石器	4
石錐	4
スクレイパー	4
加工痕のある剥片	2
敲石	2
石剣	2
礫器	1
磨石	1
石錘	1
石皿	1
石核	3
合計	124

石鏃（第24図1～第25図、図版8）

65点出土し、石器の中では首位を占める。今回出土の石鏃の内、有茎鏃16点、無茎鏃9点、未完成品31点である。65点のうち未完成品が47％を占める。また、完成品31点のうち有茎鏃は16点で52％を占めている。

ここでは、概ね左右対称に先端部、基部が作出しているものを完成品とした。分類にあたっては、鈴木道之助氏の基部形態の分類を参考に、有茎凹基鏃、有茎平基鏃、無茎凹基鏃、無茎平基鏃、尖基鏃に分類した。石材は完成品のほとんどが黒色粘板岩で、黒曜石、チャートが少量認められる。なお、黒曜石は黒色透明で長野県産と推定される。

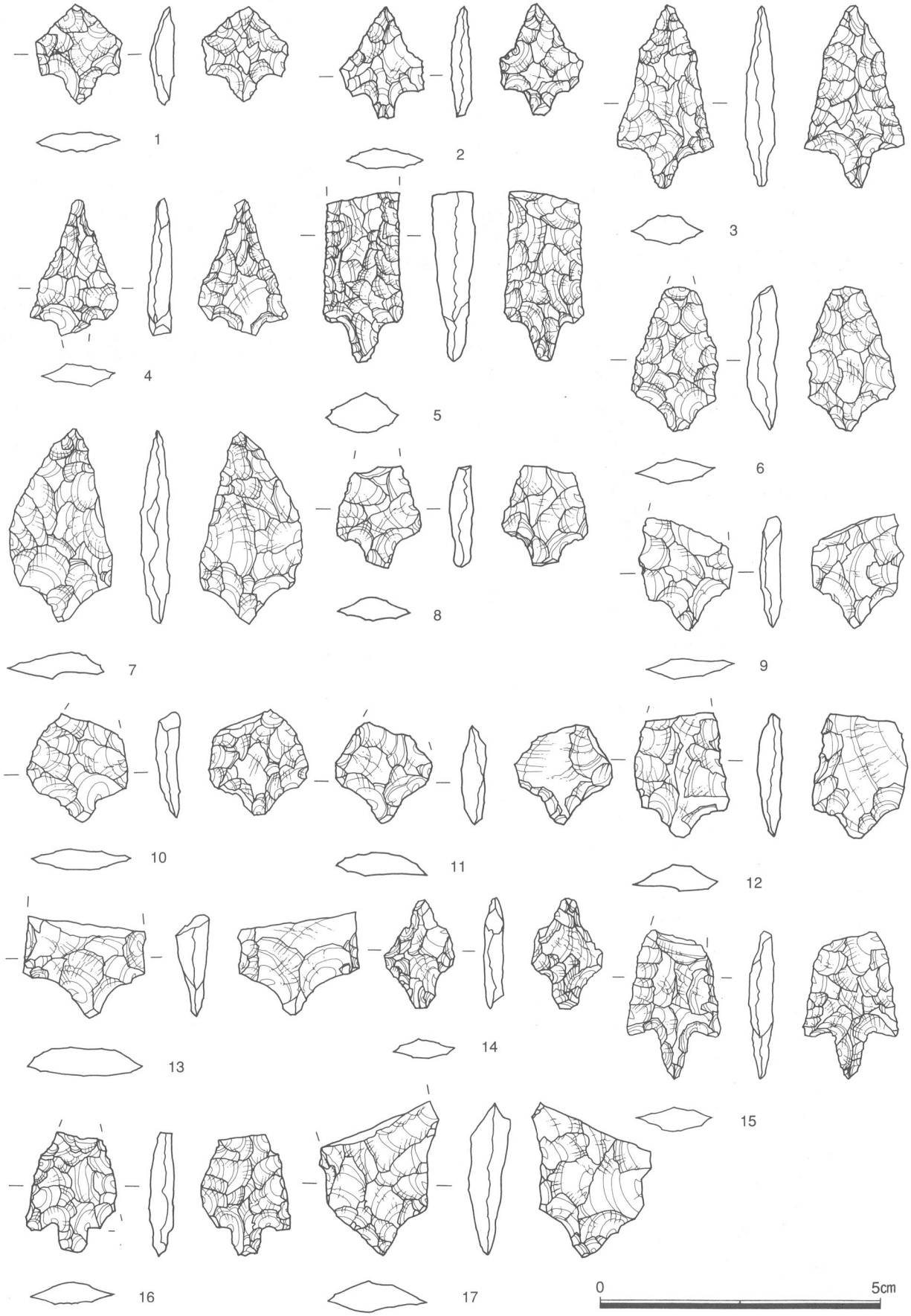
1～17は有茎鏃である。1～3は五角形を呈し、所謂飛行機鏃と呼ばれるものである。5は先端部が欠損しているが、大形の部類にはいるものである。凝灰質頁岩製。7は側辺部が左右対称に調整が施されていないため未完成品の可能性もある。18～23は無茎鏃で6点出土している。18～20は抉りが湾曲している。18は側縁肩部が張り出している。21、22は基部の抉りがV字状を呈する。24～27は尖基鏃とした。断面が分厚い剥片を用いており、素材剥片の剥離面を残していることから有茎鏃の未完成の可能性もある。28は風化した砂質粘板岩である。

未完成品（第26図34～第28図65、図版9）

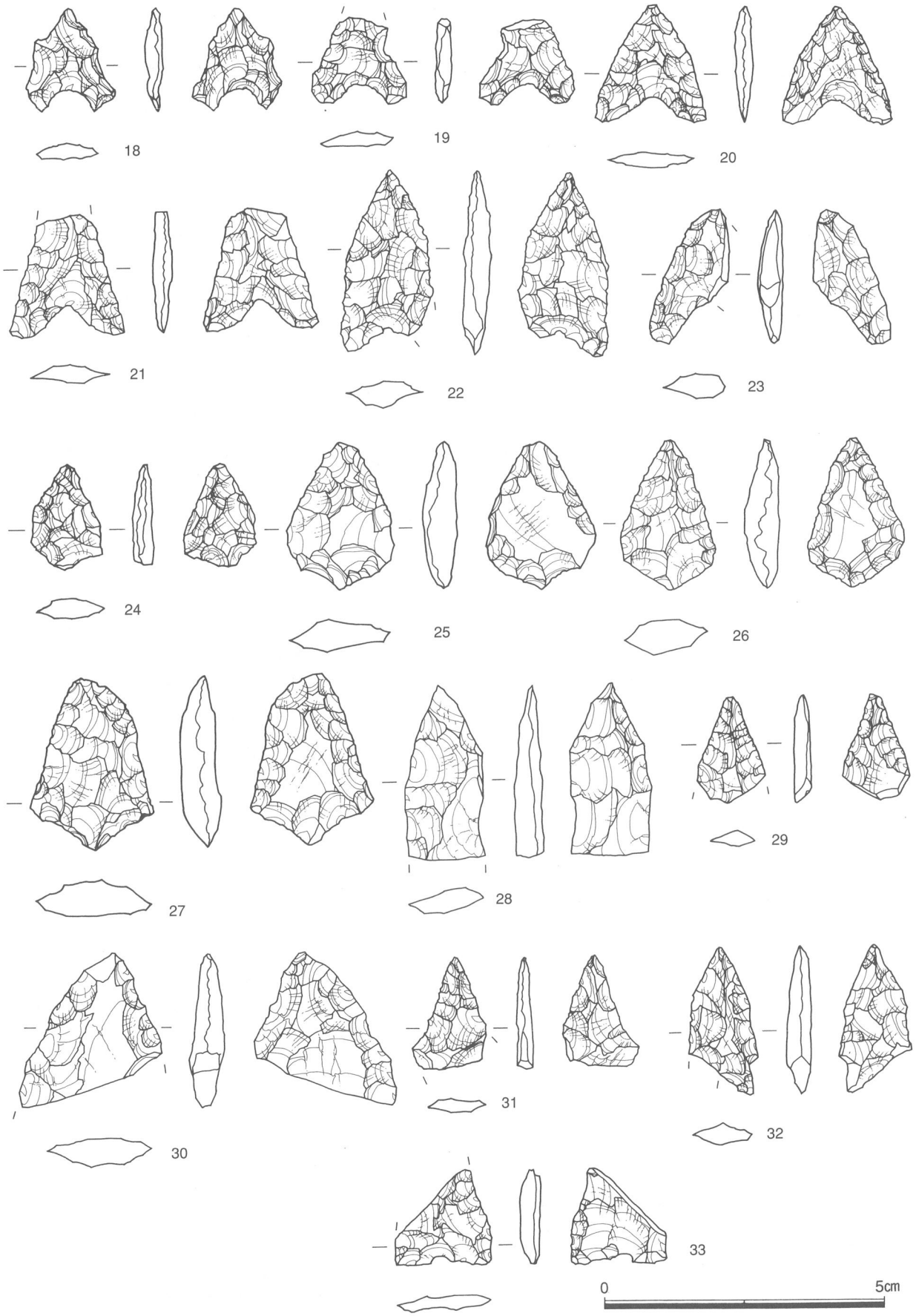
未完成品には製作工程の様々な段階を示す資料が含まれている。比較的厚みの剥片を素材とし、不整形で、器面に粗い調整が施されたものを未完成品とした。平面形態は三角形、楕円形、円形を呈するものがある。

未完成品の石材比率では黒色珪質頁岩製が17点で61％、黒色粘板岩製は8点で30％、チャート3点11％、黒曜石2点7.6％を示す。、未完成品としたものの中に珪質頁岩が61％と多く含まれ、完成品の石材比率は黒色粘板岩が61％と多く示している。黒色粘板岩製よりも珪質頁岩製のほうが製作途中でより壊れやすく、失敗品として廃棄されたのではないかと考えられ、これは石材差によるものと思われる。

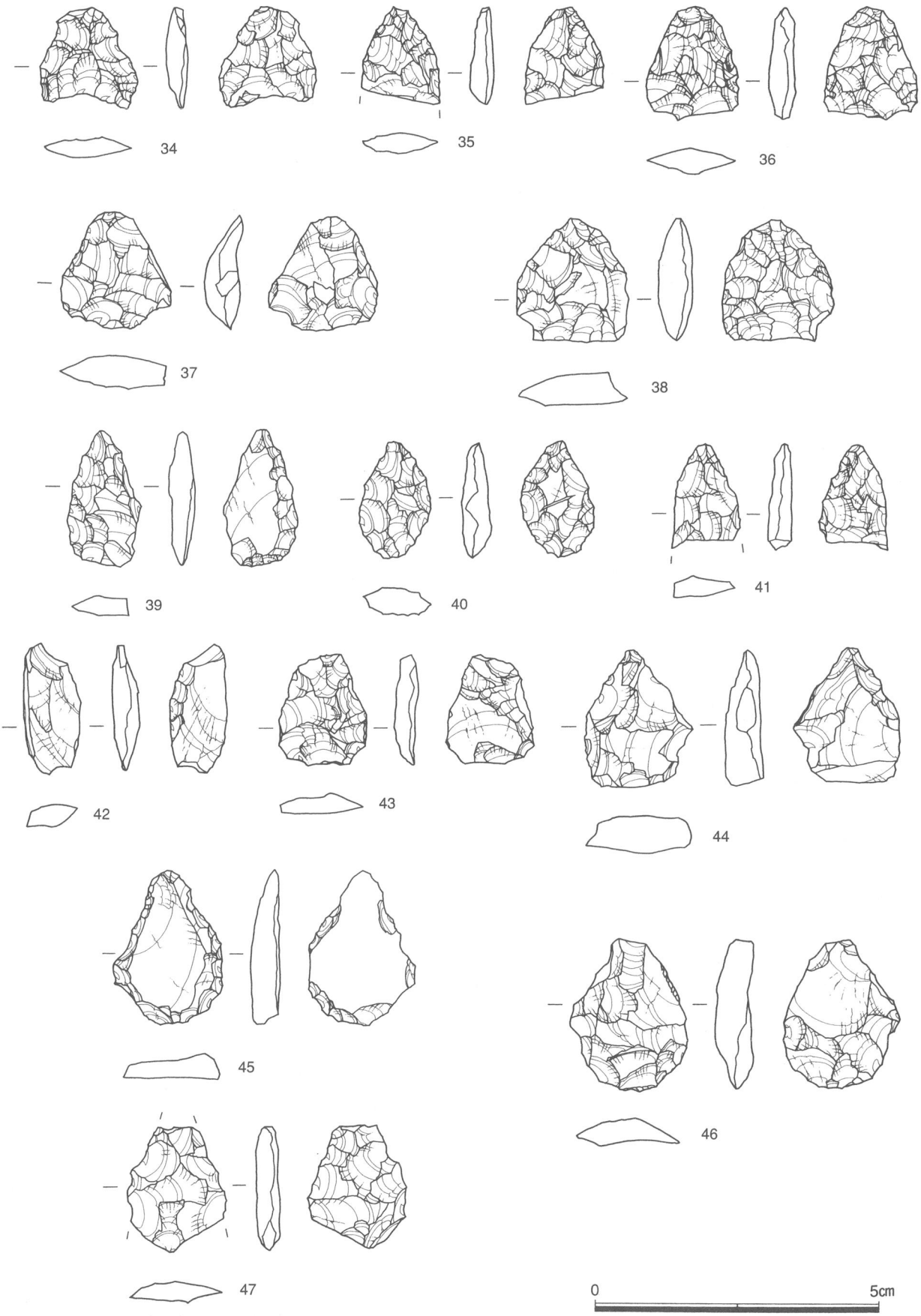
34は先端部の作出、側辺部、基部の調整が粗いことから無茎鏃の未完成品とした。36～38は正三角形を呈する。45、46は全体の形態は紡錘形を呈し、側縁部、基部に粗い調整を施す。52、53は細長い小剥片を用い、先端部の調整を施している。有茎鏃の未完成品であろうか。54、55は木葉形に整形している。剥離調整で中央部断面が厚い。56、57は三角形を呈し、石鏃の素材剥片と考えられる。58、59は三角形を呈し、側縁部に調整を施している。60は飛行機鏃の未完成品と考えられ、側縁部、基部に粗い調整を施しており、中央部にコブ状の突起が生成されている。63は、石器の軸にのびる長い剥片を剥離することで、素材の中央部の厚さを調整していると考えられる。



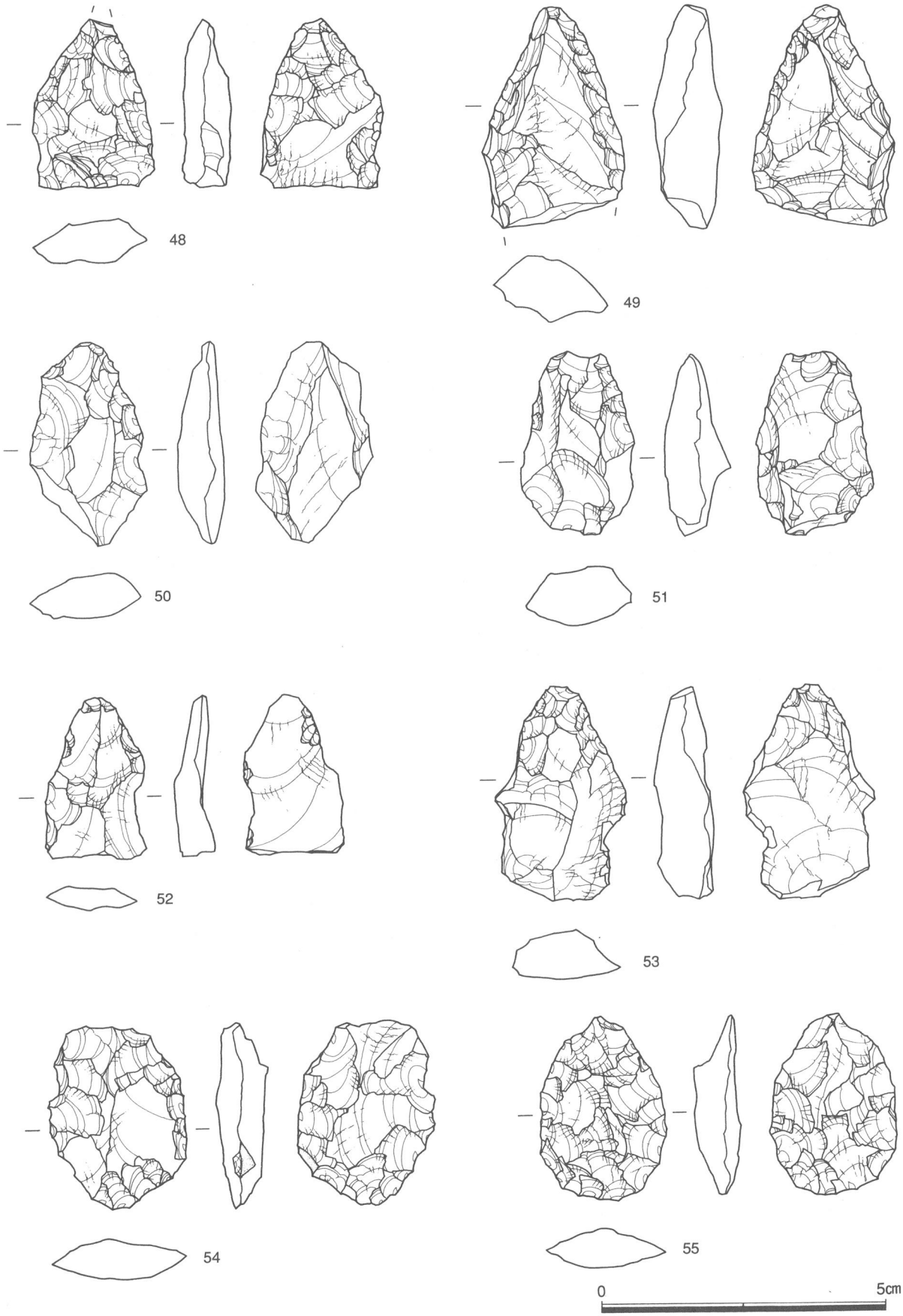
第24図　石器（1）



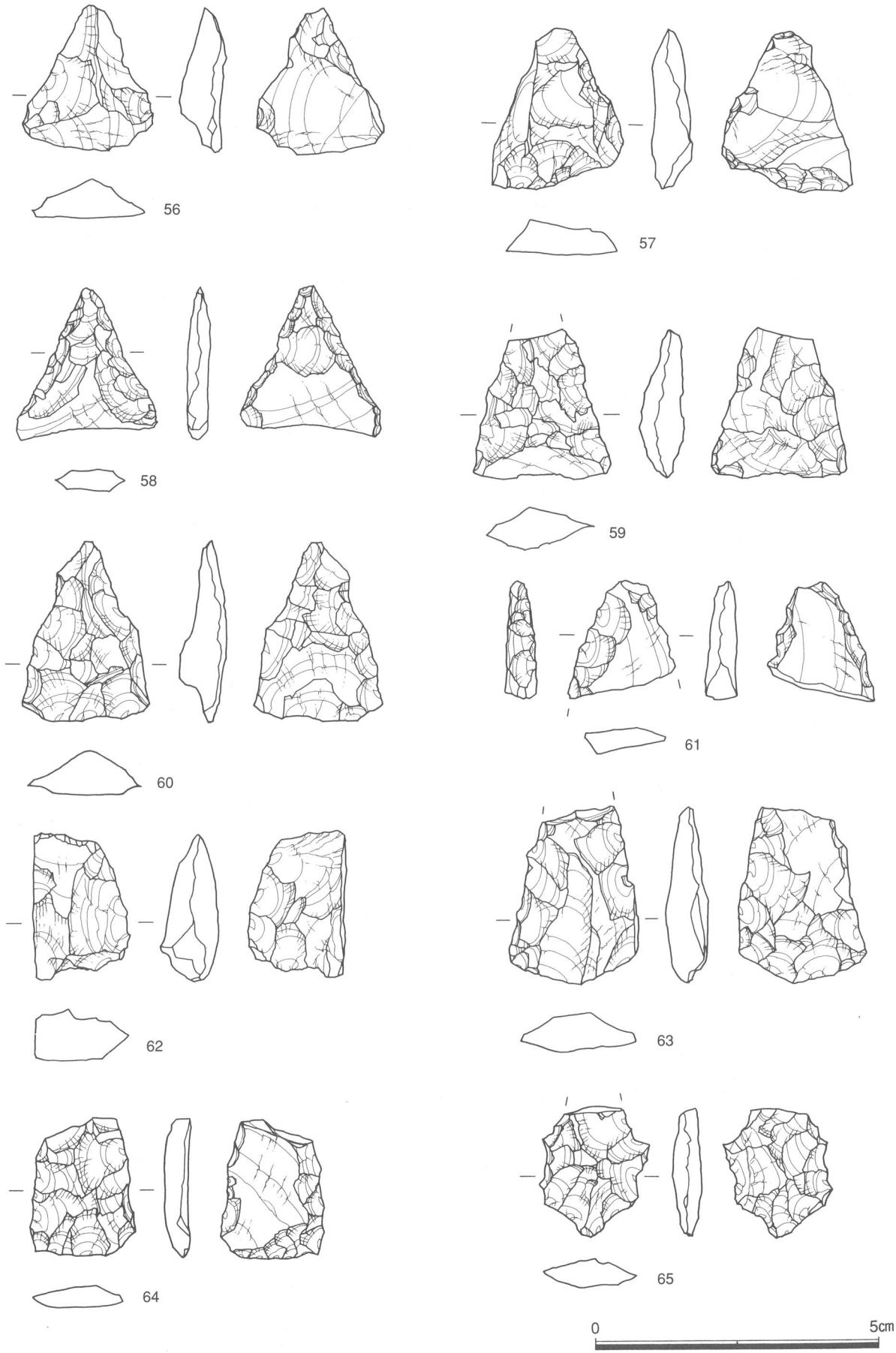
第25図　石器（2）



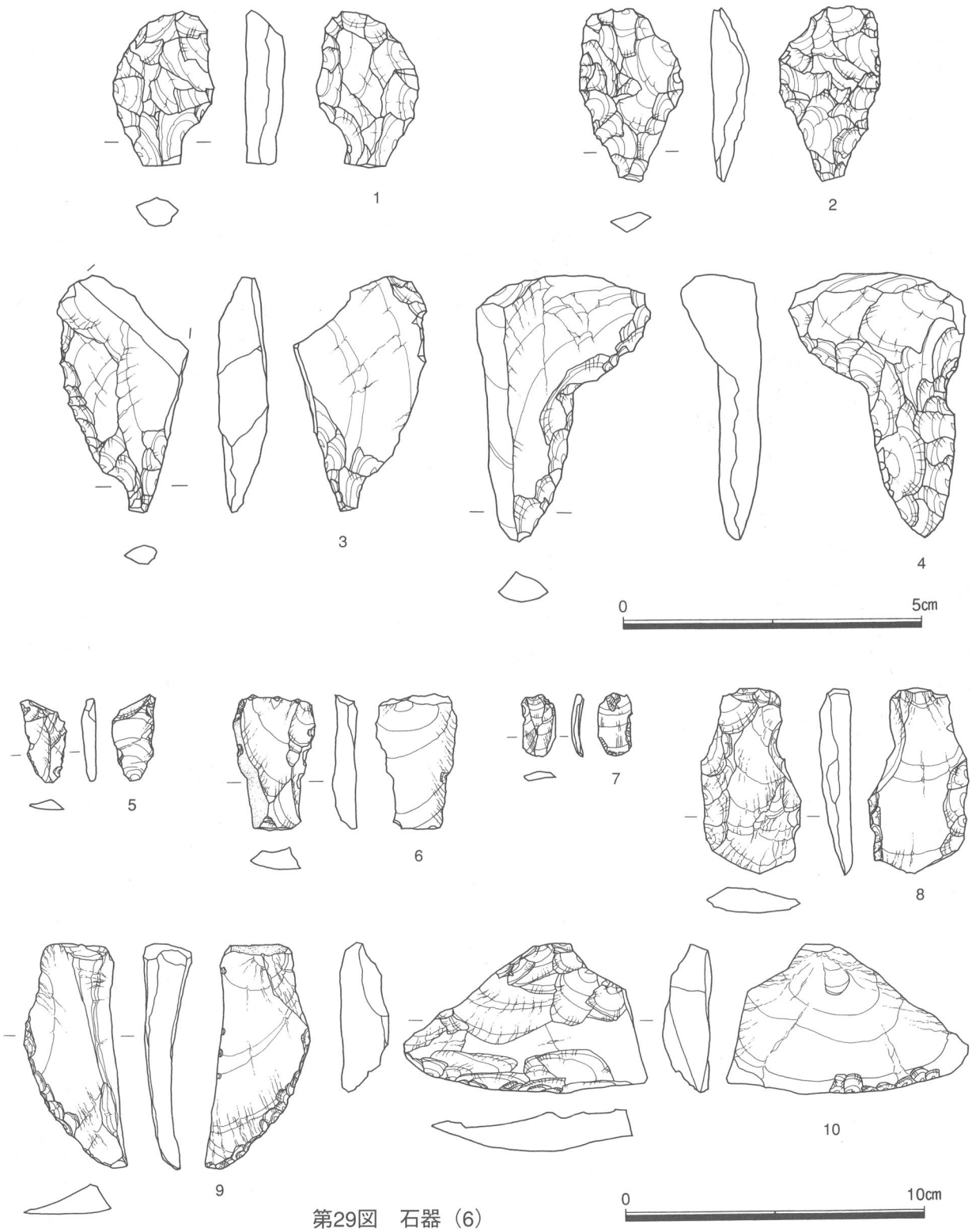
第26図　石器（3）



第27図　石器（4）



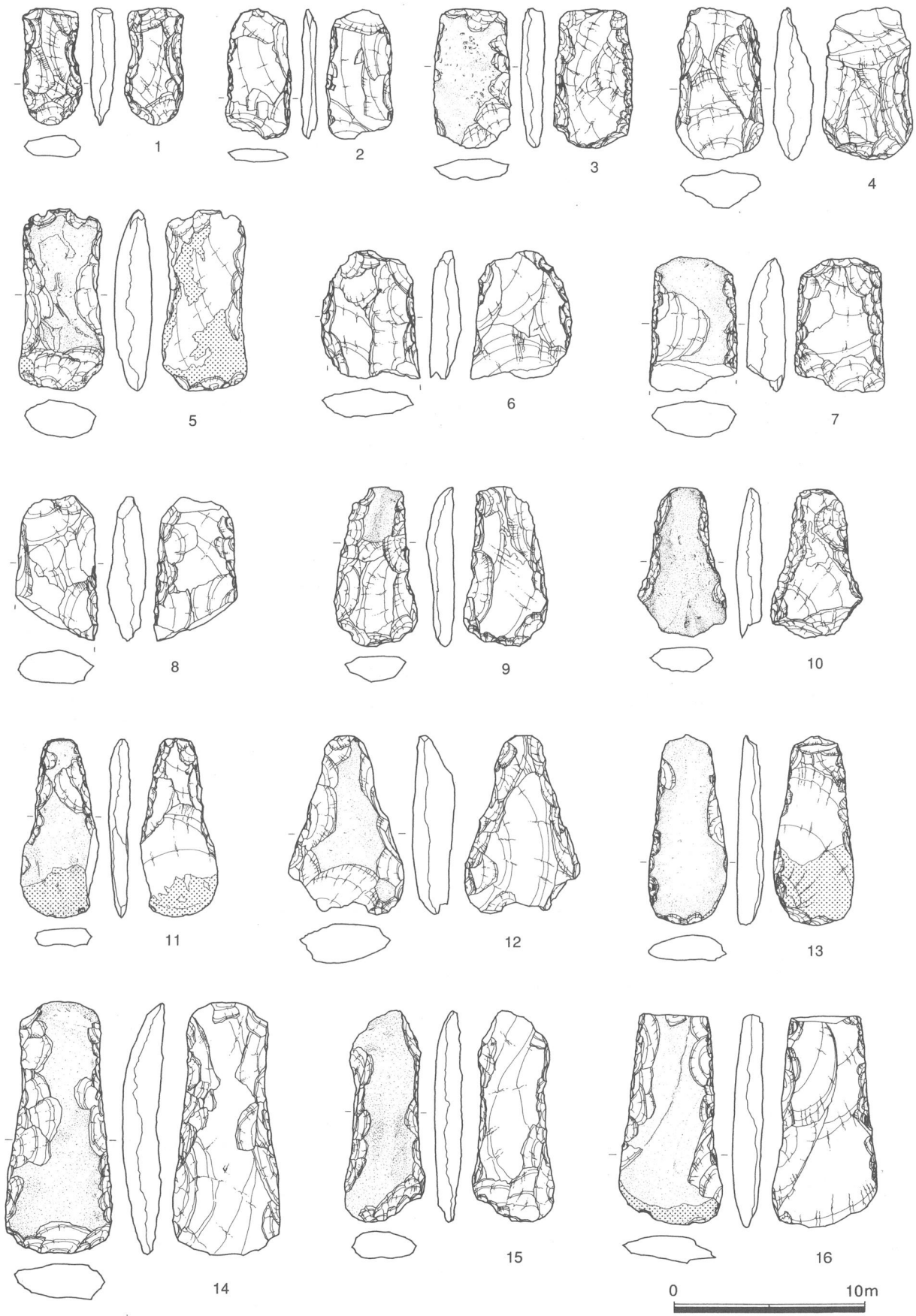
第28図　石器（5）



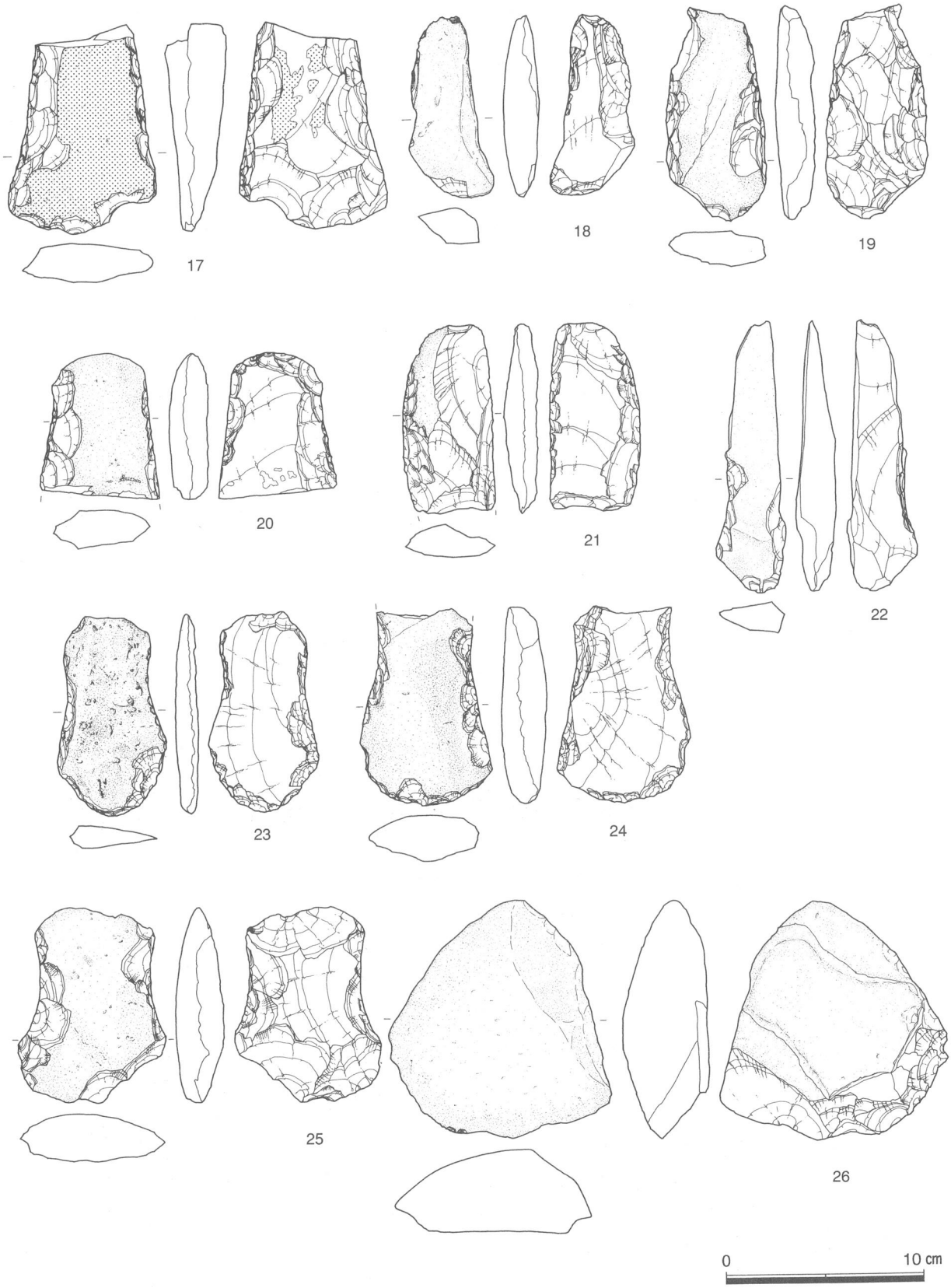
第29図　石器（6）

石錐（第29図1～4、図版9）

4点出土している。1～3は剥片縁辺部にわたって調整加工を行っている。錐部は欠損しており、断面形は菱形を呈する。2は平面形態が三角形を呈し、断面は菱形を呈する。3は横長の剥片を用い、縁辺部を加工し、片面に抉りを入れて錐部を作出している。4はつまみ状の頭部を持ち、L字状を呈する。剥片の一端を部分加工し、錐部を作出している。石匙の可能性もある。石材は全て黒色珪質頁岩である。



第30図　石器（7）



第31図　石器（8）

第32図　石器（9）

加工痕をもつ剥片（第29図5・6、図版9）

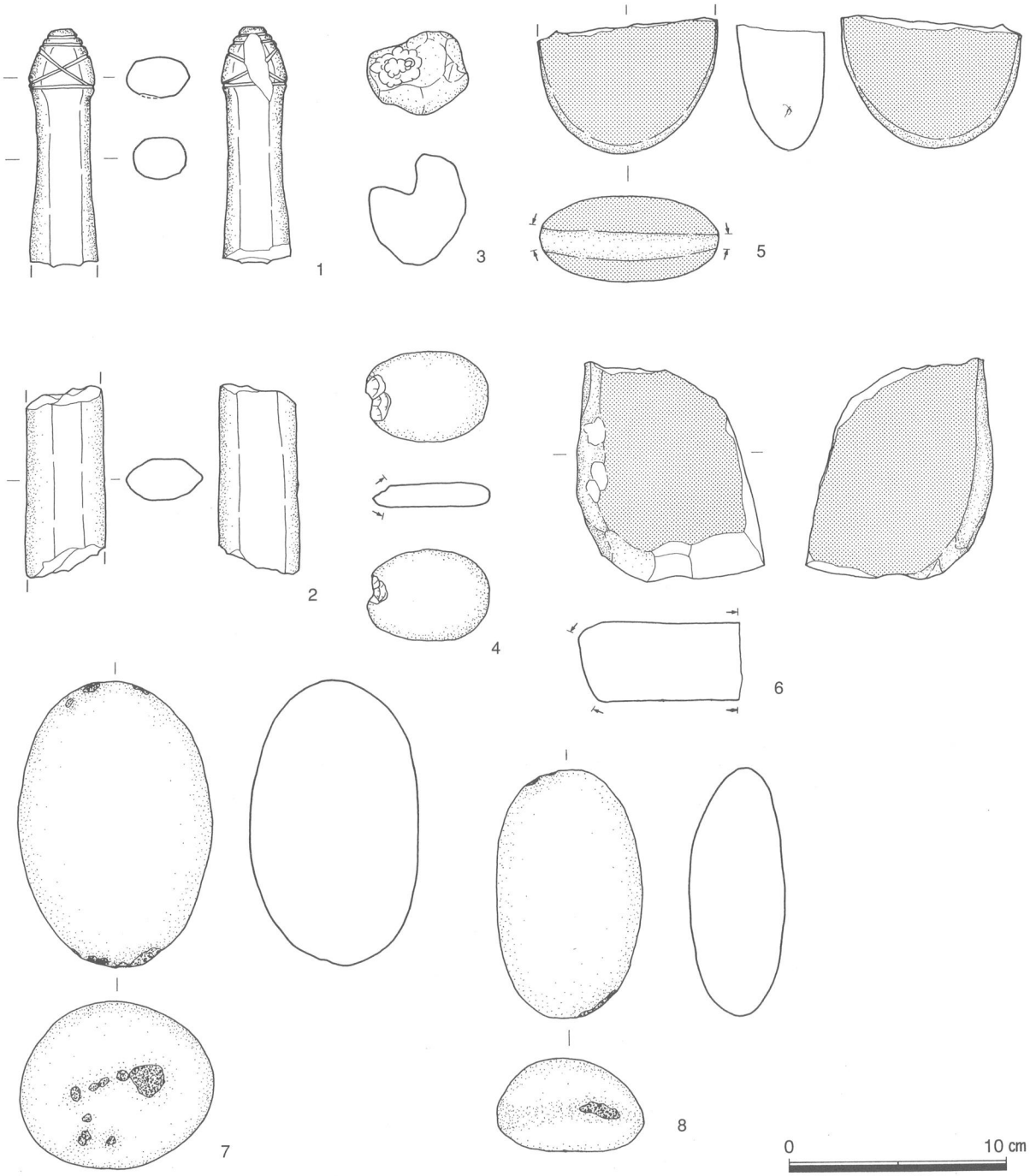
2点出土している。5・6は縦長の剥片を用い、側縁に使用痕が認められる。5は黒色珪質頁岩で、6は黒色頁岩である。

スクレイパー（第29図7～10、図版9）

4点出土している。7は黒曜石製である。9は縦長剥片を用い、1側縁部に細かな剥離調整が加えられている。10は横長剥片を用い、石匙状を呈する。下辺に剥離調整が加えられる。灰色細粒砂岩である。

打製石斧（第30図1～第31図25、図版10）

25点出土している。ここでは大まかに短冊（8点）、撥形11点、分銅形（4点）に分類した。専ら砂岩、粘板岩、頁岩が利用される。2～8は短冊形打製石斧でほとんどが欠損品である。5は裏面に擦痕が観察される。9～22は撥形を呈する。11は両方の刃部に摩耗痕が観察される。14は本遺跡出土中大



第33図　石器（10）

型に属する。側面からみると反っており鍬という印象が強い。16は刃部に摩耗痕が観察される。17は自然面に研磨痕がみられ、基部折損後、砥石として再利用されている。22は縦位半割されている。23・24はわずかに体部に括れがあり、分銅形であろう。25は両側縁中央部に抉りがみられ、分銅形を呈する。

礫器（第31図26、図版10）

1点出土している。中型の礫を素材に側縁部に粗い剥離調整を加え、刃部を形成している。材質は粗粒砂岩である。

磨製石斧（第32図1～9、図版11）

9点出土している。定角式のもの３点、乳棒状のもの4点、棒状のもの1点、小型の定角式のもの1点

である。石材は蛇紋岩と砂岩が主体である。1は定角式で部分的に敲打痕が残るが、ほぼ全面に磨かれている。2は棒状を呈するもので刃幅が2.2cmにすぎず、両刃であることからクサビとしての機能を持っていたと考えられる。4は、欠損品で乳棒状石斧と考えられる。火焼を受けており、材質は不明である。5は、刃部のみを丁寧に研磨しており、擦痕が観察される。8は刃部が折損した後に敲打がみられ、敲石として再利用している。粗粒砂岩製。9は小型の磨製石斧で、側縁部を磨いている。

石剣（第33図1・2、図版11）

2点出土している。1と2は同一個体である。石材は緑泥片岩製で、火焼を受けている。材質は天竜川水系のものであろう。1の有頭部は残存長10.9cm幅3.1cm厚さ1.9cmを測る。上部に２本の平行沈線を施し、下部に1条の沈線が巡り、その間にＸ字状に施す。断面は楕円形を呈する。火焼は製作時によるものか祭祀行為によるものかは明確ではないが、被熱を受けた石剣は他の遺跡からもみられる。

2は1との中間部、下部を欠いているがが同一個体であり、復原すれば全長30cm程であろう。石剣の切断が儀礼的に行われた可能性が推測される。残存長は8.5cm幅3.6cm厚さ1.9cmを測り、断面形は凸レンズ状をなす。器面をタテあるいはナナメ方向に研磨して鈍い稜を作り出している。両刃。

軽石（第33図3、図版11）

1点出土している。軽石は海岸で打ち寄せられたものを採集して使っているため、産地は特定できなかった。長さ5.1cm幅4.7cmのやや角張った楕円形で、研磨面がみられ、砥石と考えられる。径2.1cm深さ1.8cmの凹みがみられる。

石錘（第33図4、図版11）

扁平で楕円形の円礫に片面から小さく打ち欠いて、縄掛け部を作った礫石錘が1点出土している。使用石材は、中粒砂岩製である。

磨石（第33図5、図版12）

1点出土している。断面形は楕円形を呈する。磨面は平面部を使用し、両面にみられる。使用石材は花崗岩製で大井川流域ではみられず、天竜川水系でみられるものである。色調は肌色を呈し、火焼を受けている可能性がある。

石皿（第33図6、図版12）

1点出土している。扁平な礫に平坦な摩耗面を表裏にもつ。材質は中粒砂岩製である。

敲石（第33図7・8、図版12）

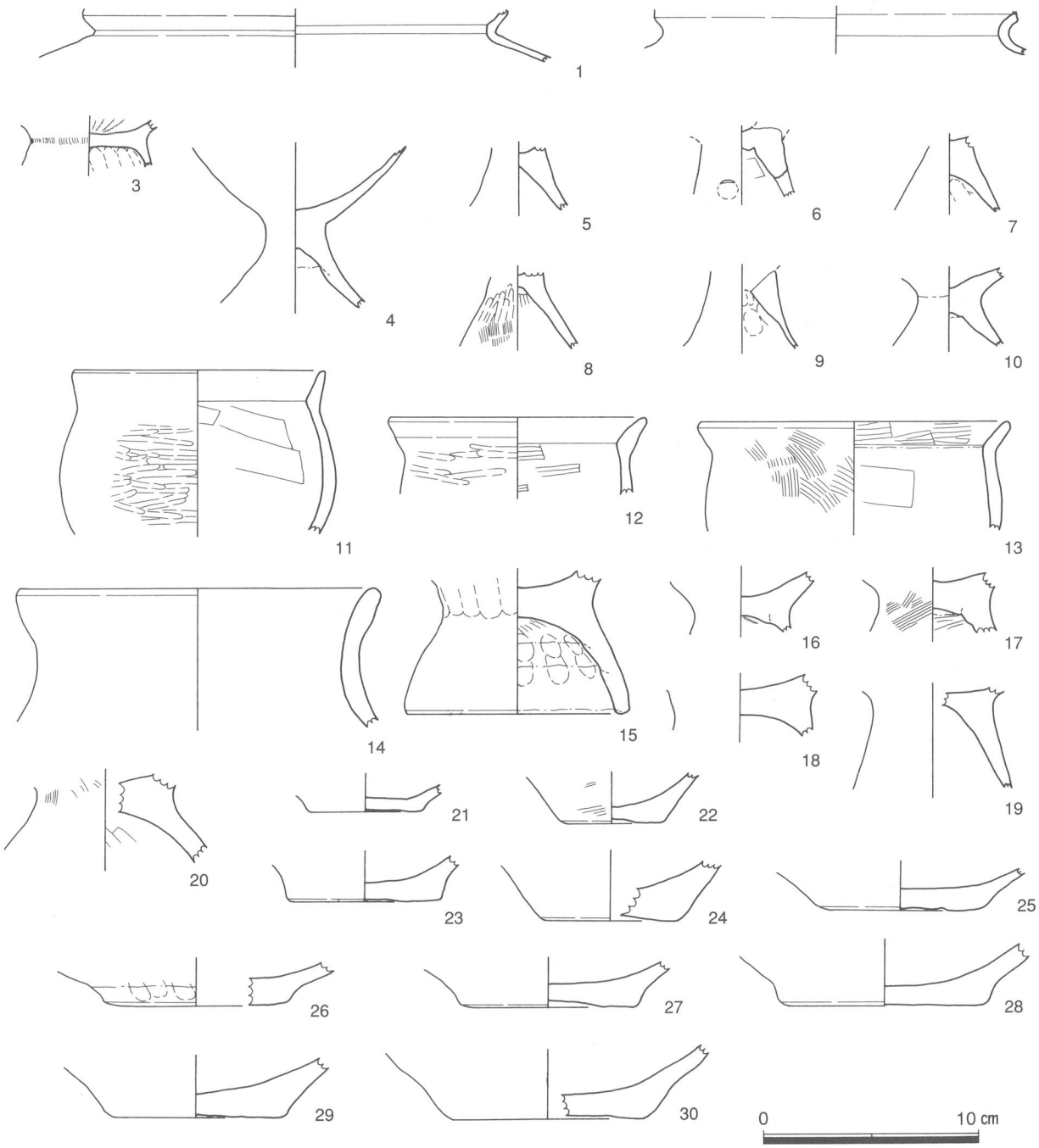
2点出土している。7・8ともに長軸の両端にアバタ状の小さなツブレが残っている。磨面はみられない。

表13　石器観察表（1）

図版番号	調査区・グリット	層位・遺構名	名　称	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重　量	欠損部位	備　考
24-01	D8	SF78	石鏃	暗灰色粘板岩	1.74	1.55	0.42	0.9	完形	
24-02	D9	第Ⅳ層	石鏃	黒色珪質粘板岩	2.00	1.49	0.39	0.9	完形	
24-03		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	3.26	1.80	0.54	2.2	完形	
24-04		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[2.46]	1.57	0.44	1.3	完形	
24-05	D9	攪乱	石鏃	灰色凝灰質頁岩	[3.06]	1.43	0.79	3.2	先端部欠損	
24-06		第Ⅲ層	石鏃	黒色珪質頁岩	[2.60]	1.56	0.60	2.2	先端部欠損	
24-07	D10	第Ⅳ層	石鏃	黒色粘板岩	3.46	1.85	0.55	2.7	完形	
24-08		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[1.8]	1.53	0.44	1.2	先端部欠損	
24-09		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[2.02]	1.67	0.40	1.2	先端部欠損	
24-10		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[1.90]	1.78	0.44	1.3	先端部欠損	
24-11	D6	第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[1.81]	1.75	0.46	1.2	先端部欠損	
24-12		第Ⅲ層	石鏃	暗灰色砂質粘板岩	[2.25]	1.71	0.49	1.6	先端部欠損	
24-13		第Ⅲ層	石鏃	黒色砂質頁岩	[1.84]	2.19	0.61	2.0	先端部欠損	
24-14	C9	第Ⅳ層	石鏃	黒曜石	2.01	1.28	0.37	0.8	完形	
24-15	D9	攪乱	石鏃	灰色凝灰質粘板岩	[2.67]	1.71	0.45	1.7	先端部欠損	
24-16		第Ⅲ層	石鏃	黒曜石	[2.15]	1.63	0.47	1.4	先端部欠損	
24-17	D8	SD2	石鏃	黒色珪質頁岩	[2.71]	2.14	0.75	2.6	先端部欠損	
25-18		第Ⅳ層	石鏃	黒色粘板岩	1.88	1.61	0.35	0.8	完形	
25-19		第Ⅳ層	石鏃	黒色粘板岩	[1.53]	1.70	0.29	0.8	先端部欠損	
25-20	D5	SP41	石鏃	黒色珪質粘板岩	2.12	2.00	0.34	1.2	完形	
25-21		第Ⅲ層	石鏃	暗灰色粘板岩	[2.19]	2.06	0.38	1.3	先端部欠損	
25-22		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	3.29	[1.66]	0.52	2.0	脚部欠損	
25-23		第Ⅲ層	石鏃	暗灰色砂質粘板岩	2.44	[1.44]	0.50	1.1	脚部欠損	

表14　石器観察表（2）

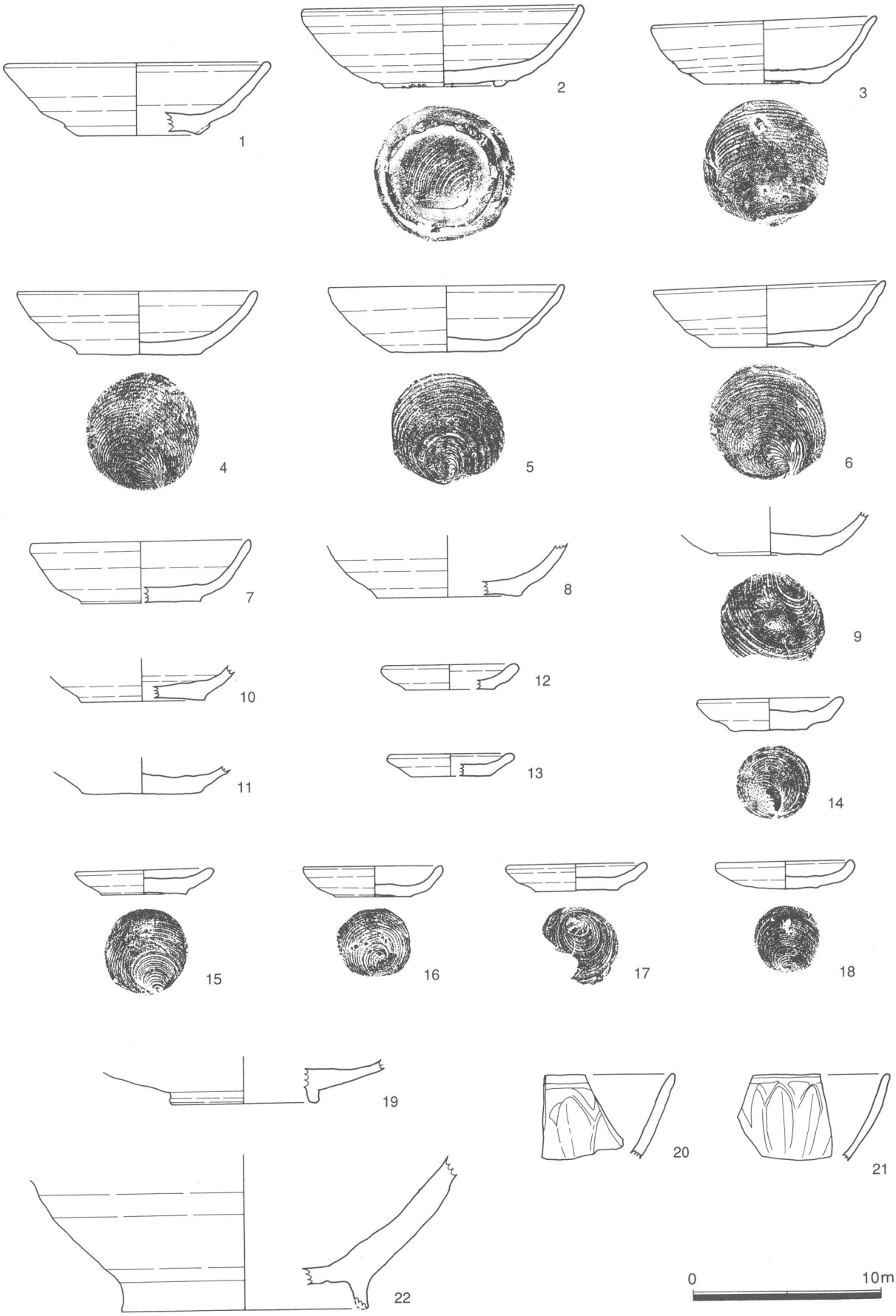
図版番号	調査区・グリット	層位・遺構名	名　称	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重　量	欠損部位	備　考
25-24		第Ⅳ層	石鏃	黒曜石	1.87	1.32	0.43	0.9	完形	
25-25		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	2.66	1.95	0.66	0.3	完形	
25-26	C9	第Ⅳ層	石鏃	黒色粘板岩	2.70	1.74	0.64	2.8	完形	
25-27		第Ⅲ層	石鏃	灰色凝灰質頁岩	3.09	2.19	0.73	4.6	完形	
25-28	D7	第Ⅳ層	石鏃	淡灰緑色砂質粘板岩	[3.09]	1.42	0.58	2.2	基部欠損	
25-29	D9	第Ⅳ層	石鏃	黒色粘板岩	[1.91]	1.23	0.35	0.6	基部欠損	
25-30		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[2.76]	2.57	0.64	0.4	基部欠損	
25-31		第Ⅲ層	石鏃	黒色粘板岩	[2.01]	1.39	0.33	0.6	基部欠損	
25-32	D7	第Ⅲ層	石鏃	暗灰色粘板岩	[2.68]	1.28	0.44	1.1	基部欠損	
25-33		第Ⅲ層	石鏃	暗灰緑色珪質頁岩	[1.75]	1.76	0.40	0.8	先端部欠損	
26-34	D7	第Ⅳ層	石鏃未完成品	淡灰緑色凝灰質粘板岩	1.82	1.74	0.42	1.1	完形	
26-35		攪乱	石鏃未完成品	淡灰緑色粘板岩	[1.74]	1.42	0.46	0.9	基部欠損	
26-36	D7	第Ⅲ層	石鏃未完成品	暗灰緑色珪質頁岩	2.0	1.63	0.51	1.4	完形	
26-37		第Ⅲ層	石鏃未完成品	黒曜石	2.06	1.96	0.70	2.0	完形	
26-38		第Ⅲ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	2.18	2.01	0.61	2.9	完形	
26-39	C8	SD1	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	2.39	1.31	0.46	1.3	完形	
26-40	D9	攪乱	石鏃未完成品	灰緑色チャート	2.08	1.29	0.58	1.3	完形	
26-41		第Ⅲ層	石鏃未完成品	灰緑色凝灰質粘板岩	[1.85]	1.21	0.42	0.9	基部欠損	
26-42	D5	中世SF1	石鏃未完成品	暗灰色チャート	2.31	1.04	0.51	1.3	完形	
26-43	D8	SD2	石鏃未完成品	暗灰緑色チャート	1.96	1.54	0.44	1.4	完形	
26-44	D9	流路包含層	石鏃未完成品	灰緑色凝灰質頁岩	2.41	1.91	0.75	2.7	完形	
26-45	D9	流路包含層	石鏃未完成品	黒色粘板岩	2.72	1.89	0.53	2.5	完形	
26-46		第Ⅲ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	2.67	2.07	0.69	3.2	完形	
26-47	D7	第Ⅳ層	石鏃未完成品	淡灰緑色凝灰質粘板岩	[2.21]	[1.75]	0.44	1.5	基部欠損	
27-48		第Ⅲ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	[2.99]	2.16	0.85	5.6	完形	
27-49	B6	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	[3.92]	2.55	1.24	11.0	基部欠損	
27-50	D9	流路包含層	石鏃未完成品	黒色頁岩	3.58	2.11	0.88	5.8	完形	
27-51	C8	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒灰色珪質頁岩	3.22	2.07	1.10	6.5	完形	
27-52	C9	第Ⅳ層	石鏃未完成品	暗灰緑色珪質頁岩	2.84	1.78	0.72	2.4	完形	
27-53	D6	第Ⅳ層	石鏃未完成品	暗灰色珪質頁岩	3.79	2.35	1.05	7.4	完形	
27-54	D11	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	3.24	2.47	0.92	6.8	完形	
27-55		第Ⅲ層	石鏃未完成品	暗灰緑色珪質頁岩	3.19	2.26	0.82	5.5	完形	
28-56	D7	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	2.57	2.32	0.78	3.2	完形	
28-57	D9	第Ⅳ層	石鏃未完成品	淡灰色珪質頁岩	2.86	2.29	0.77	3.8	完形	
28-58	D6	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒色粘板岩	2.70	2.50	0.45	2.2	完形	
28-59	D5	第Ⅳ層	石鏃未完成品	淡灰色凝灰質頁岩	[2.66]	2.42	0.79	4.1	先端部欠損	
28-60	D5	第Ⅳ層	石鏃未完成品	黒色粘板岩	3.21	2.29	0.83	3.6	完形	
28-61	D10	第Ⅳ層	石鏃未完成品	暗灰色珪質頁岩	[2.12]	1.91	0.59	1.9	欠損	
28-62	D9	流路包含層	石鏃未完成品	暗灰緑色珪質頁岩	2.61	1.74	1.05	4.6	完形	
28-63		表採	石鏃未完成品	黒色珪質頁岩	[3.13]	2.29	0.77	5.1	欠損	
28-64	D5	第Ⅳ層	石鏃未完成品	暗灰色粘板岩	2.47	1.88	0.5	2.5	完形	
28-65		第Ⅲ層	石鏃未完成品	灰白色凝灰質頁岩	[2.28]	1.91	0.53	1.9	欠損	
29-01		第Ⅲ層	石錐	黒色珪質頁岩	[2.63]	1.72	0.68	2.9	先端部欠損	
29-02	D9	流路包含層	石錐	黒色珪質頁岩	2.90	1.72	0.62	2.7	先端部欠損	
29-03		第Ⅲ層	石錐	黒色珪質頁岩	[3.97]	2.17	0.85	6.5	先端部欠損	
29-04	C9	第Ⅳ層	石錐	黒色珪質頁岩	4.43	2.93	1.35	9.4	完形	
29-05		第Ⅲ層	加工痕のある剥片	黒色珪質頁岩	2.83	1.47	0.53	1.6	完形	
29-06	D9	流路包含層	加工痕のある剥片	黒色頁岩	4.55	2.74	0.85	10.4	完形	
29-07	D7	第Ⅳ層	スクレイパー	黒曜石	2.09	1.17	0.38	0.8	完形	
29-08	D10	第Ⅳ層	スクレイパー	黒色頁岩	6.22	3.39	1.15	22.1	完形	
29-09		第Ⅲ層	スクレイパー	黒色珪質粘板岩	7.61	3.46	1.6	27.4	完形	
29-10		表採	スクレイパー	灰色細粒砂岩	5.06	8.18	1.68	50.0	完形	
30-01	D6	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色砂質粘板岩	6.3	3.1	1.2	31.3	完形	
30-02	D9	第Ⅳ層	打製石斧	暗褐灰色粘板岩	6.87	3.48	0.86	20.0	完形	
30-03	D9	攪乱	打製石斧	黒色粘板岩	4.74	1.41	1.28	52.9	完形	
30-04	D11	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色砂質頁岩	8.1	4.7	2.1	77.6	完形	
30-05	D11	第Ⅳ層	打製石斧	緑色凝灰質砂岩	9.6	4.5	2.0	124.5	完形	摩耗痕アリ
30-06	D9	集石土坑2	打製石斧	黒色頁岩	[6.8]	5.3		71.6	刃部欠損	
30-07		第Ⅲ層	打製石斧	灰色中粒砂岩	[7.1]	4.7	2.9	88.9	刃部欠損	
30-08		第Ⅲ層	打製石斧	褐灰色岩礫中粒砂岩	[7.7]	4.4	2.0	76.0	刃部欠損	
30-09	D9	第Ⅳ層	打製石斧	褐灰色砂質頁岩	8.4	4.4	1.4	57.3	完形	
30-10		第Ⅲ層	打製石斧	暗灰色砂質頁岩	7.9	4.7	1.4	53.4	刃部欠損	
30-11		第Ⅲ層	打製石斧	黒色珪質粘板岩	9.5	4.1	11.6	45.7	完形	摩耗痕アリ
30-12	C5	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色細粒砂岩	9.45	6.06	2.22	103.5	刃部欠損	
30-13	2区	第2層	打製石斧	暗灰色中粒砂岩	10.03	4.2	1.43	59.8	完形	摩耗痕アリ
30-14	D11	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色細粒砂岩	13.3	5.6	2.2	188.3	完形	
30-15		第Ⅲ層	打製石斧	黒色粘板岩	11.2	4.3	1.5	86.8	完形	
30-16	C5	第Ⅳ層	打製石斧	灰色中粒砂岩	11.15	5.48	1.64	102.4	完形	摩耗痕アリ
31-17	D9	流路包含層	打製石斧	暗灰色中粒砂岩	[10.62]	7.57	3.14	209.6	基部欠損	2次利用砥石
31-18		第Ⅲ層	打製石斧	黒色粘板岩	9.28	4.34	1.83	67.1	完形	
31-19	D6	第Ⅳ層	打製石斧	灰色中粒砂岩	10.9	5.1	2.0	127.9	完形	
31-20		第Ⅲ層	打製石斧	褐灰色砂質頁岩	[7.5]	6.1	1.9	121.3	刃部欠損	
31-21	D11	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色細粒砂岩	10.3	7.5	2.5	197.6	刃部欠損	
31-22	D11	第Ⅳ層	打製石斧	黒色粘板岩	13.8	3.57	2.1	78.1	完形	
31-23	D9	集石土坑2	打製石斧	黒色砂質粘板岩	11.0	5.6	1.6	73.9	完形	
31-24	D9	集石土坑2	打製石斧	暗灰色細粒砂岩	10.5	6.7	2.3	187.8	基部欠損	
31-25	D6	第Ⅳ層	打製石斧	暗灰色細粒砂岩	[9.6]	4.6	1.8	93.5	刃部欠損	
31-26		第Ⅲ層	礫器	灰色粗粒砂岩	12.18	11.48	4.48	544.2	完形	
32-01	D6	第Ⅳ層	磨製石斧	暗緑色蛇紋岩	8.0	4.2	1.4	66.7	完形	
32-02	D9	攪乱	磨製石斧	暗緑色蛇紋岩	8.9	2.4	1.4	57.1	刃部欠損	
32-03	D9	攪乱	磨製石斧	暗緑色蛇紋岩	[9.3]	4.05	1.8	94.1	刃部欠損	
32-04	C8	第Ⅳ層	磨製石斧	?	[7.7]	5.0	3.0	156.9	基部欠損	被熱？
32-05	C9	第Ⅳ層	磨製石斧	暗灰褐色蛇紋岩	[10.5]	3.85	3.05	208.7	基部欠損	
32-06	D6	第Ⅳ層	磨製石斧	暗灰色斑糲岩	[8.2]	3.9	3.0	164.3	刃部欠損	
32-07	C10	第Ⅳ層	磨製石斧	暗緑色蛇紋岩	[10.8]	3.8	2.8	162.4	刃部欠損	
32-08	D10	第Ⅳ層	磨製石斧	灰色粗粒砂岩	[11.8]	4.8	3.5	344.0	刃部欠損	
32-09		表採	小型磨製石斧	黒色粘板岩	4.72	3.07	1.03	14.1	未完成品	
33-01		第Ⅲ層	石剣有頭部	緑泥片岩	[10.9]	3.1	1.9	100.2	2と中間部欠損	被熱
33-02		第Ⅲ層	石剣	緑泥片岩	[8.5]	3.6	1.9	98.4	1と同一個体	被熱
33-03	D11	第Ⅳ層	砥石	褐灰色軽石	5.1	4.7	3.9	15.2	完形	
33-04	D7	第Ⅳ層	石錘	淡灰色中粒砂岩	5.6	4.25	1.1	39.8	完形	
33-05		第Ⅲ層	磨石	淡赤褐色花崗岩	[6.2]	8.3	4.0	273.8	1/2欠損	
33-06	D9	攪乱	石皿	灰色中粒砂岩	[9.7]	[8.2]	3.7	583.5	1/4欠損	
33-07	C10	第Ⅳ層	叩石	暗灰色岩礫粗粒砂岩	13.2	9.0	7.8	1348.2	完形	
33-08	D6	第Ⅲ層	叩石	淡褐色中粒砂岩	11.4	6.7	4.35	470.9	完形	



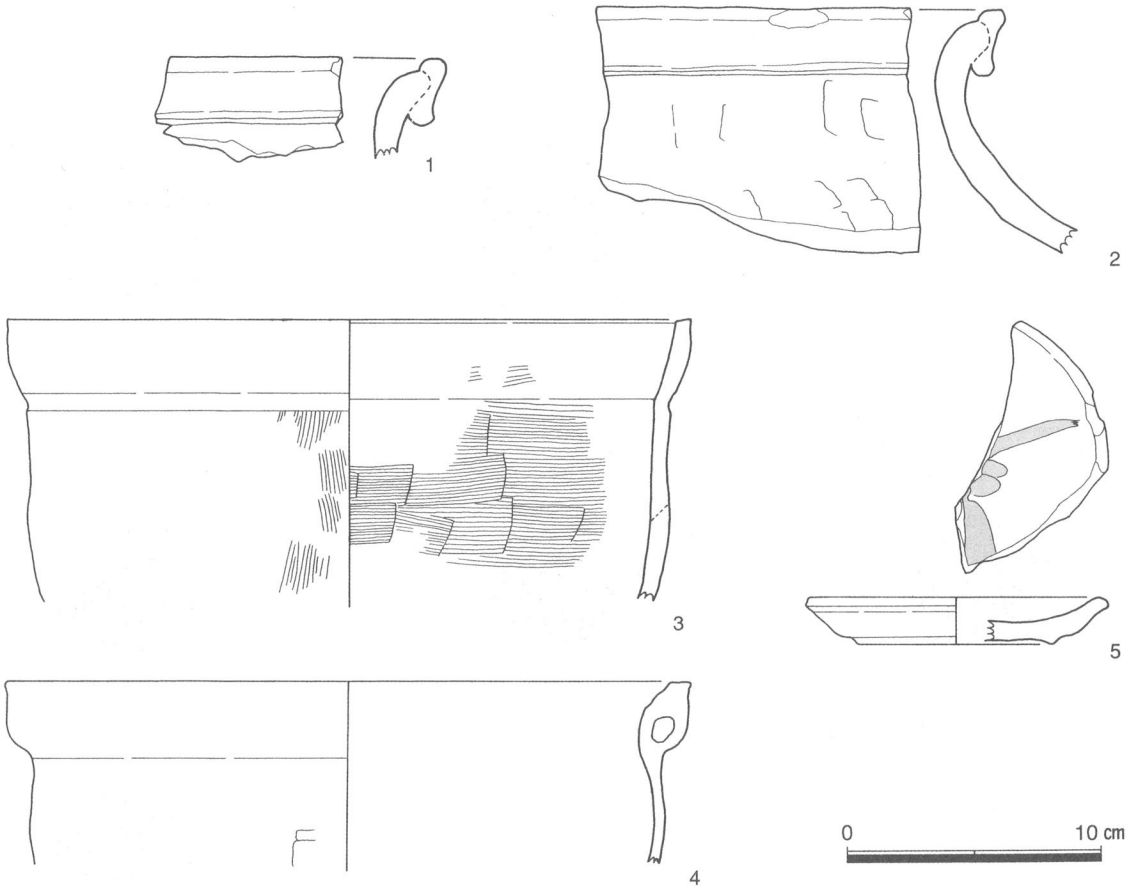
第34図　古墳時代前期の土器

3　古墳時代の土器（第34図1～30、図版14）

1・2は口縁端部を欠損しているが、S字口縁台付き甕の口縁部である。3は体部と台部の接合部片である。4は高坏で、坏部はゆるやかに内湾する。内外面摩耗のため調整不明。5～10は高坏の脚部である。6は2箇所の穿孔が残存する。11～12は鉢である。11の体部は球胴状を呈し、口縁部は外反する。体部外面は横方向のヘラミガキが施される。内面は板ナデ。12は体部が横方向のミガキ調整で、内面はヨコハケ。13は小型の甕で体部が直線状を呈し、口縁部は外反する。体部外面はナナメハケ調整が施され、口縁部内面にヨコハケがつく。体部内面は板ナデ。14は単純口縁壺の口縁部で、端部はやや肥厚する。内外面摩耗のため調整不明。15～20は台付き甕の体部と台部の接合部片である。15は台部径10.1cmを測る。やや膨らみながら、端部は内湾する。外面の接合部には指ナデが施される。台部内



第35図　中世遺物（1）



第36図　中世遺物（2）

面は粘土紐の接合痕が明瞭で、指頭圧痕がみられる。2次焼成を受けており、赤変している。21～30は壺の底部片である。

4　中世の土器（第35図1～22・第35図1～5、図版16・17）

1は口縁部がやや外反する。体部下半に稜をもつ。口径11.6cm、器高5.2cmで、高台は潰れた貼り付け高台で籾圧痕が残る。2の体部はやや丸みを帯びながら立ち上がる。高台は粗雑な貼り付け高台で、籾圧痕が残る。断面形は低い三角形を呈する。糸切りは未調整。口径14.8cm器高3.3cmを測る。山茶碗Ⅲ-2期に比定できる。3～7は無高台の碗であり、口径12.6cm～11.8cm器高3.0cm～3.5cmで浅く扁平である。12～18は小皿であり、口径6.4cm～7cm、器高さ1.2cm～1.4cmで浅く、扁平である。底部は糸切り未調整である。碗、小皿とも山茶碗Ⅲ-3期に比定できる。

19は白磁皿である。20・21は龍泉窯系青磁碗。I-5b類の鎬連弁文である。20は太い鎬連弁文で、21は細い鎬連弁文である。釉薬は青緑色を呈する。

22は片口鉢の底部破片で、高台は貼り付け高台である。端部は欠損しているが尖り気味のようである。体部下方は回転ヘラ削り調整が施される。底部内面は摩耗が激しく表面が剥落している。

第36図-1・2は同一個体で、6型式の常滑産の甕である。頸部は外反し、口縁部の折り返し部が幅広で、垂下した下端が頸部と接着し、縁帯は2.4cmを測る。

第36図-3は、内耳鍋で、半球状の体部にわずかに外側に屈曲させた口縁部がつく。体部の湾曲は弱く、直線状に近い形態を呈する。口縁部と体部の接続部は強いナデ調整が施され、屈曲部が明瞭である。口縁端部の断面は方形で、やや内斜する。体部外面は厚いススが付着するが、タテハケ調整が施される。体部内面はヨコハケ調整で、口縁部内面はハケ調整のあとナデ調整が施される。第36図-4は内耳鍋で、半球状の体部にわずかに外側に屈曲させた口縁部がつく。体部の湾曲は弱く、直線状に近い形態を呈する。ススは付着せず、未使用と思われる。口縁部端部の断面は方形を呈するが若干凹む。

口縁部内側に耳がつけられる。内耳は3cm前後の粘土を張り付け、両端から孔を貫通させている。そのため、外面はやや膨らむ。第36図-5は志野皿で、内面に水草が描かれる。口縁部はやや外反し、底部は削り込み高台でトチン跡が残る。17世紀と思われる。

表15　古墳～中世土器観察表（1）

図版番号	調査区	グリット	出土遺構・層位	大項目	器種	部位	計測値(cm) 口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
34-01	1		第Ⅳ層	土師器	S字甕	口縁部1/12残存			[2.45]	10YR7/2にぶい黄橙色	白色粒子、小礫含む	良好	頸部[18.6]
34-02	1	D11	第Ⅳ層	土師器	S字甕	口縁部残存			[2.1]	10YR7/3にぶい黄橙色	白色粒子、小礫、雲母含む	良好	頸部[16.0]
34-03	1	D9	第Ⅳ層	土師器	S字甕	接合部残存			[2.2]	10YR7/3黄橙色	小礫、雲母、長石含む	良好	[5.3]
34-04	1	C9	第Ⅳ層	土師器	高坏	坏部1/2～脚上部残存			[7.5]	10YR7/3にぶい黄橙色	小礫、長石含む	良好	2.75
34-05	1		第Ⅳ層	土師器	高坏	脚上部2/3残存			[2.9]	10YR7/2にぶい黄橙色	白色粒子、小礫含む	良	
34-06	1	D9	第Ⅳ層	土師器	高坏	脚上部残存			[3.2]	5YR7/4にぶい橙色	小礫、長石含む	良	
34-07	1	C6	第Ⅳ層	土師器	高坏	脚上部1/4残存			[3.5]	7.5YR7/6橙色	小礫、長石含む	良	
34-08	1		第Ⅳ層	土師器	高坏	脚上部残存			[3.6]	10YR7/3黄橙色	小礫、長石含む	良好	2.40
34-09	1	D9	第Ⅳ層	土師器	高坏	脚上部残存			[3.6]	10YR8/4浅黄橙色	小礫含む	良	
34-10	2		表採	土師器	高坏	接合部残存			[3.9]	10YR8/3浅黄橙色	小礫含む	良好	2.90
34-11	1	D8	SD2	土師器	鉢	口縁部～胴部1/6残存	[11.5]		[7.6]	10YR6/2灰黄褐色	小礫含む	良好	胴部最大径[1 2.8]
34-12	1	C9	第Ⅳ層	土師器	鉢	口縁部1/4残存	[11.8]		[3.6]	10YR6/1褐灰色	小礫含む	良好	
34-13	1	D10	第Ⅳ層	土師器	鉢	口縁部1/4残存	[14.3]		[5.1]	5YR6/4にぶい橙色	長石、小礫含む	良好	
34-14	1	D10	第Ⅳ層	土師器	壺	口縁部1/8残存	[16.6]		[6.5]	7.5YR7/4にぶい橙色	小礫、長石含む	良	
34-15	2		表採	土師器	台付甕	台部残存		9.85	[6.65]	7.5YR7/4にぶい橙色	長石、小礫含む	良好	
34-16	1		第Ⅲ層	土師器	台付甕	台上部～接合部残存			[2.65]	10YR8/2灰白色	小礫含む	良好	4.40
34-17	1	D10	第Ⅳ層	土師器	台付甕	接合部残存			[2.75]	10YR8/4浅黄橙色	小礫含む	良好	5.15
34-18	1	C9	第Ⅳ層	土師器	台付甕	接合部残存			[2.9]	5Y6/6橙色	小礫、長石含む	良好	6.40
34-19	1	D6	第Ⅳ層	土師器	台付甕	台部1/4～接合部1/3残存			[4.75]	7.5YR7/6橙色	長石、小礫含む	良	[5.6]
34-20	1		第Ⅲ層	土師器	台付甕	接合部1/3残存			[4.1]	10YR7/2にぶい黄橙色	小礫含む	良好	[6.4]
34-21	1	C5	第Ⅳ層	土師器	甕	底部残存		5.10	[1.2]	10YR7/3にぶい黄褐色	砂粒含む	やや軟	
34-22	1	D9	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/2残存		[4.8]	[2.35]	10YR8/3浅黄橙色	小礫含む	良好	
34-23	1	D8	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/2残存		7.15	[2.15]	10YR8/3浅黄橙色	小礫、長石含む	良好	
34-24	1	D11	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/3残存		[6.4]	[2.75]	7.5YR7/4にぶい橙色	小礫、長石、雲母、透明粒子含む	良好	
34-25	1	D11	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/4残存		[7.6]	[1.9]	10YR7/3にぶい黄褐色	小礫含む	やや軟	
34-26	2		表採	土師器	甕	底部1/4残存	[8.6]		[1.95]	10YR8/4浅黄橙色	小礫、長石含む	良好	
34-27	1	C9	第Ⅳ層	土師器	甕	底部2/3残存		8.15	[2.1]	5YR6/6橙色	小礫、長石含む	やや軟	
34-28	1	D9	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/3残存		[9.6]	[2.85]	10YR8/3浅黄橙色	小礫含む	良好	
34-29	1	C5	SF225	土師器	甕	底部1/3残存		[7.7]	[2.75]	7.5YR7/6橙色	小礫含む	軟	
34-30	1	C9	第Ⅳ層	土師器	甕	底部1/3残存		[8.8]	[3.4]	7.5YR7/4にぶい橙色	小礫、長石含む	良好	
35-01	1	D11	第Ⅳ層	山茶碗	碗	全体の1/5残存	[11.6]	[5.2]	4.15	2.5Y6/1黄灰色	長石含む	良好	東遠江
35-02	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	全体の1/2残存	[14.8]	[6.2]	3.30	N5/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-03	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	全体の5/6残存	11.80	6.30	3.40	N5/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-04	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	全体の5/6残存	12.60	6.60	3.45	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-05	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	ほぼ完形	12.40	5.90	3.75	5Y6/1灰色	長石、礫含む	良好	東遠江
35-06	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	ほぼ完形	12.20	6.00	3.30	N5/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-07	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	全体の1/5残存	[11.6]	[4.6]	3.30	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-08	1	D6	第Ⅱ層	山茶碗	碗	全体の1/6残存		[7.8]	[2.8]	5Y6/1灰色	長石含む	良好	東遠江
35-09	1	D10	流路包含層	山茶碗	碗	底部9/10残存	5.60		[2.2]	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-10	1	D11	第Ⅱ層	山茶碗	碗	底部1/3残存		[6.6]	[1.8]	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-11	1	C10	流路包含層	山茶碗	碗	底部1/2残存		[6.3]	[1.4]	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-12	1	D11	第Ⅱ層	山茶碗	皿	全体の1/5残存	[7.0]	[4.8]	1.30	2.5Y6/1黄灰色	長石含む	良好	東遠江
35-13	1	D11	第Ⅱ層	山茶碗	皿	全体の1/4残存	[6.4]	[4.2]	1.20	2.5Y6/1黄灰色	長石含む	良好	東遠江
35-14	1	D10	流路包含層	山茶碗	皿	完形	7.00	4.50	1.30	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-15	1	D10	流路包含層	山茶碗	皿	ほぼ完形	7.60	3.90	1.70	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-16	1	D10	流路包含層	山茶碗	皿	完形	3.70	3.95	1.65	N6/灰色	長石含む	良好	東遠江
35-17	1	D10	流路包含層	山茶碗	皿	全体の1/2残存	[7.0]	[4.4]	1.45	5Y6/1灰色	長石含む	良好	東遠江
35-18	1	D10	流路包含層	山茶碗	皿	完形品	7.00	3.50	1.50	7.5Y6/1灰色	長石含む	良好	東遠江
35-19	1	D9	攪乱	白磁	皿	底部破片		[8.0]	[2.2]	10Y8/1灰白色	白色粒子含む	良好	
35-20	1	D10	流路包含層	青磁	碗	口縁部～体部の一部				2.5GY6/1オリーブ灰色	白色粒子含む	良好	龍泉窯Ⅰ-5b
35-21	1	D10	流路包含層	青磁	碗	口縁部～体部の一部				7.5GY6/1緑灰色	白色粒子含む	良好	龍泉窯Ⅰ-5b
35-22	1	D10	流路包含層	山茶碗	こね鉢	底部1/3残存		[13.0]	[8.0]	N7/灰白色	長石、礫含む	良好	
36-01	1	D10	流路包含層	陶器	甕	口縁部破片				(外)7.5YR2/2黒褐色	長石含む	良好	常滑6型式
36-02	1	D10	流路包含層	陶器	甕	口縁部の一部				(外)5YR5/3にぶい赤褐色	長石含む	良好	常滑6型式
36-03	1	C10	流路包含層	中世土器	内耳鍋	口縁部～体部残存	[27.0]		[11.2]	N5/灰色	白色、透明粒子含む	良好	
36-04	1	D10	流路包含層	中世土器	内耳鍋	口縁部～体部残存	[27.0]		[7.3]	10YR7/2にぶい黄橙色	砂粒、長石含む	良好	
36-05	1	D10	流路包含層	陶器	志野皿	全体の1/4残存	[11.8]	[7.8]	1.90	2.5Y8/3淡黄色	長石含む	良好	瀬戸・美濃

第Ⅳ章　まとめ

1　集落について

勝田井の口遺跡は勝間田川の中流域の標高27m程の低位の埋没段丘面に立地する。今回の調査で、1300㎡の調査を行い、勝間田川流域の数少ない縄文時代後晩期の遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は、遺物の表面採集や確認調査の結果によれば、東西60m南北50mの範囲に広がり、面積にして約3000㎡ということになろう。

遠江の縄文時代後晩期の遺跡のうち菊川町石畑遺跡、袋井市大畑遺跡、磐田市西貝塚、浜松市蜆塚遺跡など各地域の拠点的集落と考えられている。しかしながら、本遺跡の場合は遺物の広がり、遺構の規模から各地域の拠点集落とは考えにくく、小規模な集落であったと考えられる。

検出された遺構は土坑群、ピットであり、遺存状はいずれも良好ではなく平面形、規模等が明確になったものは多くはない。土坑群は、規模、構造等から墓と考えられ、低位段丘の縁辺部が墓域であったことを示している。住居跡については、炉穴、床面、住居の掘り方等は検出されておらず、ピットについては平地式住居に伴うものとして考えたが、平面形を推定するところまではできていない。おそらく住居域は、南側の段丘低位面の中央に展開していたと考えられる。

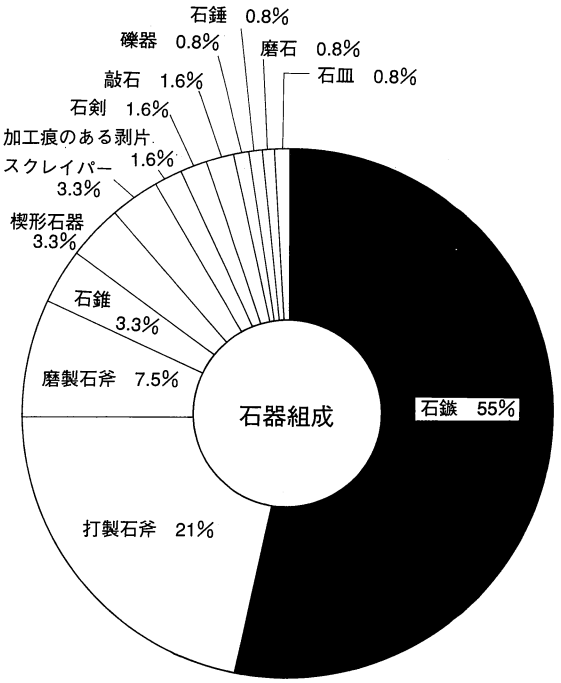
縄文時代の土器は中期の曽利式土器から晩期の樫王式土器までに及んでおり、テンバコにして5箱分が出土している。このうち主体をなすものは、後期後半から晩前半の土器の土器である。これらで出土土器の８割を占めており、当該期が本遺跡の主体的な時期であったことを示すものである。中でも寺津下層式土器あるいは伊川津式土器に類似するいわば東海系の土器が多く、安行系土器、清水天王山式土器、亀ヶ岡系の土器をわずかながら含む状況である。

2　石器ついて

(1) 石器組成

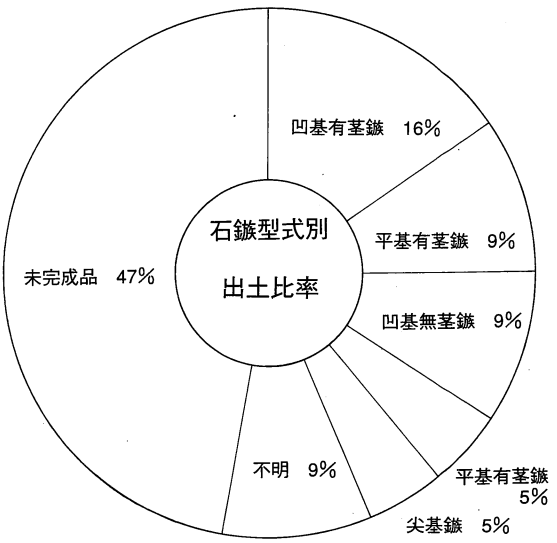
石器は器種認定が可能な石器として124点の石器が確認できた。出土数は、あくまでも限られた調査区内で検出された数であり、実際に使用された石器の数がそのまま反映したものではないが、調査をした遺跡の性格に影響を与えていると考えられるた

表16　石器組成



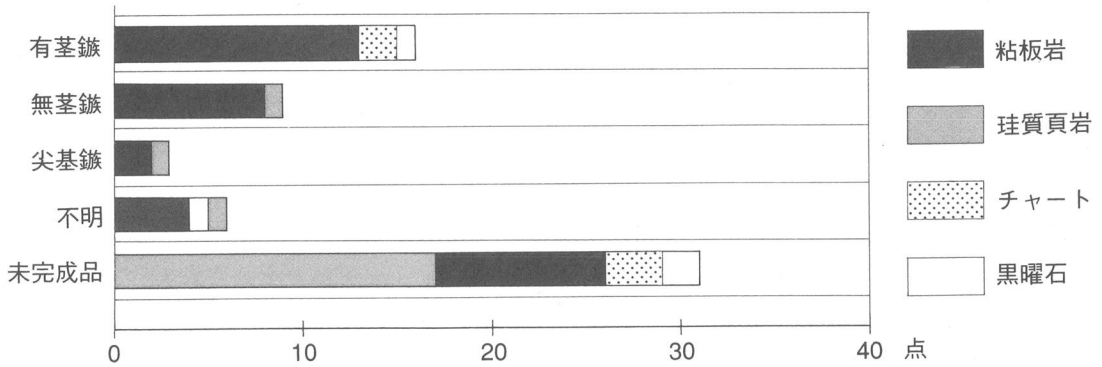
%

表17　石鏃型式別出土比率



%

表18　石鏃の石材比率



め、簡単ではあるが石器組成にふれてみたい。全体の組成として石鏃（未完成品も含む）65点（55％）、打製石斧25点（21％）、磨製石斧9点（7.5％）、楔形石器4点（3.3％）、石錐4点（3.3％）、敲石2点（1.6％）、石剣2点（1.6％）、石皿1点（0.8％）、磨石1点（0.8％）、石錘1点（0.8％）である。半数以上が石鏃で占められ、石鏃の未完成品と思われるもの、剥片類、原石も出土している。

今回の調査で出土した石鏃は65点で完成品31点、未完成品31点、その他3点である。完成品の中で有茎石鏃16点、無茎石鏃9点で、分類可能なもののうち、52％が有茎鏃である。有茎、無茎ともに凹基、凸基、平基のものがみられ、有茎平基、有茎凹基、有茎凸基、無茎平基、無茎凹基、無茎凸基がある。各時期の特徴を抽出することはできなかったが、有茎鏃は後期の中葉以降に流入してくるといわれている。その中で、所謂飛行機鏃と称する石鏃が3点出土している。分布は、東海・中部地方を分布の中心とし、関東、北陸の一部に限定されている。鈴木道之助氏は、飛行機鏃の発生を近畿地方にみられる五角形の無茎鏃と東北地方の有茎鏃が融合したものとし、晩期の標式的な石器のひとつとしている。

長野県の縄文時代晩期の石器組成について検討した和田博秋氏は、石鏃と打製石斧の比較から、多量に石鏃が出土する東日本的様相と多量の打製石斧が出土する西日本的な様相があるといわれている。以上の観点から、勝田井の口遺跡の石器組成をみると、多量な石鏃が存在する東日本的な様相を示しているといえるであろう。

(2) 石材比率

主要な石器石材の比率をみてみると、石鏃、石錐などの小型の石器は主に粘板岩、頁岩を用いている。少量ではあるがチャートや黒曜石も認められる。打製石斧は砂岩、粘板岩、頁岩を用い、磨製石斧は蛇紋岩を用いている。これらは、瀬戸川群に属し、島田市北部の千葉山周辺で採取が可能な石材という。また、河原礫ではないため、直接、千葉山周辺で採取した可能性があるという。一方、他地方からの石材は、石剣2点が緑泥片岩、磨石1点が花崗岩でともに天竜川水系のものである。黒曜石は大部分が霧ヶ峰産である。また、破片ではあるが下呂石が１点出土している。このように石器石材は、大部分が地元産に依存している状況である。周辺の縄文時代中期の遺跡からの石器石材をみても石鏃などの小型の石器は頁岩が主体を占め、黒曜石は少量である状況で、中期から後期にかけて石器の石材比率は大きくは変わらないと思われる。

また、第18表の石鏃の完成品と未完成品の石材比率をみてみると、完成品には粘板岩製、未完成品には珪質頁岩製が圧倒的に多く示している。つまり、これは石材差によるもので珪質頁岩製の石鏃は粘板岩製よりもが製作時により壊れやすく、失敗品として途中で破棄されたものと考えらる。県内で、縄文時代晩期の遺跡で石器製作を示すものとして伊東市井戸川遺跡があげられる。住居間の間隙に黒曜石の剥片、原石などを集めた土坑やくぼ地に剥片などが多量に廃棄された状態で検出されている。

今回の調査では明確に遺構として石鏃製作址として捉えられなかったが、原石、剥片、石鏃の量的

出土からおそらく石鏃を製作していたと考えられるだろう。

(3) 石鏃製作工程

石鏃として分類できないものの中に、押圧剥離によるあらい整形、中央部にこぶ状突起をもつものがみられ、これらの大部分が石鏃の未完成品だと思われる。本遺跡の石鏃の素材には、縦長の剥片や三角形状の剥片の2種類が利用されており、そこで今回、1つの石鏃製作の過程を大まかに設定してみた。(第37図)

1三角形状の素材剥片をとる。石鏃の粗形になるものである。

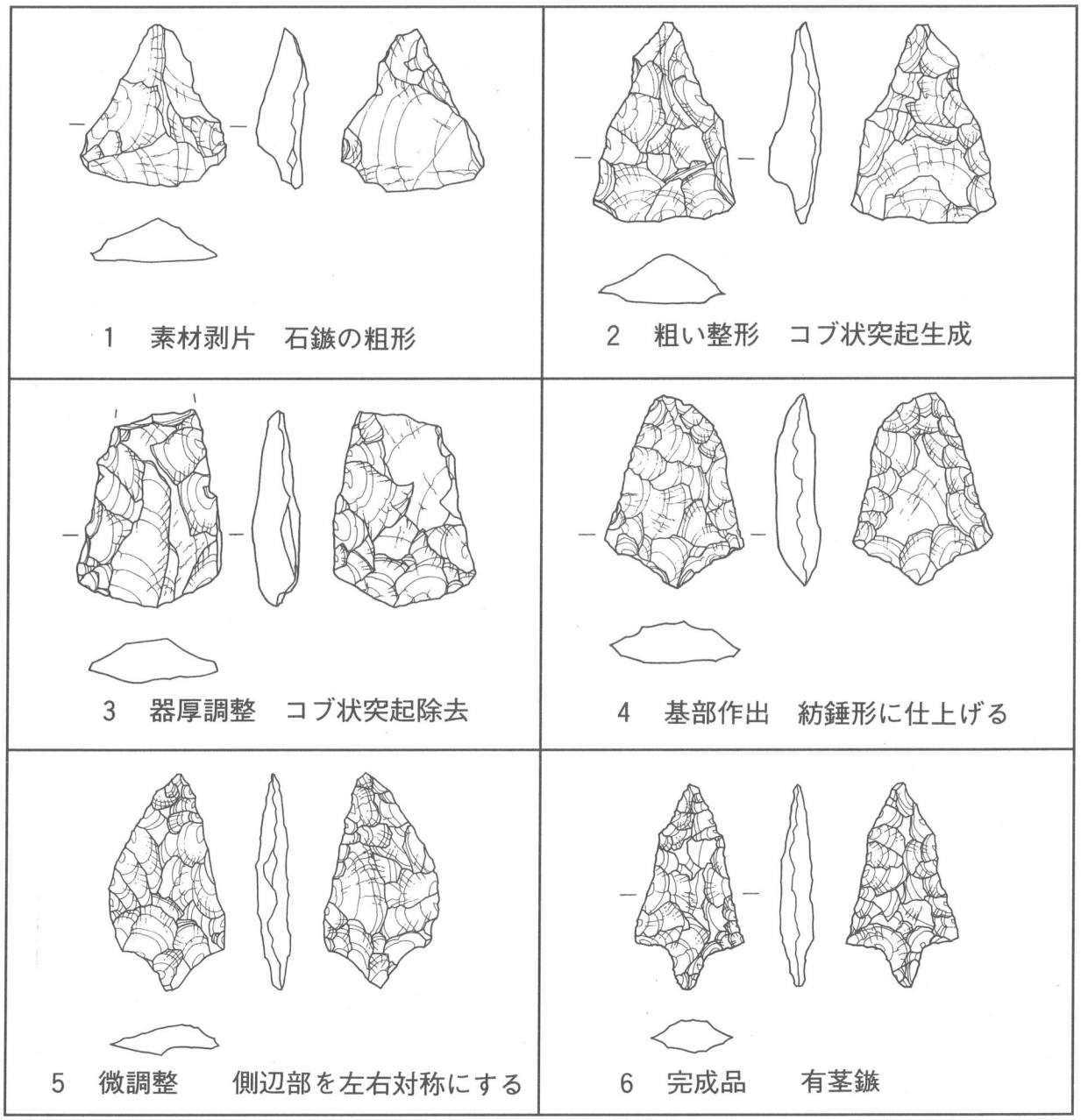
2石鏃の形を表すよう粗い調整を施す。この時中央部にコブ状突起が生成される。

3中央部に生成されたコブ状突起を除去することで器厚調整を行う。

4基部を作出することで全体の形を紡錘形に仕上げる。

5最後に、側縁部を左右対称に揃えるように細かい剥離調整を加える。

6完成品　有茎鏃



第37図　石鏃製作工程模式図

今回の調査で、一部ではあるが縄文時代後期末～晩期前半の墓域を確認することができた。土器は、東海地方の影響を受けた土器が主体を占めるが、きわめて在地色の強い土器群であるといえる。石器は大半が地元産出の石材を使用している。他地方から搬入された土器、他地方の石材の流入も弱いことから、集落としては、経済基盤の弱い小規模なものであったと考えられる。

縄文時代晩期になると、有茎鏃の量的増大、大形化するといわれている。県内において、富士川町浅間林遺跡、雄踏町長者平遺跡、本川根町大島遺跡で多量の石鏃の存在が知られている。特に本遺跡と雄踏町長者平遺跡の検出された土坑、土器、石器組成など共通する点が多い。また、石鏃の完成品、未完成品、剥片が出土しており、石鏃を製作していたと考えられる。墓域で石器製作をしていたかは、時期差などを含めて明確にできなかったが、埋葬行為終了後に空隙地あるいはゴミ捨て場で石鏃製作をおこなっていると思われる。

参考文献

長野県教育委員会　1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告-飯島町-その３-』
長野県教育委員会　1980『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告-岡谷市-その４-』
長野県教育委員会　1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告-茅野市-その５-』
埼玉県教育委員会　1974『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財報告　第5集
南知多町教育委員会　1963『林ノ峰貝塚』
渥美町教育委員会　1972『伊川津貝塚』
渥美町教育委員会　1988『伊川津遺跡』
浜松市教育委員会　1957『蜆塚遺跡　その1次発掘調査』
浜松市教育委員会　1958『蜆塚遺跡　その2次発掘調査』
浜松市教育委員会　1960『蜆塚遺跡　その3次発掘調査』
浜松市教育委員会　1962『蜆塚遺跡　その第4次発掘調査』
浜松市教育委員会　1962『蜆塚遺跡　総括編』
（財）浜松市文化協会　1995『川山遺跡Ⅱ』
袋井市教育委員会　1981『袋井市大畑遺跡1951・1977・1978・1980年の発掘調査』
菊川町教育委員会　1983『石畑遺跡　発掘調査概要』
菊川町教育委員会　1984『石畑遺跡　発掘調査報告』
磐田市教育委員会　1964『西貝塚』
磐田市教育委員会　1974『遠江見性寺貝塚の研究』
本川根町教育委員会　1994『下開土遺跡』　町道奥泉中央線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
本川根町教育委員会　1996『下開土遺跡』　町道奥泉中央線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
本川根町教育委員会　1985『千頭山王遺跡』　昭和59年度確認調査報告
本川根町教育委員会　1993『大島遺跡の話　平成5年夏の調査の記録』
中川根町教育委員会　1977『上長尾遺跡Ⅰ　昭和51年度発掘調査概報』
中川根町教育委員会　1978『上長尾遺跡Ⅱ　昭和52年度発掘調査概報』
雄踏町教育委員会　1978『長者平遺跡・鹿小路遺跡発掘調査報告』

静岡市教育委員会　　1990『蛭田遺跡　本編』
島田市教育委員会　　1980『波田1号墳・馬平遺跡』
伊東市教育委員会・加藤学園考古学研究所1983『伊豆井戸川遺跡』
御殿場市教育委員会　1978『関屋塚遺跡』
向坂鋼二1968「東海地方縄文後期末葉の時期」『遠江考古学研究１』
久永春男1968「縄文後期文化・中部地方」『新版考古学講座3』
清水市郷土研究会1960『清水天王山遺跡第1次～第３次報告』
清水市郷土研究会1975『清水天王山遺跡第4次報告略報』
藤枝東高等学校郷土研究部1950『釧』第5号
藤枝東高等学校郷土研究部1953『釧』第6号
藤枝東高等学校郷土研究部1959『釧』第9号
島田高等学校郷土研究部1953『大井川流域の文化Ⅰ』
島田高等学校郷土研究部1956『大井川流域の文化Ⅲ』
増子康真　1979　「東三河における縄文後期末・晩期文化の再検討」（１）『古代人35』名古屋考古学会
増子康真　1988　「東海地方の凹線文土器群再考」『古代人50号』名古屋考古学会
丹羽祐一　1989　「凹線文系土器様式」『縄文土器大観４』
奈良康史1986「清水天王山式土器の基礎的研究」『山梨考古論集Ⅰ』
奈良康史1989「清水天王山式土器形成期の様相」『山梨考古論集Ⅱ』
鈴木道之助1974「縄文時代晩期における石鏃小考-所謂飛行機鏃と晩期石鏃について-」『古代文化26』
町田勝則　1986「縄文時代晩期有茎鏃に関する一試論-製作技術の解明から-」『土曜考古　第11号』
戸田哲也　1980「清水天王山土器と縄文晩期土器の形成」『丘陵8号』
紅村　弘　1984『東海の先史遺跡　総括編　復刻版』
紅村　弘　1979『東海の先史文化の諸段階　資料編Ⅱ』

付編　中世　ＳＦ－1出土の有機質遺物について

1　はじめに

勝田井の口遺跡では中世のＳＦ－1より土師器皿、鉄釘、六道銭等が出土し、16世紀代の土坑墓と考えられている。土坑底面部より六道銭が出土し、その周りを囲うかのように有機質遺物が出土した。

そこで、清水整理事務所にてその有機質遺物の保存処理及び構造調査を実施したので報告する。事務所に持ち込まれた遺物は乾燥状態であった。保存処理では、エチルアルコールと筆を用い、表面に付着する土砂を除去したのち、アクリル樹脂（パラロイドＢ72）5％キシレン溶剤を塗布する強化処置を実施した。また、構造調査は複数の部位から異なる小片を採取し、断面プレパラート標本5点を作成し、生物顕微鏡及び実体顕微鏡で検鏡することで行った。

2　試料について

遺物の表面は漆塗膜のようなもので覆われ、艶がわずかに遺存している。塗膜の剥がれた部位から細かな繊維状組織が平行に密集している状態が観察される。

3　繊維状組織について

繊維状組織の表面は比較的なめらかであり、配列および形状は直線的であり、波打つような曲線的なところはない。長さは本末が確認できないために特定できない。断面の形状は楕円及び矩形で角丸方形が多数を占める。太さは長辺40μｍ短辺30μｍである。繊維状組織の層厚は30～50μｍである。材質は獣毛あるいは木材と考えられる。

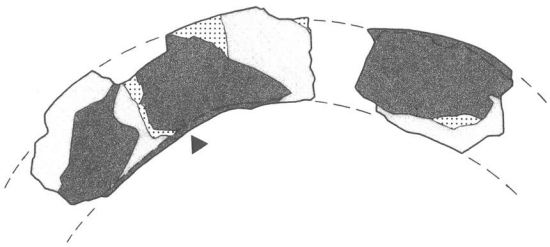
4　漆について

塗膜は漆と思われる。塗膜層中には微細な黒色物質（スス）を均一に含む暗褐色層である。ススの大きさは1～2μｍであり、大きなもので5～10μｍである。また、塗膜層は平均して2～3層であるが、何層も同種の漆を重ね塗りしたものと考えられる。層厚は、平均しておよそ70～100μｍ前後である。その他肉眼で観察した際に、黒漆表面に茶系色で筆跡のようなものがみられたが、その部分について断面プレパラートを作成したところススを含んだ黄褐色層が部分的にみられた。

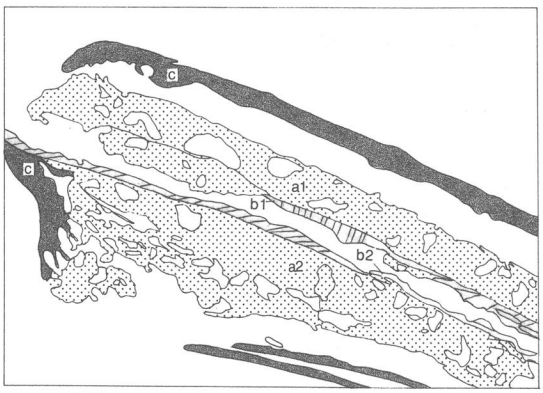
5　まとめ

今回出土した有機質遺物の平面形は断片的であるが幅1.3cmで、緩やかな曲線を描くものであり、全体の形状はドーナツ形を呈するものと考えられる。遺物の断面構造は、繊維状組織を獣毛と仮定した場合獣毛を付けたままの皮革を内側に折り込む形態をもち、獣毛の反対側の皮革表面に漆を塗布した構造となる。

用途については明確にできなかったが、六道銭の周囲から出土した状況を考えれば、獣毛を伴う革袋状のものと考えておきたい。



第38図　有機質遺物実測図



a1 a2 膠着剤部　b1 b2 繊維状組織の縦断面 c 漆層

第39図　漆膜断面構造模式図

現地調査及び本書の作成にあたって榛原町教育委員会の方々に多くのご協力を頂いた。次の方々から有益なご指導、ご助言、ご協力を賜った。（敬称略）

岡田文男　柴田稔　富樫孝志　守屋豊人　増田功聿

現地調査および整理作業の参加者は次の通りである。

発掘作業参加者
浅原一正　池田卓市　伊藤房次　佐々木福蔵　佐野安夫　佐野孝子　高橋光代　永田育久　永田美津江
浜崎好江　原崎末次　廣田良房　依田昌一　松原立次　前島康正　持塚　真　柳川忠氏　渡辺美代子
三輪幸子　八木良子　山崎朝三　村田浩子　八木恵子

整理作業参加者
海野ひとみ　河西淑乃　鈴木由美子　笠井昌枝　加藤百合子
杉山すず代（写真室）
伊藤純子（保存処理室）

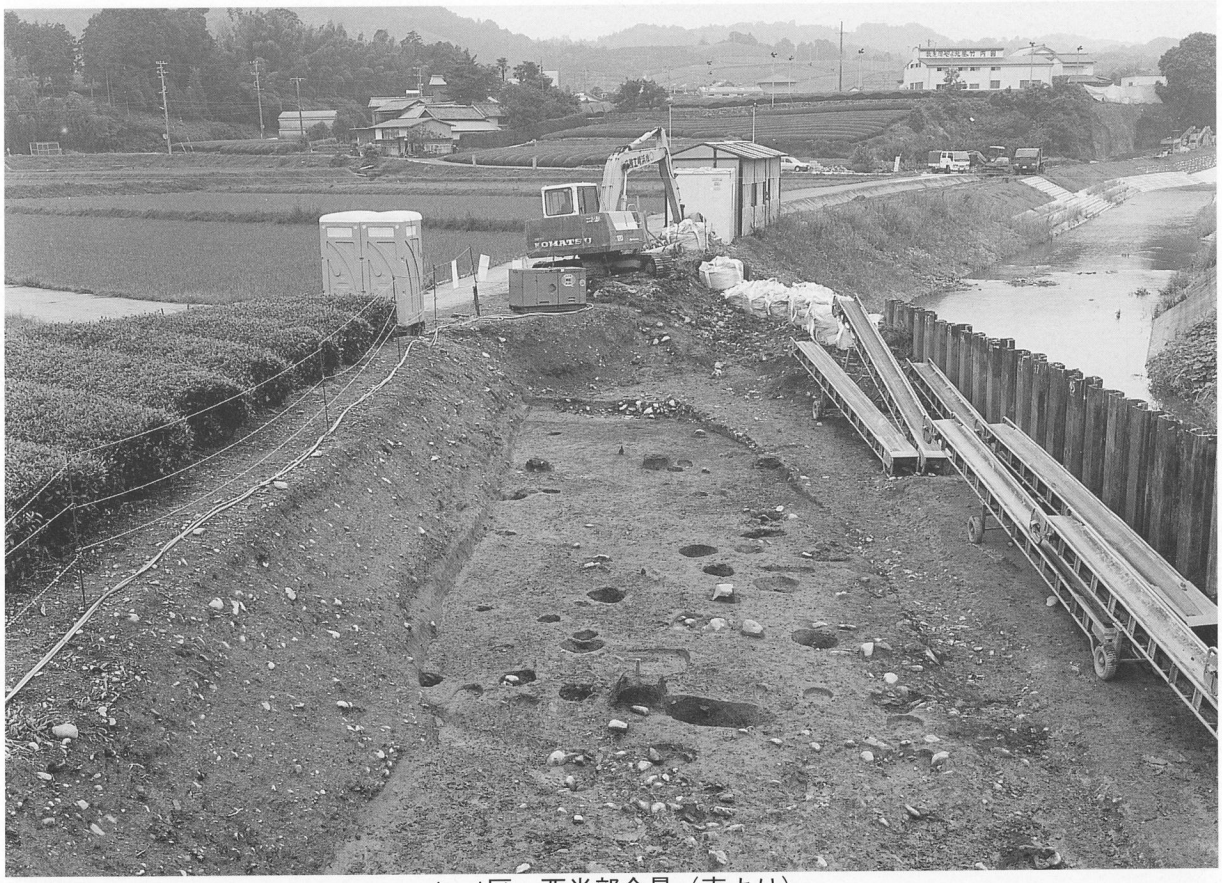
写真　図版

1　遺跡遠景（南西より）

2　1・2区　調査区全景（西より）

図版2

1　1区　全景（南西より）

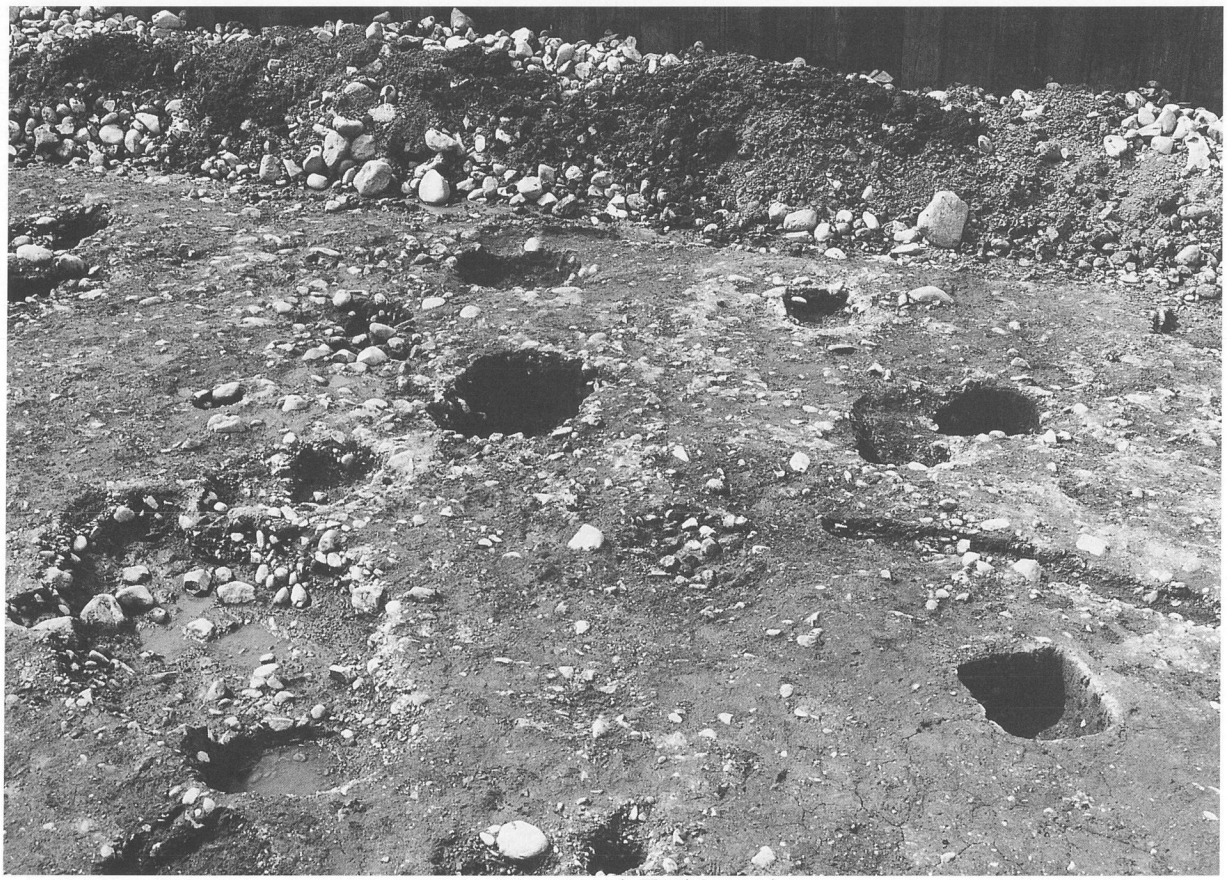


1　1区　西半部全景（東より）

2　1区　東半部全景（西より）

図版4

1　1区　集石土坑2（北より）

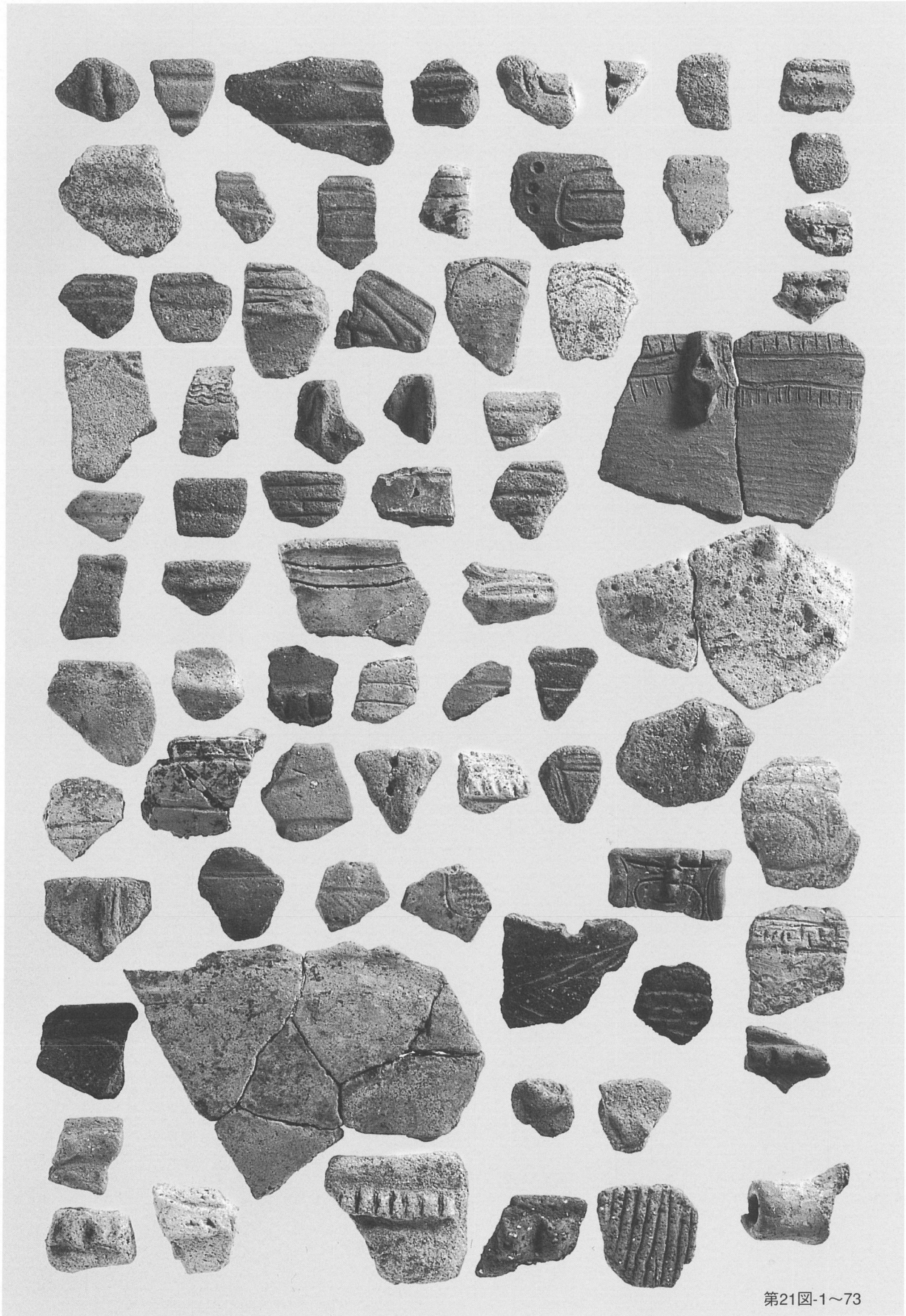


2　1区　SH-1全景（南より）

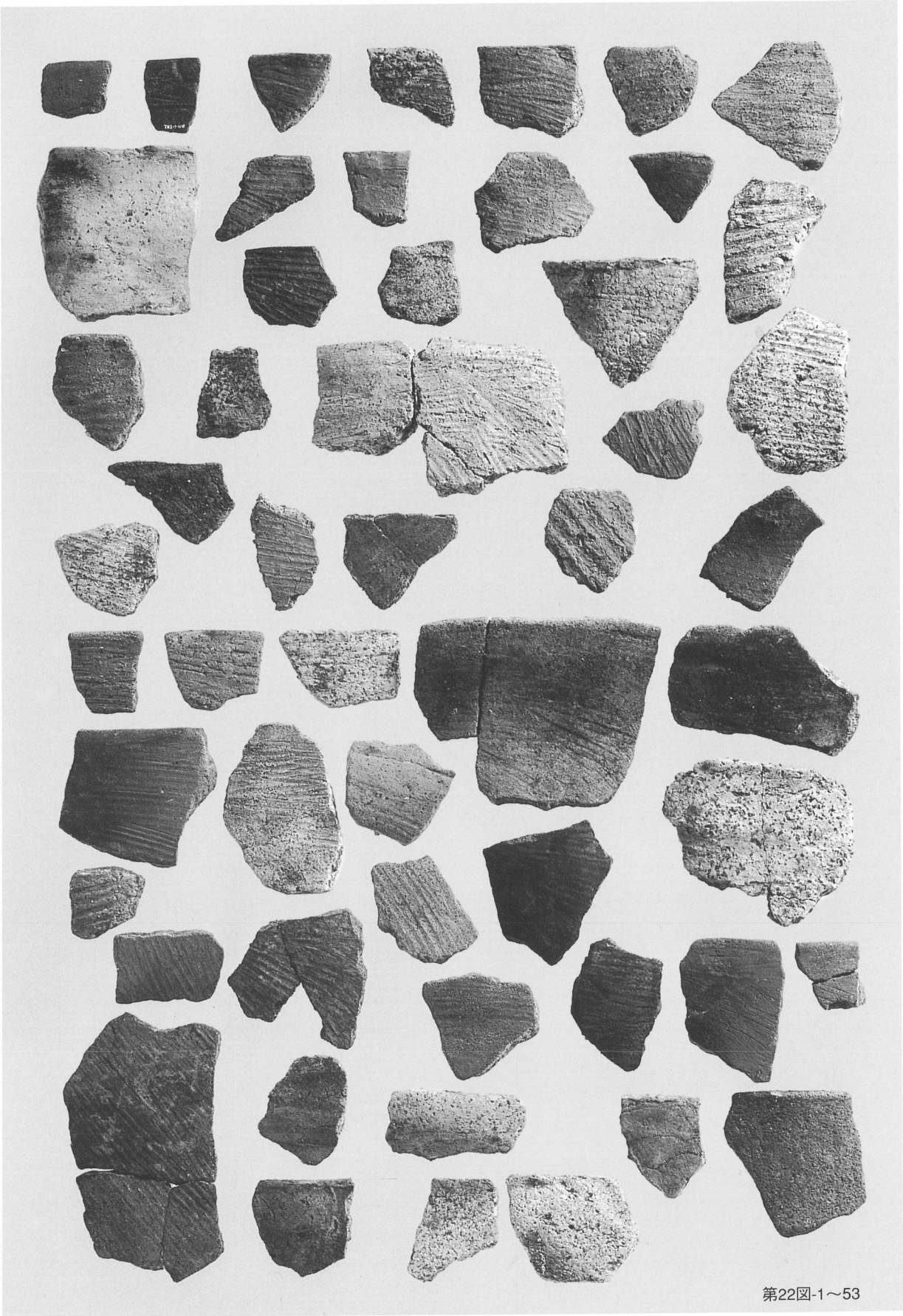
1　1区　SD-1・2　全景（南東より）

2　1区　中世　SF-1完掘状況（北より）

図版6

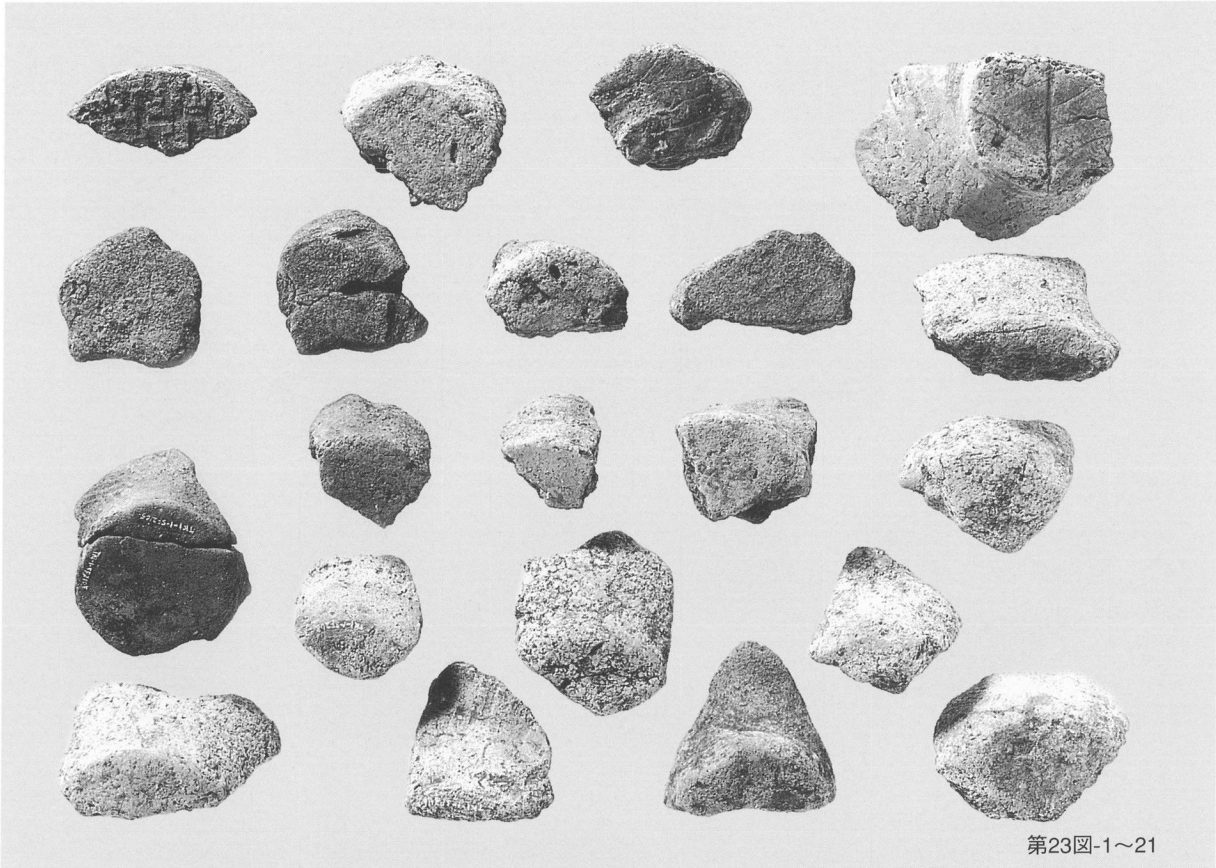


縄文土器（1）

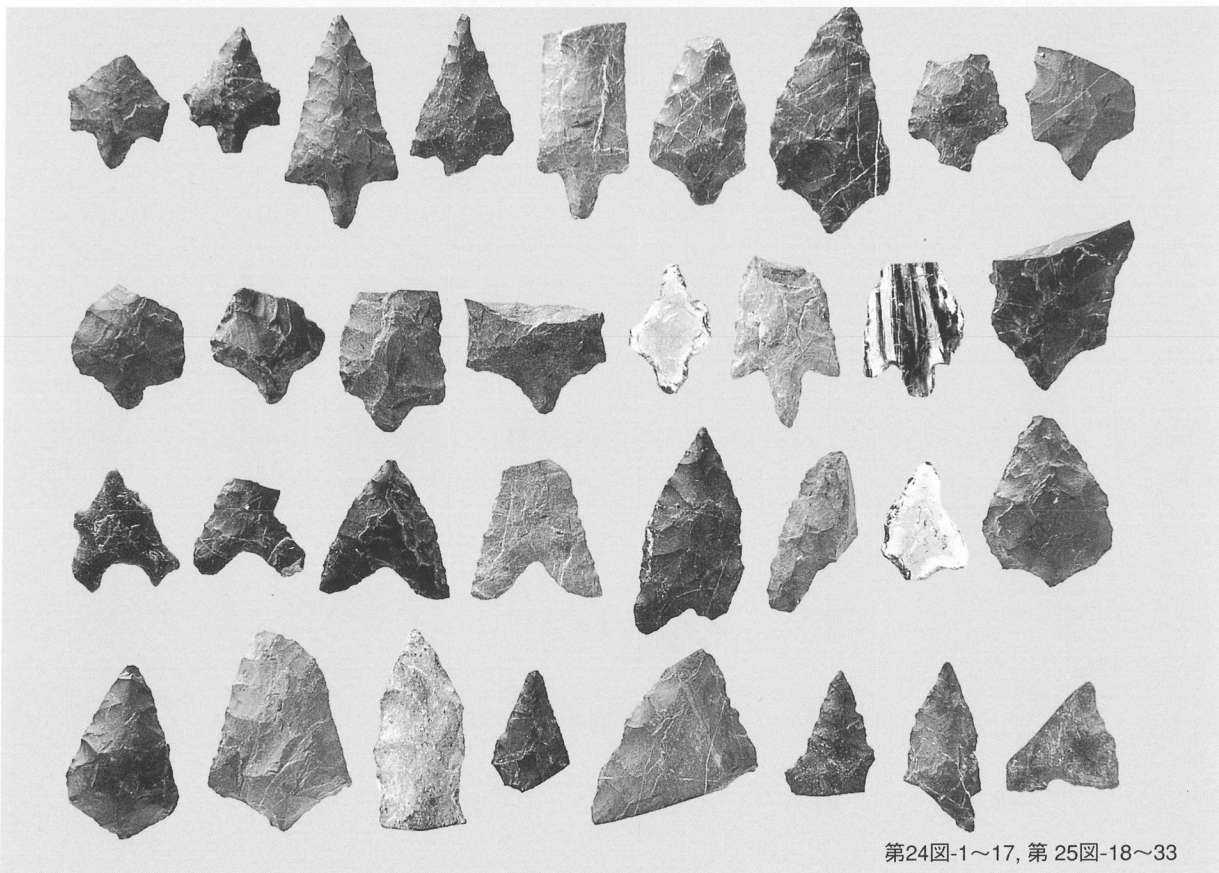


縄文土器（2）

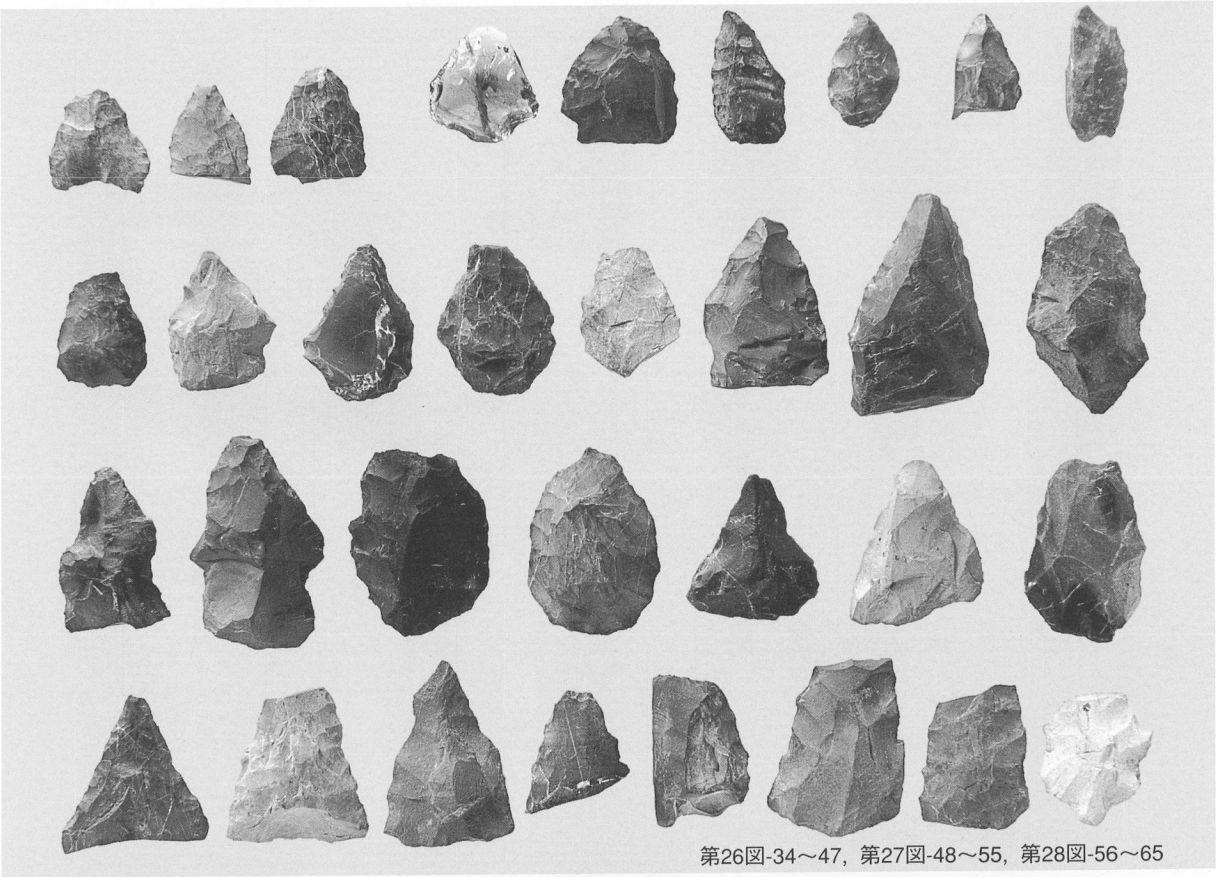
図版8



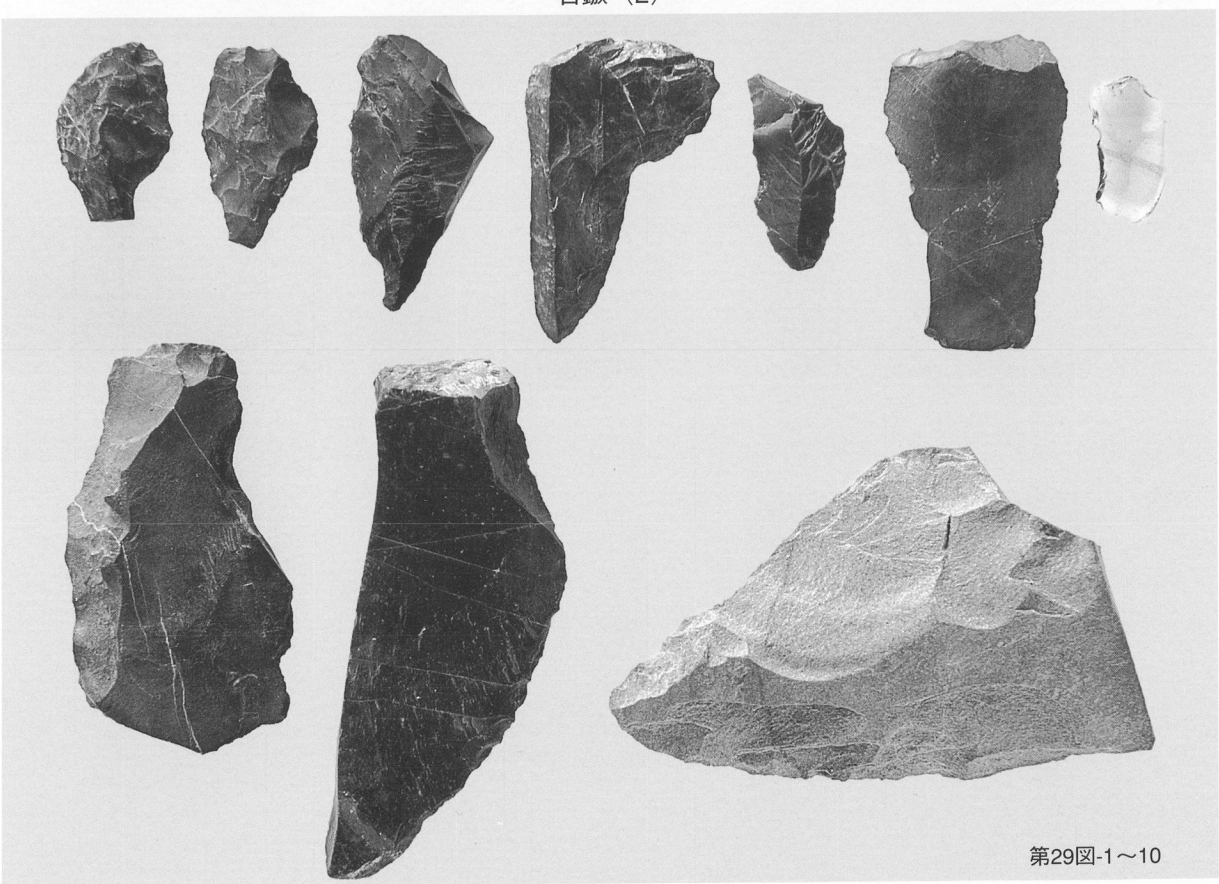
縄文土器（3）



石鏃（1）

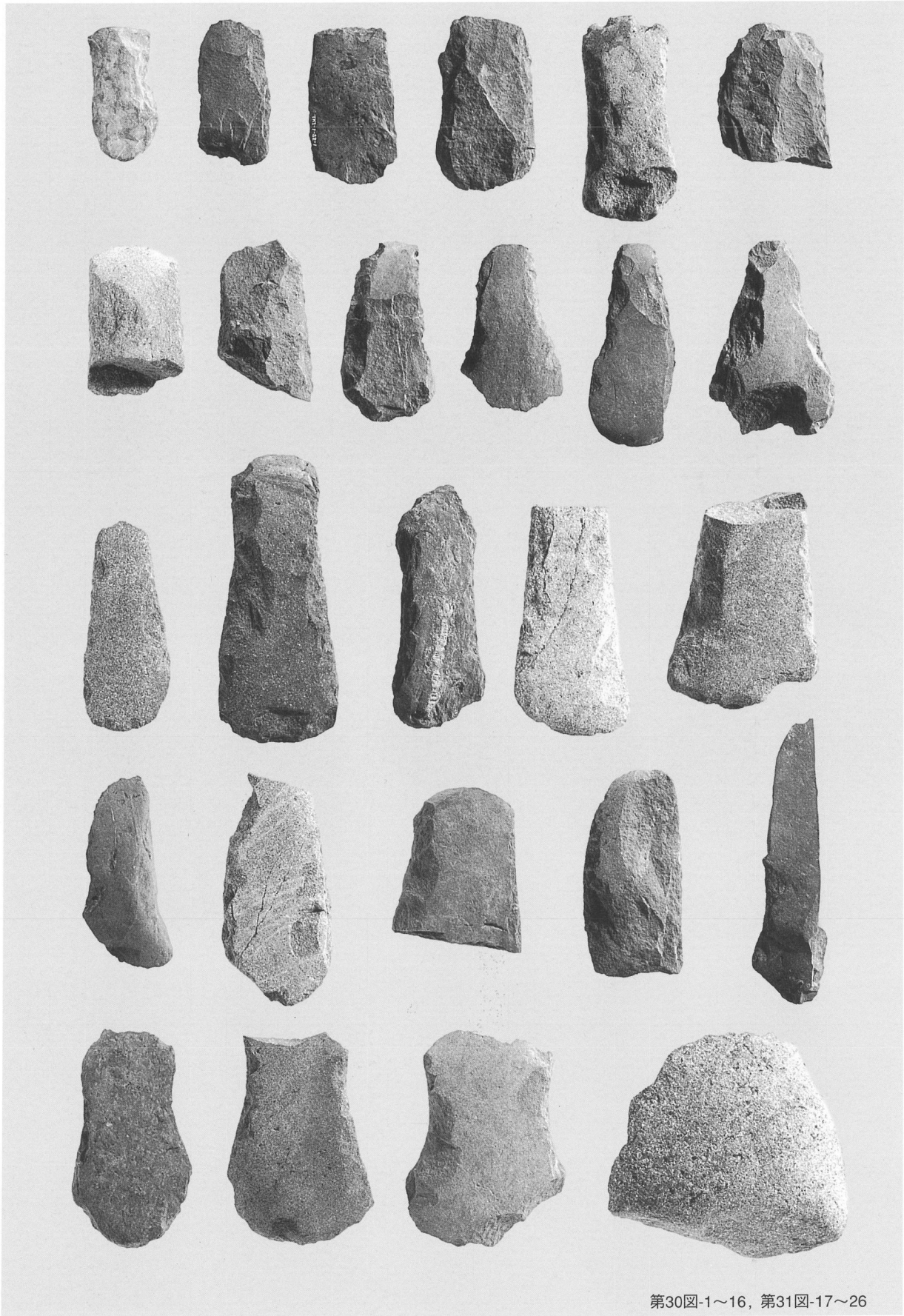


石鏃（2）



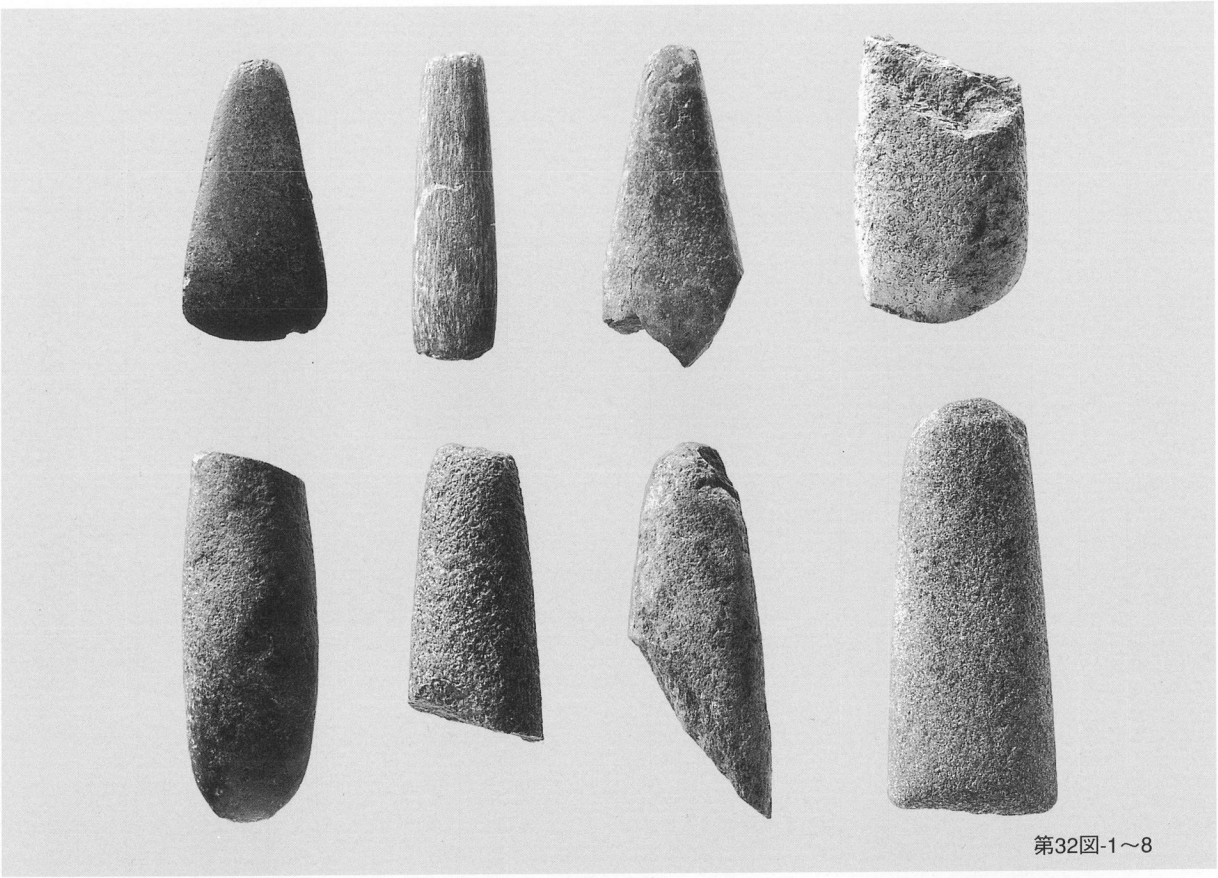
石錐・使用痕のある剥片・スクレイパー

図版10



第30図-1～16，第31図-17～26

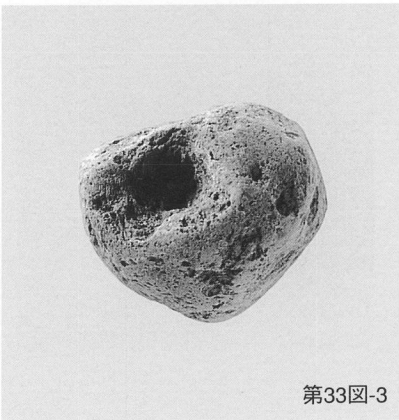
打製石斧



第32図-1～8

磨製石斧

第32図-9



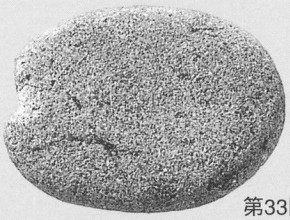
第33図-3

第33図-1. 2

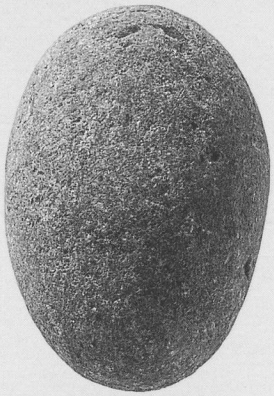
小型磨製石斧　石剣　軽石

図版12

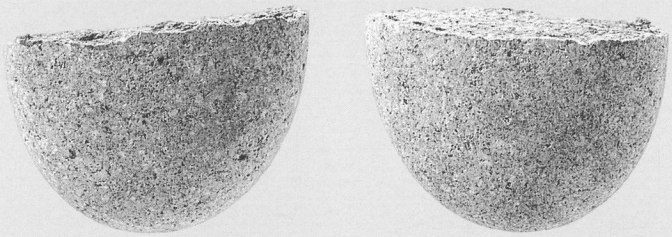
第33図-4～8



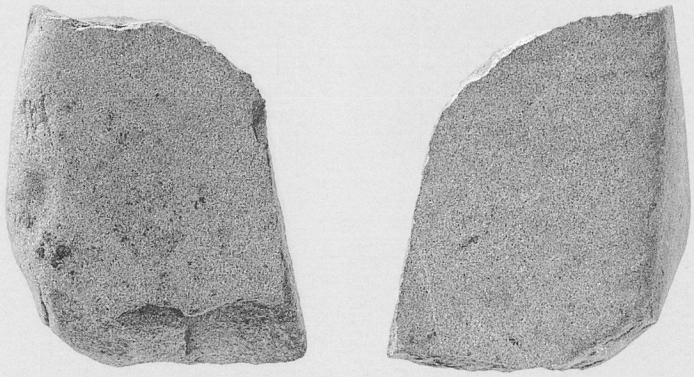
第33図-4



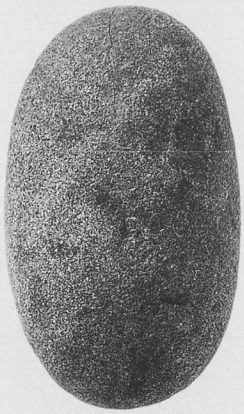
第33図-7



第33図-5

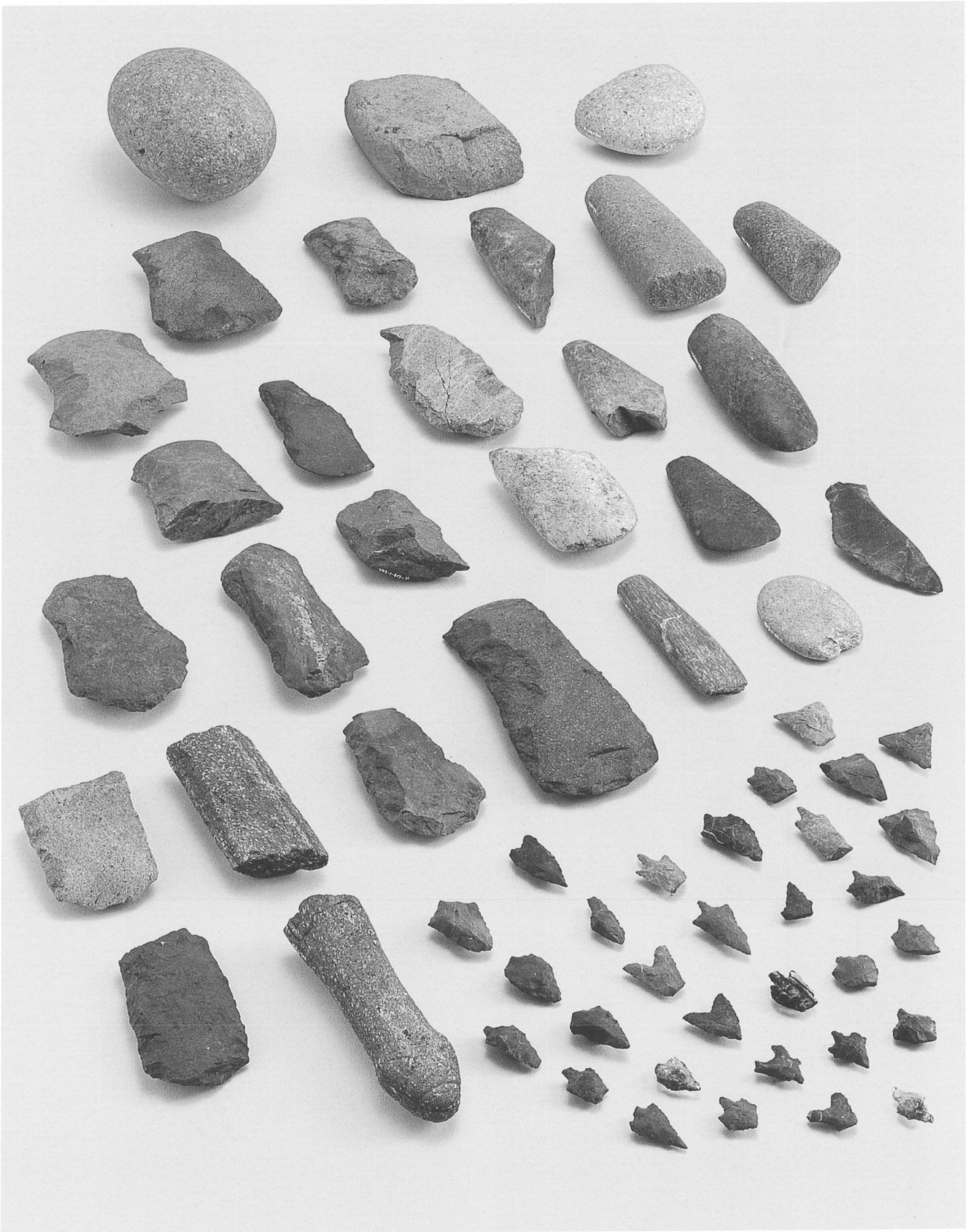


第33図-6



第33図-8

石錘　磨石　石皿　敲石



石器集合写真

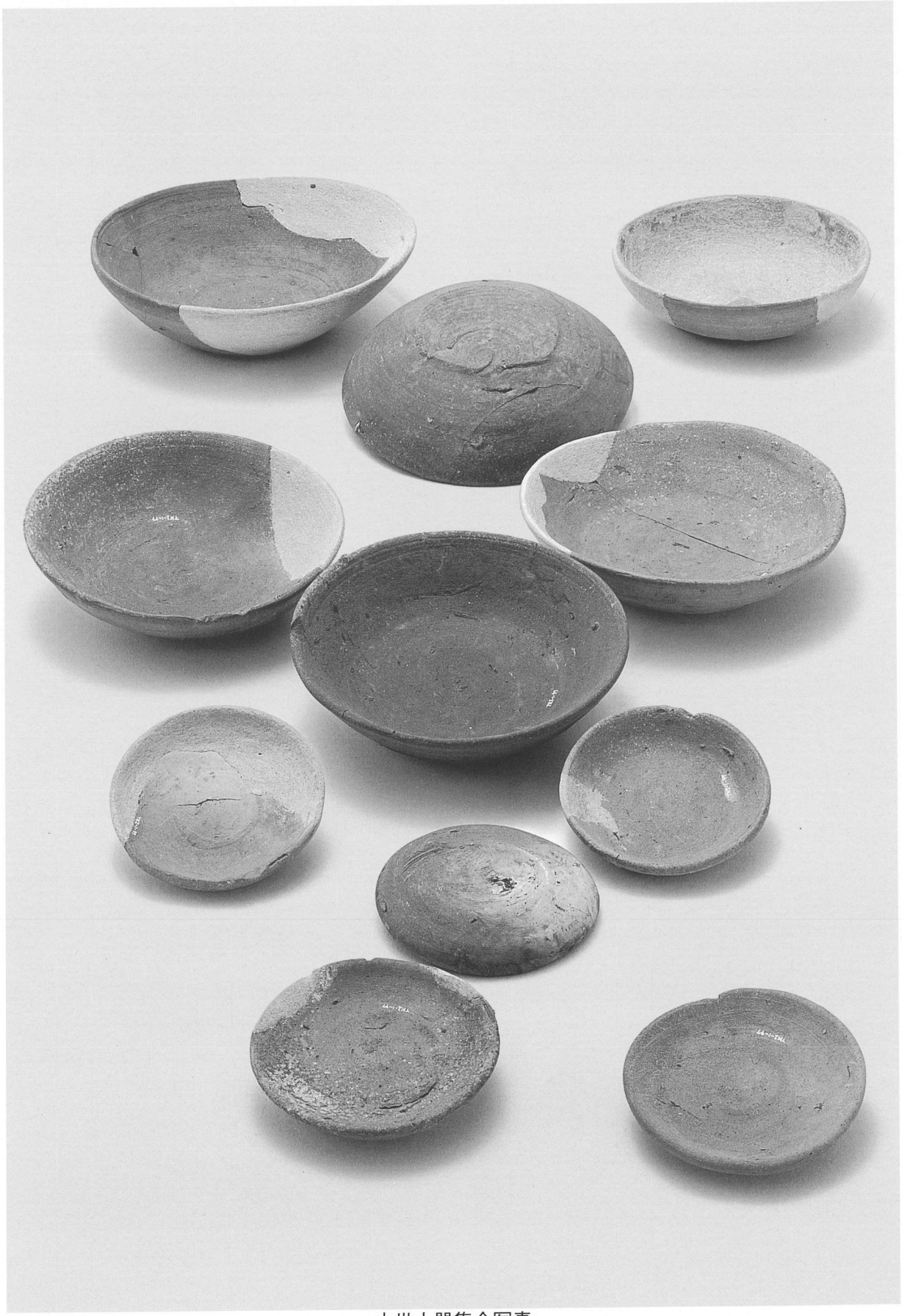
図版14

第34図-1～3, 5～14, 16～30

第34図-4

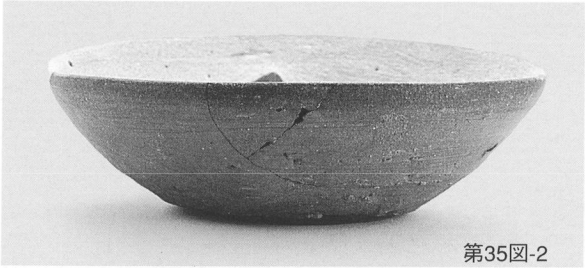
第34図-15

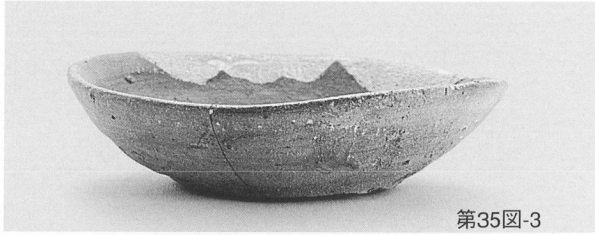
古墳時代前期の土器



中世土器集合写真

図版16


第35図-2


第35図-3

第35図-4

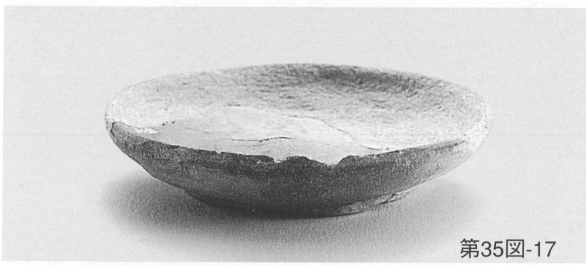
第35図-5

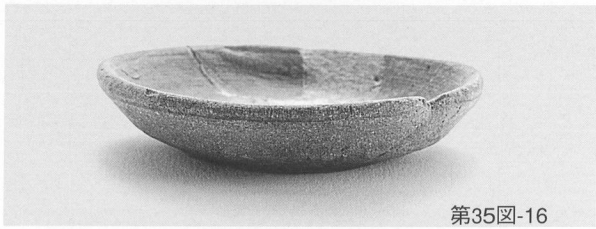
第35図-6

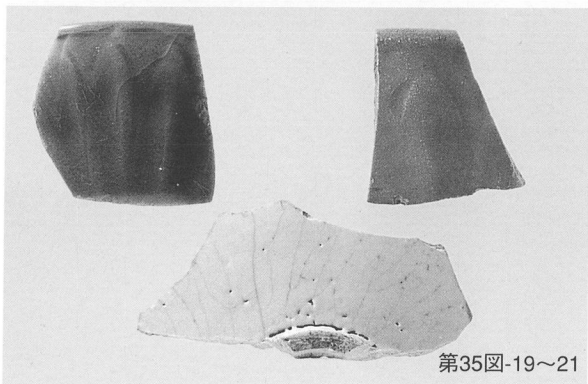
第35図-7

第35図-15

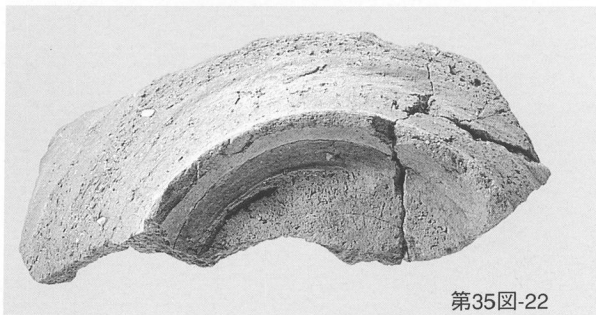
第35図-14


第35図-17

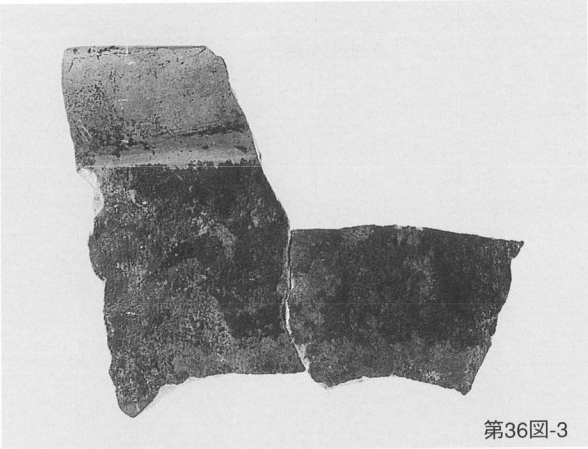

第35図-16

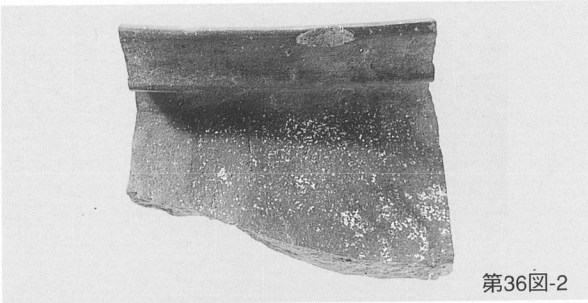

第35図-19～21

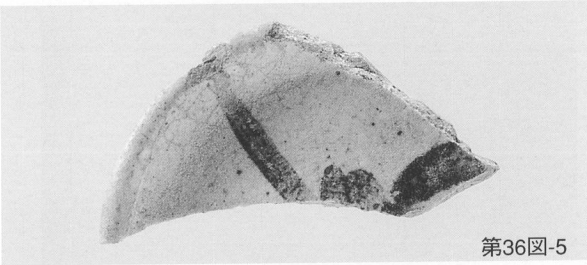
第35図-18

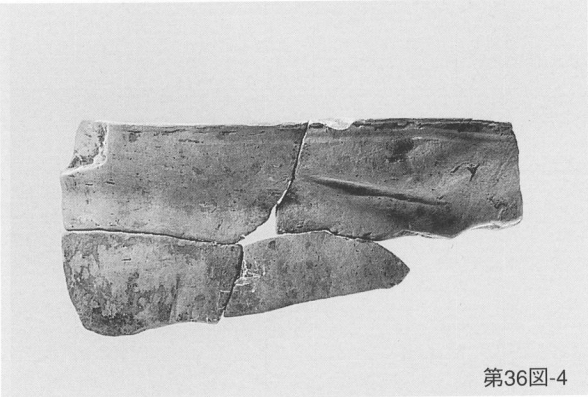

第35図-22

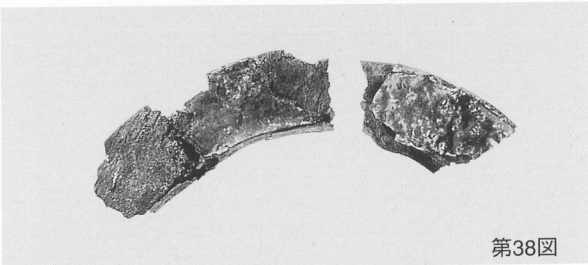
山茶碗・白磁・青磁

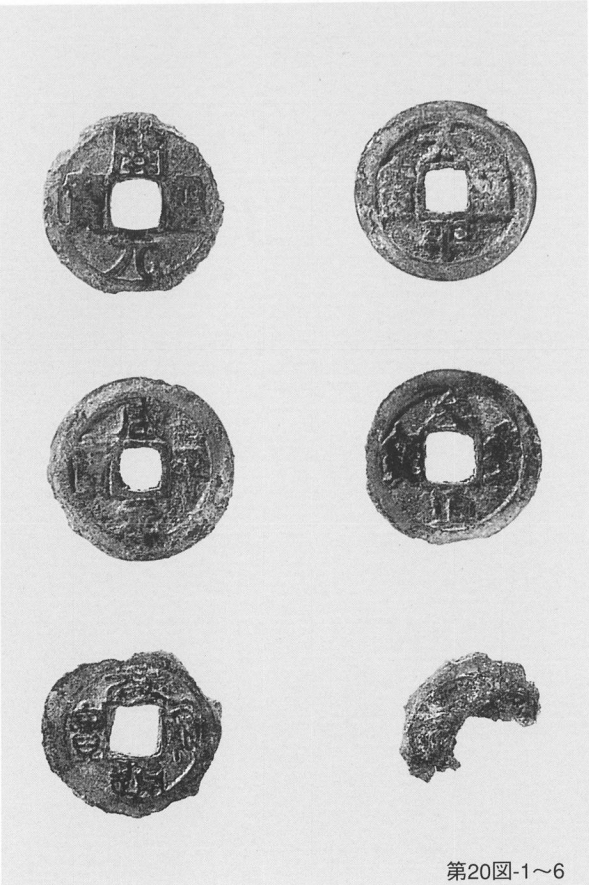

第36図-3

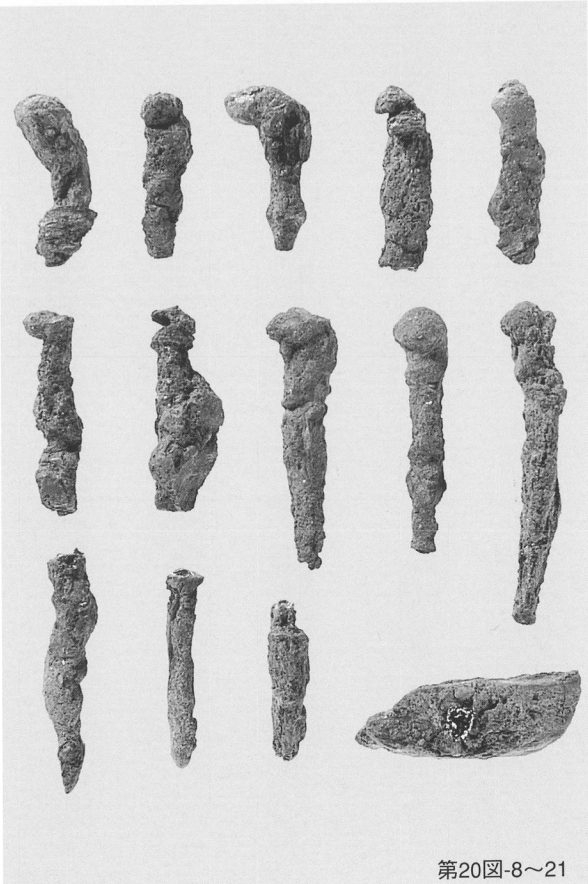

第36図-2


第36図-5


第36図-4


第38図


第20図-1～6


第20図-8～21

内耳鍋・常滑産甕　志野皿　有機質遺物　銭貨　釘

報　告　書　抄　録

ふりがな	かつたいのくちいせき
書　名	勝　田　井　の　口　遺　跡
副書名	平成13年度　勝間田川地方特定河川整備事業（空港関連）に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	井鍋誉之　西尾太加二　伊藤純子
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　　静岡県静岡市谷田23-20　TEL　054-262-4261（代）
発行年月日	西暦　　2002年　　1　月　31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
かつたいのくち 勝田井の口 遺跡		しずおかけん 静　岡　県 はいばらちょう 榛　原　町 勝田字井の口		遺跡番号	34度 46分 20秒	138度 10分 37秒	20010411 ～ 20010628	1300㎡	勝間田川地方 特定河川整備 事業に伴う 埋蔵文化財発掘 調査業務

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝田井の口遺跡	墓域	縄文時代後期後半 ～ 晩期前半	ピット84基 土坑51基	曽利式土器1、称名寺式土器2、 堀ノ内式土器1、宮滝式土器6、 寺津下層式5、伊川津式土器11、 安行式土器3、大洞式土器3、 清水天王山式土器6、樫王式土器2、 注口土器1、粗製土器48 石鏃完成品39、石鏃未完成品26、 打製石斧25、磨製石斧9、 石錘1、石剣2、石皿1、 敲石2、礫器1、石錐4、 磨石1、原石1、石核3、剥片	縄文時代後期 後半～晩期前半 の土坑墓を検出 石鏃製作址
	集落	古墳時代前期	掘立柱建物跡１棟 ピット1基、土坑2基 溝状遺構4基	土師器30	
	集落	中世	溝状遺構2基	山茶碗19、鉄釘1、常滑産甕2 青磁2、白磁1 内耳鍋2、志野皿1、擂鉢1 銭貨6、土師器皿1、鉄釘14	
	墓		土坑墓1基	有機質遺物1	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第130集

勝田井の口遺跡
平成13年度　勝間田川地方特定河川
整備事業（空港関連）に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成13年1月31日
編集発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡市谷田23-20
ＴＥＬ054-262-4261

印刷所
黒船印刷
〒422-8033　静岡市登呂2丁目4番25号
TEL.054-286-0236（代）FAX.054-281-3881